

31  
31

夏期講習會編輯

夏期講習會  
講演集

東京 鴻盟社發行

316-21  
13-4731

清  
子  
次



四  
活  
三  
十  
四  
年  
夏

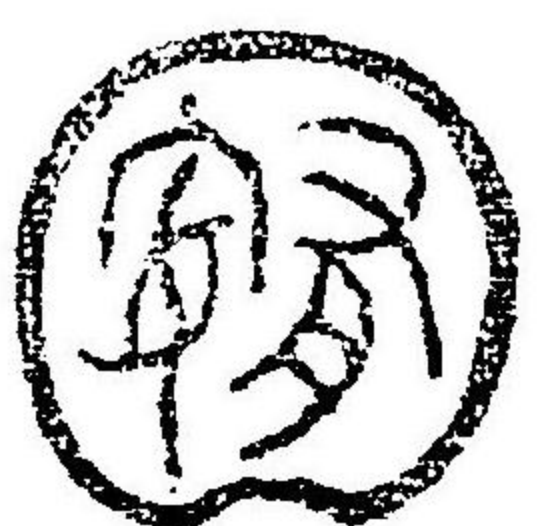
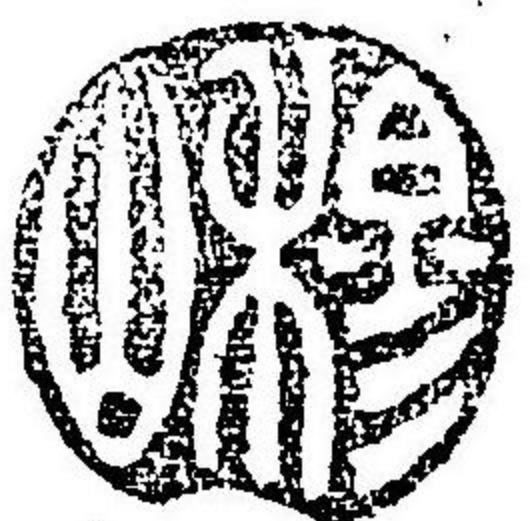
永  
平  
性  
由



修  
母  
与  
解

大内講師頌古提唱

夏期講習會に於ける講演を  
蒐録せるものにして、今茲に  
出版する所なり



例言

一本集は、その題名に標示する如く、我同志が發起せる夏期講習會に於ける講演を蒐録せるものにして、今茲に出版する所以のものは、以て會員諸氏の参考に供すると全時に、種々の事情に因り講筵に列せざりし諸氏の希望に應せんがためなり、

一本集に蒐録せる所のものは、大内講師の宏智禪師頌古提唱を除くの外は、皆是れ學友文挾廣文君の速記に成り、更に各講師の校閲を経たるものなり、

一前項に記する如く、各講師の校閲を経たるものなれば、その主旨に於ては誤謬なきを信ずるも、多少魯魚の誤りなきを保せず、是れ余が校正の疎漏に歸するものなれば冀くは累を講師諸氏に及ぼさざらんことを、

一本集に蒐録せる宏智禪師頌古提唱は、大内講師病症のため、講演豫期の如くならざりしを以て特に先生に請ふて、茲に掲載せり、

一本集に於ける各科の排列次第に就ては、別に他意あるにあらず、編者の便宜上に

過ぎたるも、只大内講師の「夏期講習會に就いて」の一篇は、本會開設の微意を遺憾なく演せられたるものなれば、特に卷首に蒐録せり、

一 洞山五位説の原稿整理に就ては、大學林教授梶川乾堂師の助力を受くること尠からず、茲に記して感謝の意を表す、

一本集の校正及び裝釘等に關しては、會員諸氏の意に満たざる所あらんも、是れ皆余が淺薄なる學識と乏しき經驗とに因るものなれば、冀くは累を他の委員諸氏に及ぼさざらんことを、

明治三十四年十月下浣

虎溪 峰 玄光 識

曹洞宗青年講習會講演集

目次

夏期講習會に就いて	大内青巒居士
洞山五位説	直心淨國禪師
臨濟録四料簡	釋宗演禪師
修證義大意	大内青巒居士
宏智禪師頌古	大内青巒居士
禪宗史要	鷲尾順敬氏
社會學綱要	浮田和民氏
倫理學綱要	中島德藏氏
曹洞宗青年講習會記事	
曹洞宗青年講習會名簿	

夏期講習會講演集

夏期講習會に就いて

大内青巒居士述

(文挾廣文速記)

サテ今回承りますれば曹洞青年の方々が夏期講習會を年々開かるゝと云ふことに爲つて、今日が其發會式を舉行せらるゝことであるが、私にも本年の講習會には何か一席の講座を受持つ様にと云ふ兼ねての御請求があつた、是より以前當學林の有志者が修證義の話を聴きたいと云ふこともあつた故、即ち其修證義の講話を講習會の講席に持つて來たならば都合が善からうと云ふことで、本月廿七日以後僅か五六席の間に修證義の要點だけをお話致す約束に爲つて居ります、實は先月中旬中國地方へ参り本月の廿三四日頃でなければ歸京することが出来ない日割に爲つて居つたのでありますが、然るに病氣の爲め止むを得ず二週間はかりの日割を断りまして途中より歸つて來ました、そんな都合で今日發會式に出ました譯で兼ての日割通りにならず立ち戻つた様であるから、私も疲勞が甚しいので、トテも充分なお話が出来ないがまかし何か一條のお話をするよ云ふ約束を致して置きました故、\*の御挨拶だけに少しお話申します

只今前席に講習會開會の趣意やら希望やらいろいろ話があつた、それに就て私が考えますに一昨夏期講習會と云ふことは何が原因であるかと云ふに、先刻も其の話が一すあつた様であるが、佛教界には釋尊在世の當時より夏安居と云ふことが慥かに行はれてあつて、其夏安居と云ふことは何より一昨始まつたかと云ふと、今更私が講釋するにも及ばん佛教専門の方々は既に御承知の通り、天竺では夏期に於ては非常の雨、日本では梅雨と云ふて三十日の間としてある、アチラでは梅に關係しないが永い時には四五ヶ月間も車軸を流す様に降り續くと云ふ有様で、ソ、云ふ場合には如何なる熱僧でも撥草參玄の行脚は出来ないから止むを得ず、一の場所に集まつて安居と云ふて、文字通り靜かに休養すると云ふのが夏安居と云ふことである、それで今夏期講習會と云ふことは、ド、かど云ふと夏期にあつては暑熱の爲に平常に取る仕事は充分出来んことになつて来る、尤も日本では昔は夏期に休業すると云ふことは無かつたが、實際の處では中々冬期よりも夏期の方が身軀の爲には害が多い、それで今日では追々と夏期の熱い時は、休むと云ふことに爲つて来た、サテ、休んで居つて見ると思ひの外悪いことは仕易い、此夏期休業中を無益に過すと云ふことは、誠に所詮のないことであるから何か趣味ある高尚な話を仕合ふと云ふ處から、茲に夏期講習と云ふ様な西洋流義の仕事が始つて来た、佛教界で申す處の夏安居と當さに其筋合を同うして居る、そこで西洋流義の夏期講習が、コチラの方へ流行して来たのは尙近頃のことであるが、天竺流の夏安居は昔から佛教界には何れも傳つて来て居る、先刻も本願寺には既に夏安居のことも行はれて居る話もあつた、其他律宗の如き律を守る僧侶方は、たと

ひ形ばかりなりともする様になつて居る、其中で尤も嚴重に儀式的に設けてあるのは此曹洞宗である、此曹洞宗には夏安居ばかりでない冬安居も行ふて居る、ち話が少し支派に涉りますが冬安居を勤むることは大清規の上にも見えな、曹洞宗で、イツ頃から始めたか解らんが孤雲禪師の首座となられしは十月であるを云ふ處を見ましても、高祖の代からあつたらしい、大清規の上には明かに見えませんが兎に角登山清規の上には見えたと云ふ、成程高祖の代には規則として定まつてはない、近頃に至つて即ち徳川以後になつて夏冬の安居に規則を立て御承知の通りそれに依つて寺の資格まで定る、のみならず僧侶の資格の上にも入衆とか立身とか法幢を取るとか却々喧しく爲つた、之を他から云はせると曹洞の弊風三出世と云ふて、アマリ規模にのみ片倚た處を評したのである即ち臨濟なぞからは、ソ、云はる、有様に爲つた、之れを今しみくと元へ立ち戻つて考へて見ると一昨禪宗と云ふ宗旨は妙な成立ちの宗旨である……凡そ世の中に理想と形式と云ふものは此二つは互に伴ふて行かなければならぬのである、然るに禪宗と云ふ宗旨は理想の上には勝手氣儘自由な話である、達磨が不立文字教外別傳を唱へ、それを元として、殊に唐朝以後と云ふものは勝手次第に理想の上では何の様なことを云ふても差支えない様に爲つて指筆鐵槌、拂拳棒喝、手に任せ拈じ来るに不是あることなしと云ふて、擧げ様と抑へ様と法に於て變りが無いと云ふ様なことが、禪宗の理想と爲つて来た、それであるから庭前の柏樹子とか乾屎橛とか云ふて、佛を禮拜しようとして佛を打ち潰さそうと、撫でようとして勝手次第である、之が禪宗の理想である、若し此儘に勝手次第な理想に打ち任せて置いたならば禪宗程亂暴な宗

旨はない、爰に於て百丈禪師が叢林の規則と云ふものを非常に嚴重に設けられた、即ち極くその氣儘自由な理想を極く嚴重な細かい形式に現はして往くと云ふのが、之が禪宗に於ける理想と形式との關係である、それである故禪宗と云ふ宗旨は百丈禪師出世以來は極く嚴重な儀式作法と云ふことが行はれたには相違ないが、追々其眞意を誤つて來まして遂には只形式ばかりに爲つて只猥りに拂拳棒喝を振廻はす様になり非常な亂暴に陥る様な弊害を再び生じて來たものと思ふ、此等の歴史は此度禪宗史要を講ずる上に於ても或は出るかも知らんが私は、考へて居ります、凡そ物一利あれば一害がある、利のある處には害の伴ふもので、形式と云ふものは誰れの目にも見え耳にも聞ゆるのであるから、此方は少しでも亂るゝことになる、側より喧しく云ふ様になる、たとへば今日に至りましても皆さん方が朝夕の鳴らしものに就て、大鼓の打ち様とか雲板木魚の鳴らし方とか、或は坐作進退に就て袈裟の掛け様とか、法衣の着ようとか、凡べてそんな儀式になると誰れの目にも見え耳にも聞ゆる、渠は上手であるとか下手であるとか、イヤドーも今じや馬鹿々々しい話であるが、昔て云ふと彼の加賀の三刹と申して大乘寺流では經のウナリ聲に三つゾ、ゆするとか、寶圓寺流では、コーだとか中々喧しい斯様なことは目にも見え耳にも聞ゆることであるから勝手次第な理屈を云ひ合ふことも出来る、そこで之を嚴重に守ると云ふことになる、ソ、爲つて來ると、只形式ばかり守ると云ふことに爲つて自由の働きの云ふものは無いことになる、即ち理想の方は、ドーかと云ふと、之は目にも見えない耳にも聞えない、腹の中に、ソ、考へがあるか解らん、只形式の上では坊さんが法堂に進んで立派そう

拂子でも振つて咄とか喝とか聲とか云ふもの現はれた形の上では大分偉い悟りでも開いて居る様に見える、その腹を探つて見ると大抵は聲とは何のことであるか、咄とは何のであるか解らんのみならず何處へ咄や聲をつけて善いかも解らん、ソ、ナ詞の文字の意味であるかも分らんと云ふ和尚様さへある、先づ一般理想と云ふものは頓と分らんと云つても善い、全鉢禪門の眞意は極く氣儘な高尚な理想を、正しき形式の上に現はして往くのである、と云ふことは前に申した通りである、然るに只形式ばかりで理想が無いとすれば、ソ、今日の様な現状を見るのである、此頃少し寺格のある隨意會とか常恒會とか云ふ様な寺に往つて見ると、堂頭和尚と小僧、それに首座和尚と其他は下女か下男、奥坐の方には内證に奥様が御座ると云ふ鹽梅、總じて五六人、それで朝は夜の明けぬ中から太鼓を叩いて點を掛けて居る、ソ、ソ、する中に大鐘を鳴らすと云ふ様に、首座和尚却々忙しい、それから臺所の方へ走つて往つては雲板を叩く、その内に首座和尚と小僧で佛生迦毘羅を、ウナリ出すと云ふ、その、ソ、も隔て、聞いて居ると、少なくとも二三十人の雲衲が居らんければ出來ないと云ふ様な仕事をして居る、その遣り方がまるで理屈も、ヘ、マ、もあつたものじゃない、それでその和尚が曰く、當山に於ては是れでも鳴らしものだけは止めない様に居りますと、自慢顔に話をして御座る、何んのことだか更に分らん、之れが今日曹洞宗一般の有様、否全豹と申しても善い、何んでも坊さんと云ふものは形式にばかり依らんければならんことと思ふて居る、昨日も或る人とそんな様な話が出た、何か初會の結制に就て禁足を破つたとか破らぬとか、馬鹿々々しい話をして居つた、全鉢禁足と云ふものは何の爲



であらうか、即ち印度に於て禁足と云ふことは夏安居を爲すに就て必要が起つた云ふものは、夏期中はアチラでは雨が降り續いて、木は繁げる草は生へる、その中には非常な悪蛇や猛獸が跋扈して居る、トテモ此間は歩るきたいと思ふても歩るけた話でない、止むを得ず同場所を集つて只管に坐禪辨道を爲すより外ないのである、誰れが禁じたと云ふことはない、天道様がと云へば云ふもの、雨が降つて歩るけなければ仕方がない、ソコで禁足と云ふことにも爲つて来る、その安居を爲すに就て出たり這入つたり、凡その規定がなければならぬ、猥りに違る譯にはいかないから、即ち要期と云ふことも必要に爲つて来る、ソコで結制と云ふことは、要期中即ち九十日間とか四十日間とか、その間と云ふものは是れ／＼を互に守りませうと約束をする、それが即ち結制で、制度を結び立てることになるのである、要期と云ふことは只期間を定むるだけである、斯様に要期結制して夏中安らかに居住すると云ふのが夏安居である、然るに今日只禁足を破つたどが破らぬとかクダラない論評を致して居る、何の意味合だか更に分らん、理想も何もあつたものじやない、只形式だけでそれで曹洞宗の面目が繋げられると云ふ様な有様に陥つたことは、如何にも曹洞宗の爲に惜むべきことではなからうかと思ひます、

ソコでこんな慷慨談に就ての事實は澤山あるが今はアマリお話申す限りでない、只今私は此夏期講習會がそれに生れ代つて、已に虚儀に流れて居る今日の夏安居、只儀式ばかりの馬鹿げた結制は打ち潰してしまふて、此夏期講習會が本當に成立し完全に備つた規律が立つて往くことに爲つたならば、僅か二週間でも三週間でも

も本當の要期結制が出来て、夏安居の實を擧ぐる事が出来ようかと思ひます、成程之を宗制の上からは只今はそれをド、ドする譯にもいかんであらうが、それはそれとして、そんな虚儀な仕事は棚へ上げて置いて、實際に此夏期講習を行ふたならば、即ち釋尊以來二千何百年傳つて來た尊い儀式、今それを虚儀に流れて無益に屬して居る夏安居を惹起することになるのであるから、釋尊に於かれても、高祖に於かれても、初めに清規をお立てに爲つた真意に適ふことでありませうから、必ず佛々祖々お喜びになるに相違ないと思ひます、それ故私の諸君に希ふ處は只之を一時の慰み一時の面白味にやると云ふことでなく、正しく此夏期講習會は本來虚儀に屬した曹洞宗の夏安居を改良するの端緒であると思はるゝ様に願ひたい、して見ると此講習會は極めて責任の重いことであらうと思ひます、幸ひ此度の處で見ますと能山禪師が御出席下さると云ふことで、そのお話は然かも五位説を御提唱なさることである、此五位説に就ては昔洞山大師が熱血を揮はれてのお示しである、昔に曹洞宗のみならず、今日他家で見ますと臨濟宗に於ては凡そ悟りの奥許るしと云ふことになりませうと、之れにも色々派が分れて居るが、先づ何の方面から申しませうとも愈々結局になると云ふと、五位、最初の處では先づ寶鏡三昧を以て調べるそれが、ア、カ、コ、カ分る様になるとその結果五位の上に就て調らば、始めて師家と爲ることを許すと云ふことと之が臨濟白隠下の家風に爲つて居る、誠に大切なことに爲つて居ります、是れに就て考えて見ませうと話を少し前後致しますが、コチラに於ては五位と云ふものは平常讀みませんが寶鏡三昧と云ふものは能く讀んで居ります、田舎の小僧でも能く知つて居る、托鉢をす

る乞食坊主も此寶鏡三昧をウナツテ居る、時々巡査の厄介になる奴もある、斯様に曹洞宗では何人も口癖にウナツテ居るけれども、多くは何のことだかサツパリ分らん、然るに臨濟宗に於ては朝夕寶鏡三昧を讀んで居る人はいないけれども、其宗意を聞いて見ると確かな提唱をして居る、斯の如く同じ派、同じ禪宗と云ふ宗旨の上に於て、アチラに於ては寶鏡三昧を實地に應用して居る、コチラではまるで虚儀、今日の讀經は寶鏡三昧で略して置かうなど、云ふて時間の都合とお布施の話に爲つて了ふた、其他皆虚儀に流れて居ることは申すまでもないのである、幸ひ今度は能山禪師が御出下され、寶鏡三昧をラ、ン、ビ、キにかけた様な五位を御提唱になることであるから、曹洞宗専門の宗意も充分お分りになることであらう殊に出家分上の辨道修行の上には廣大な利益もあることで、此提唱の上には、何も彼も盡さるゝことであらうと思ひます、亦私も驥尾に附て修證義を讀んで呉れいと云ふことに爲つて居る、で此修證義は昔に出家のみならず出家在家共に通ずる處の傳戒相續の側、書物では僅かな簡單なものであるけれども、今一々講ずる話になると、五席や六席で布教の上に實際に應用するお手本となるまで、辯ずると云ふ譯にはいかない、只此修證義を以て如何に在家を化導して行くかと云ふその扱ひぶり要點だけを話すに過ぎない、チヤウイ藥と云ふものは藥種屋に澤山ある、それを調合の工合に依ると、直ぐに腹を降すことも出来るが、亦上げせさすることも出来ると同じく、修證義と云ふ書物は僅か三十何節であるけれどもその中には色々な深い意味合を含んで居る、今之を在家布教に用ゐてその調合の仕工合に依て何の様なき、を現はすか、その扱ひぶりに就て大要を申述べて見たい

と思ひます、曹洞宗で多くは説教を致して居るのを見ますと、實際に應用が出来ないで只修證義を讀みにのみ讀み上げて居る、あれは讀題集ではないのである、それをまる／＼讀題にはかり用ひてそふして三十何節皆別々の話に爲つて了ふ、ソ、別々に爲つて見ると大黃は大黃、甘草は甘草、と藥種の名を數えるだけの様な譯で、藥のキ、メ如何の詮議するのでも何でもない、今はそんなことでなく、三十何味を集めた修證義、之を甘く調合して直ぐに他に特有なる曹洞宗の在家化導の藥法が調劑されなければならん、然らば修證義を、ト、扱つたものであるか、今諸君と共に此扱ひぶりに就て御相談申すことは大に所詮のあることであらうと思ひます、尙文字の講釋などは諸君が讀んでも分る、要する處、懺悔、受戒、發願、行持、此四ヶ條に於て何が中心と爲つて居るか、ト、云ふ風に論斷して應用したものであらうか、その扱ひぶりに就て諸君が呑み込めばそれで善い、そのことは廿七日以後の上にお話であるが、ト、テモ九牛の一毛だも盡すことは出来まいと思ふ、只大要だけに過ぎない、殊に病氣中のことであるから充分な譯にはいかない、先づ是れでお話置きますが、只私の考へは今日發會式に因んで夏期講習會が將來益々盛んに爲つて、此曹洞宗に於て尤も肝要なる夏安居結制江湖會の改良の端緒ともならんことを願ひたいと思ふて、その考を一言申上げた次第であります、

## 洞山五位説（不能語）

直心淨國禪師御提唱

（文挾廣文筆記）

扱て此の、五位に就ては、いろくど、思ひくゝの事を、申して、講しますが、私共の、わかいつ分には、そんな五位説は、取るべき者でないとか、御開山の本意でないとか云ふて、取らぬ人も大分あつたが、その人の、平生の左右を見ると、五位偏正圓融の道理を活用する事が、どうしても出来ぬ、御開山が五位を、云はない事を口實にするけれども、夫れは甚だ間違で、御開山の書を拜覽することが、淺いので、全く洞上の宗風を究めない人の事、又洞上の五位の眞意を、研究する事の出来ないので、自分は自分で、得たりとして居つて、そうして自分の不得手の所を抛つて、即ち自分の氣に入らぬ事は、研究しない、そういう人たちは、到底此の五位説の、分かる筈はない、夫れは百姓主義である、成る程氣に入るとか入らぬとか云ふ事は、研究した上に、害のある所を見たとなら、よいけれども、自分で、嫌ひだと云ふて捨て、おくのは、酒飲みが、甘いものを嫌ひ、下口が酒を、わるく云ふのと同じである、一鉢、御開山の、五位に對する、非難は、夫れは、深意のある事で、春秋卷に、『佛法モシ偏正ノ局量ヨリ相傳セバ。イカアカ今日ニイタラン、』と云はれた、此の一言を聞いて、開山の深意を知らぬ者は、いつも誤りを來たすのである、彼の淨因枯木禪

師と云ふ御方は、大變此の五位に就ては、警めて置かれた、全躰此の五位と云ふものは、洞山大師の御説であるが、洞山の歿後、いろ／＼の弊を生じて來た、丁度六祖を距る事僅かにして、六祖壇經を、大ひに後世の攪入だと云つて、非難する者があると同様である、誠に洞山を距る事僅かであつたが、五位に對する弊害が起つて來て、いろ／＼の説が出て聞くに堪えない程である、宏智の全躰の廣録を見ると、五位偏正の相互の道理にありては、誠に明かなことがある、

又五位顯訣と云ふ者があるが、これも中頃絶へて、仕舞ふた故、明の永覺が洞上古轍を書いたけれども、大いに主義が異かつた、洪覺範の石門林間録にも、五位の事があるが、此頃すてに、五位の名を間違つて居つた位で、洪覺範が改められたが御開山の本意は、古るい處にあります、そこで、洪覺範の五位に對する事は、石門の文字禪の二十五卷十五丁の處を御覽になると、題雲居弘覺禪師語錄と云ふ文があるからそれを見れば解る、雲居と云へば即ち私共御互ひに、その門下の者である、

一寸因みに語すが、曹洞宗は、全く曹山洞山の名を取つたと云ふのは、夫れは、御開山が誤つて居る、曹溪の流れを汲み、洞山の宗を振ふと云ふ所から、曹洞宗と云はなければならぬと云ふ事は、夫れは、五燈會元にも書いてある、そこで、曹山と云ふ詞は、甚深の意味がある全く曹山と云ふ詞は、曹谿山を指したのである、御開山が、曹山の曹の字に、御仰つた處は、御開山と雖も、此は諸記の失で、そう云ふ事はいくらもある、

前に云つた雲居は、洞山の弟子であるけれども、五位などの事を引く事は更にない、それは石門の文字禪にある、けれども、雲居は五位の宗旨を得て居る、一躰五位偏正の理を論ずるに就て、白黒の書を書いたり、色々の區分けをするはそれは誤りです、正位は本來無物であるとか、偏界不曾藏であるとか、そんな規則を立て、彼れ此れ講釋して居るのは、ホンのおもちゃ、糟粕に過ぎない、大躰五位の宗意を知らないといふ大に弊が起る、御開山の心配せられたのもこゝにある、しかしながら、御開山は五位顯訣などをお用になつて居られたには相違ない、此の五位の事は、彼の洞水和尚が四十年間も苦んで大に明かになつた、支那では明の永覺が洞上古轍と云ふものを奮つて書いた、一躰永覺と云ふ人は、あの時代には、外宗内宗ともに、廣く學んだ人で、此人に續づく人はなかつた、夫れ故、永覺の書は、分つても分からぬでも、本當の者として仕舞ふた、夫れ故、長崎の玄光は、永覺流になり、彼の月舟卍山の様な人でも、五位の名を間違ふて居つた夫れは何んであるかと云ふに、永覺がエライ爲に、夫れについで、學問をした人がない爲に、その五位に對する誤りを、糺す事が出来ない、そこで洞水和尚は、元字脚を書いて、振つてその弊を矯めた、けれども其後又五位の弊が起つて來た、物盛んなれば弊起るです、併しながら、私共若かい時から、洞山の五位に就ては、疑ひを起した、それと同時に、洞山の様な御方であるから、亂りに五位を云ふたのであるまいと思ふ、全くの疑ひは洞山の意を合點しないからであるからと思ふて、殆んど、茫然たる有様であつた、殊に指月和尚も心配して、不能語を書き、洞水和尚も元字脚を書いて、四十年も苦しんだと云ふ、夫れ等に就ても餘程の深

意のあると思ふて居つたが、先年赤痢を病んだ時、見舞も来ず、人と交際もせず、只だ腹がくだるばかり、外に何んにも仕事がないから、夫れを、寝て、見たが、私に取つては、全く此れは、赤痢の餘光を以て、見ることが出来たので、能く研究はとよかないが、成る程御開山の仰せられた、春秋卷に『佛法モシ偏正ノ局量ヨリ相傳セハイカテカ今日ニイタラン』

の詞に就て感じた、けれども御開山の意に於ては、全く五位を、はづれぬ、即ち如來圓融の法門を、はづれない、夫れは一言申すと、作法是佛法と仰せられたり、或は、人事陀羅尼と仰せられたり、皆是れ五位偏正の道理を以て、仰せられてある、即ち世法の外に佛法はなく、佛法の外に世法はない外の人の様に、正に對して偏をならべたり、偏に對して正を云ふ様な譯ではない、即ち對せずして對し、備はらずして備つて居る、今の人の様に、生滅と云へば不生滅と云ふが、そんな事を云つては、いつまでも論がひない、全く正と偏と並らんで居らぬけれども互に備つて居る、先づ今日豆なれば、豆の種と云ふ者は見えぬが、私は芽を吹き出す物であるとも、私は芽を含めて居る皮であるとも云ふて、挨拶はしない、挨拶はしないが、皮の中に自から芽はある、

即ちわれ／＼も身心一如と云ふて、私がかで御座るとか、私がからだであるとか、互ひに應對したと云ふ様な事はない、ちやんと對せずして備へて居る、

夫れに就て身心一如と云ふ上に、いろ／＼と議論があることと、御開山も、随分八ヶ間敷仰せられてある、

全躰此の身心とは、心によつて身がはたらくとか、身によつて心をなすとか、身がなくれば、心もなくなるといへば、斷見に陥ひる、夫れ故へ、身で業を造つて行くと云ふ場合には、因果説を云はなければならぬ、中には、そんな事は、馬鹿な話したと云ふて、けなす者もあるが、夫れは甚だ宗意を知らぬので、深く此の人間と云ふ者が、默識心通で、能く考へて、參究しなければならぬ、古人は釋迦であらうが達磨であるうが、うそはつかない、祖師方も、いろ／＼と御示しになつてある所を見れば、深く研究して見なければならぬのである、身心一如と云ふも、身心脱落と云ふも、ちやんと道を分けて修行すればよいが、脱落といへば、何にか煩惱も起らず、飯も食はず、小便も出ない様に思ふて居るが、そんな馬鹿な事ではない、又因果といへば、何か未來に果報を得たいと思ふのは、是も妄想です、こゝが修行の要る所、妄想にも墮せず、因果も味まらず、未來も思はず、身心一如の道理にも墮ちざる境界になるが最も大切で若し夫れでなくば、私共始め八十餘にもなつて、頭を光らして心配するにも及ばぬのである、私共は今日の學問は、どうであらうが、そんな事はかまわぬ、又佛が笑ふと達磨が笑ふと、夫れは、こつちの修行には、あづからぬ、皆さんも此の修行と云ふ事を能く合點してもらいたい、わしは、只だ思つただけの話しをすれば、よいのである、夫れで五位説と云ふ者は、後世になつて何故に弊になつたと云ふに、洞山の問答に、寒暑到來の時如何が回避せんと或る僧が問ふた時に、無寒暑の所に行けと云はれた、そこで又僧の問ふには、無寒暑の所如何が回避せんと問ふた時に、寒の時ハ閻黎を寒殺し熱の時は閻黎を熱殺すと云はれた、かう云ふ問答の例に就て云ふ

と、多くは正偏に掛けて見る、即ち寒暑到来如何が回避せんと問ふた時に、無寒暑の處に行けと答へられたが、正位だと云ひ、寒の時は罔黎を黎殺し熱の時は罔梨を熱殺すと云ふのが、偏位だとして、此れが洞山の五位だと云ふ様に云ひ傳へたものであるから、そうすると偏といへば正と云ふ、正と云へば偏と云ふ、丁度左と云へば右、右と云へば左と云ふ様に、偏正五位を思ふて仕舞つた、夫れ故淨因枯木禪師の語がある云く

衆中商量道 這僧問既落偏 洞山答歸正位 其僧言中知音却入正來 洞山却從偏去 如斯商量不唯謗  
澆先聖亦屈沈自己云云

此れは眼藏の春秋の卷に引てあります、即ち斯様な五位の見方では、御開山が『佛法モシ偏正ノ局量ヨリ相傳セハイカテカ今日ニイタラン』

と云はれて、一代五位を御唱へにならなかつたと云ふのは、此れは全く洞山開祖の再来だと思ひます、そこで又雲居道膺が、洞山の五位を唱へないのは、深意のあることで、われ／＼はその雲居の法孫である、御開山に於ても、五位を表立つて受け継いだと云ふ事はないが、五位顯訣と云ふものは、開山が持つて居られたに相違ない、その證據は、どこにあるかと云ふに、元字脚を調べて見ると、御開山から二三代の間は、傳へられた、ところが、昔しの人々は、あまり法を尊ばれた爲に、中頃斷絶し、夫れから、越後の耕雲訣堂が天童淨祖の南谷庵に輪番に往つて彼方で古るい本の五位顯訣を見出し寫して還つて、種月謙宗大府主張して、雲

月録を著はした、此の時分は五位がはやつた、その後ち又た五位の弊が起つた所が、明の永覺が洞上古轍を著はした、此れは日本の元祿時分、支那の明時代七山面山天桂梅峯和尚時代、頗りに主張した、ところが夫れは、どうも、今日になつて、よくない所がある、夫れで、指月和尚が心配して、非常に調べた、夫れから、又洞水和尚も心配し、此の二人で、五位を擧揚された爲に、その時代は、はやつたけれども、又衰へて仕舞つた、その衰へたわけは、公案の宗風印可の悟りか、はやつて、五位は修行か微細であるから、此の五位偏正を以て試みるも、みんな病を持つて居る、此れは只だ師家の作用の内用ひたものであつて、修行の階級に用ゐるものではない、然るに、中古修行の階級に進ましむの者に用ひて來た、白隠などは間違つて居る、夫れからあちらでも全昧に間違つて、修行の研究の様に思ひ違ひをした者です、その修行に用ひたと云ふに就ては、功勳五位を別に説て居る、此れは修行の階級を土壘にしたもので、功勳の五位は偏位の内で用ゐた、五段の階級を以て修行の方法を示した、正位にはあづからぬ、つまり極處に行けば同じで、得る處に行くと、最後の一關同じ事です、功勳五位は修行をする爲めに説くが、偏正五位はそうでない、此れは、師家の作用上に向つて説いた者で、その事は研究が、とかなかつたと云ふ事は、洞水も云つて居る、洞水も私に云つた譯ではない、曹山洞山の大志格外の玄談、高尚の堂に契ふと云ふ事を明かし、師家の上、作用上にあつて、學人を應接する處に就て、眞劍にちゃんと手許にある處の者で、恰かも人相見が、人間の耳目手足に就て見る様な者で、學人がどの位の行履を得た處のものであるかを見る爲めに師家の作用上に用ゐた、

そこで、御開山に於ても、五位顯訣を持つて來られた證據は、どこにあるかと云ふに義尹禪師は開山の親き隨身その弟子に攝州の方に「淨熙」と云ふ人があつた、洞上傳燈を御覽なさい、

玄翁は總持峨山の嗣で、玄翁の弟子の「齡山」の處にも五位の事を云ふてある、開山の時分に五位が渡つてあつた事は、それで解かる、開山は五位などにかゝはらず、その道の向上なるとは、「荒田隨筆」に永平は六代已上の見識を以て見なければ分からぬと云ふてある、六祖已下に至つても、百丈に至る迄は、公案を授け、機關を設けて接することは少くない、所が百丈已後宋に至て機關がはやつた、外か諸縁を息め萬事を放捨して内心喘ぐ事なく六塵の境に對して第二見を生せず、事に臨んでも、逡巡する事なく、死に臨んでも、恐るゝ事なく、凡べての諸縁に轉せらるゝと云ふ事のないのが、此れが修行の目的である、修行が、ちゃんと定まつて居れば、ひつくり、しゃつくりはしない、向ふで惡口云はうが、心配しやうが、そんな事は、かまはない、向ふの了簡に任せて置いて、實際の修行が、とゞけばよい、夫れで先づ五位の事は、御開山が用ゐぬと云ふ趣意も分つたらうし、五位の顯訣を持つて御座つた事も、此れは洞上聯燈録を見れば解かる、夫れで私も、若い時分から、曹洞宗に於ての五位と云ふ事は、知らぬと云ふ事は不都合であると思ふて、大いに心を用ゐた、先づ大鉢五位と云ふものは、どんな者であるかといふに、却々自由自在である、これは誠に空中に繪を書いた様な物で、無形の物に圭角がある所、圓融無礙の所、實に能く書いた者です、圓融無礙と云へば、事々無礙法界の事を、華嚴では説くが、四法界の中である、ところが、五位に於て、兼中到の一位

と云ふ者は、四と云ふ者には對せぬ、こゝが實に他に秀出たる洞山の見識である、臨濟にしても、四料簡と云ふて對して居る、それでは、どうも働らきと云ふ者が無い、今五位の兼中到の一位と云ふものは、華嚴の四法界を、運轉して居る、そこで寶鏡三昧の中にも、寶鏡に臨んで形影相覩るが如しと云ふてあるが、指月和尚の釋は三譬としたは親くない、此は而山和尚の吹唱は調べが、といいて居る、洞水和尚の元字脚を調べて見ると、あれは、寶鏡の喩、嬰兒の喩、六爻の喩、葦草の喩、金剛杵の喩を、五位の喩として引いてあるが、これは永覺の意見を破つたのである、永覺は儒者である故、大變な勢で講釋して居るが、離の卦に拘泥したからいけない、それは何故とかと云ふに、大圓鏡智等の五智に合昧して居ない、

夫れで因みに申して置くが、大鉢書物を見るに就ては、先づその著はされた人の、生涯を見て後でなければならぬ、今は不能語五位説であるが、夫れは誰れが註釋したかと云ふに、指月和尚であるが、この指月和尚の生涯に就ては、誠に敬服すべき事であつて、品行と云ひ、修行と云ひ、學問と云ひ、氣概と云ひ、實に禪宗坊主としては、珍らしいのである、なぜなればと云ふに、此の指月の時代には、學問をするものは、學問坊主と排斥されて居つたのに、種々に學問を研究し、學者と云ふ者は、誠に馬鹿／＼しい事であつて、いつも閑室に閉ぢ籠つて、字引を引いたり、いろ／＼して、苦るしんで居る、夫れを又覺えた事を、根氣強よく人に話すと云ふ様な工合ひで、マ、價值も何にも見えない、全く指月時代には、坐禪でもして、居れば、それで、修行が出来たと云ふので、大名寺へも住職する事が出来、安心に寝て居らるゝのであ

つた、ところが、指月和尚は、學問坊主と云はれ様が、何んと云はれ様が、大志を抱いて、充分な悟りも得、充分な學問もし、充分な著述もある、殊に著述などは、餘程する積りであつたと見えて、千字文で始めた位で、此の天地玄黄に依つて、法華の註なども書いた、此れなどは、一句半句誠に偉いことを云ふて居る、洞水和尚も許して、縦ひ天台大師と雖ども、此の不能語法華には及ばぬ、三千年來の著述であると云ふ位である、これは斯様に、えらい人で、其人が五位を解釋したのであるから、實に至れり盡せりと申してよ、

先づ斯様に書物を見るには、其書いた人の、人間の生涯を調べて見て、その人の性格に依つて書物を見るがよ、

總 訣

五位之作。至矣盡矣。言象不多。以總諸法之本末。究生佛迷悟事理之蘊奧。而圓義用乎名題。見德相乎分位。初後内外。含攝無窮。其猶春和之萌動物。冬威之歸藏時。和之與威。誰越其竟。豈得以邊邪見。而闕闔焉哉。蓋是設也。不專爲功之進修。正明從上物體現前。尅叙東西密付之道而已。然

其立言詮義。有大所則。謂本於靈源支派之明暗。具同互。不同互。同不同交涉之義。會於正中妙挾。有類不齊。混知處之玄要。其會要意。不拘一途之名義。據內教之五相。叙乎理義。假外典之道。而疊變名位。但飲乳不論水。固驚王能之。於是乃以定是法位。而是法住是位。卽是世相之常住。而本爾者也。詎用安排。唯衆人不知之。洞山獨知本爾。今破塵指示焉耳。不創造。可謂維邦之舊服。只新其命。嗚呼。世有不狀徒。以爲五位非洞下人。則不曉也。噫。果如所言者。止終私暱已。豈足爲弘法度物之道乎。譬諸有人登泰山。偏見一小魯。言今吾所蹈處。特見魯者知蹈。豈夫理哉。當及之天下。盡與見天下而可矣。凡言宗家者。道之賊。所言疊變者。疊重疊也。謂卦有六爻。兼三才兩之。今就本重疊離之六爻。一兩三六。其用也何。謂正之偏之中之。是以位位成三字名。名卽實。發一位宗。見者莫忽諸。其餘多義。盡布于舊說。變變易也。謂同互重離之六爻。正偏互易位



更體及其變盡成五卦也。而疊變之說。自古數家。各由所長短。隨而是非。今若效此。辯無益也。長措人有之地。是非無主。宜唯歸宗祖意。訣擇正偏回互大意。夫五位者。當先解正偏是何義。而以知其中自有回互等宗也。正者無他。以唯一切諸法畢竟解脫。而分別之所不能解。凡言辭相性皆非。本來不動之住位矣。是故。假不動位以用名正。偏者亦無別唯諸法畢竟解脫之性相生佛迷悟等法。所逢成是。是故假傍位以用名偏。蓋於一究竟。有此二法。言諸法常寂。則一切盡正。言常寂諸法。則一切盡偏是。則靈源支派。互爲主賓之關鎖也。故爲常明常暗之宗。難爲分不分。謂難爲之宗。爲之類不齊混知處已爾。則正偏自在分不分。不是造作法。故曰不屬迷悟。又不自然。故曰天真而妙。所以妙者。正究竟故。全是偏而圓於兩意。偏究竟故。全是正而亦圓兩意。是則明中暗暗中明。會夜半正明。天曉不露之宗。卽以正偏偏正互具之不可已。有初二位發回互宗。既有互具。則主

伴有處。正究竟故唯成正正外絕對。偏究竟故唯成偏。偏外匹緣。是則明暗相對各知一步。乃會類不齊混知處。此分對理自定。卽以之立來至二位。發不同互宗。已有回不同位。止是之已乎。豈無所約。蓋又不自外正偏究竟非正偏。究竟但正偏。遂無具分之義所投也。取是及非止言之地。立兼帶位。兼帶圓收義也。圓收無外。唯五全似也。是故。五位總乎中名。中者。畢竟無諱無變動。回互非。不同互非。圓收尙非。非故能具三義。於是要約五位唯一。全收回互等三五位唯一。無出正偏。五位唯一。在是法位。是法自在。一而具五。如莖草味。有而難見。如金剛杵。位位宛然。是二隱顯。互致妙用。當言莖草杵金剛味。二物不二。唯一嬰兒。此兒五相完具不能也。不能之作。有如無。無見相。故又當稱莖草兒。金剛兒。而體用皆完具于斯。五味五股。無相有相。共入一相無相。是一無相卽爲不能五相。所以敲唱竝具。正中妙挾也。洞祖妙以三譬終歸於一。於此一分位義。意深矣哉。苟不

體於斯意。三譬爲重累。又三譬有各義。如鑿鏡註說。宜與之文參看。今以不能義解五位。蓋諸法自住。常寂而全從本來不起之相。不起故不滅于其中。不滅相寂爾而住。如一草不起相。而五味條然不紊。又金剛。其體唯一。五股行布其用亦別。是嬰兒相不能起。而起相不味。諭諸正位正而全偏。正具偏圓兩意。不起起嬰兒。諸法本來如是而住。是住無所著。如五味常在。其處只一顆而不見分。又金剛枝用。常有處分。而逐歸一體。是嬰兒相。不咬破米粒。得休糧方。似住不能。諭諸偏位偏而全正。偏具正亦圓兩意。住不住嬰兒。諸法從本無所從來。其於無比不可觸。而其妙德。有在其位。洪總萬方之道。雖總。遙異群衆。如總五味不墮分者。唯獨自明。不可以辛酸論。又金剛不生全體。獨一絕對。是嬰兒相。如來而不能也。諭諸正之妙德。實不來無不來。獨尊無二。不來來嬰兒。諸法本來性相常宛然。本支須歸其宗。然實無所去。如五味之功能。不讓其分自保安。又五支用。只處其位。

是嬰兒相。如去不去。諭諸偏之大用。常弘聖道度群生。有所歸不改其位。去不去嬰兒。諸法畢竟諸法而已。何言當之哉。已曰不起。夏何言。已曰不住。夏何言。已曰不來。夏何言。已曰不去。夏何言。其有所會而總曰不語乎。或其有所獨立而爲不語乎其非矣。或可言不可言之謂乎。爲謂則亦非也。但當言如葶草味金剛杵。而效嬰兒。彼嬰兒無自所定。效語於諸法。而又習焉。效故似。習故未正。習故似。效故不得物。其未正不得義亦唯從外焉。唯從外以名不能。不彼不能者。自爲不能焉。諭諸兼到之不依不改。而唯爲諸法兼到是以三譬兼到。而爲一爲三以爲五。而遂無始末分合之可定格。亦唯不能語無舌語而已。諸法畢竟體于此宗。十方智者。入于是宗。回互直爾。豈有二途。但能蕩知見之偏執法愛。而固爲嬰兒行。經說嬰兒行。如來五相。又說若見諸相非相。卽見如來。莫動著。水到渠成。且道嬰兒何日長大。而今人人大小。責它不如自責。於是自責。此四大路生死中。隨

鼻息移前後步。坐臥經行。夏誰謾欺。及自成長連牀上不啞人。而些子說話間。見佛向上人。稟劫盡空處氣脈。出脫露柱之胞胎。竟究窮極。非去來今。可謂玉鳳金鸞。翱翔無影樹上。須知諸法本有。同互去則印住。住則印破。不去不住。虛空著楔。鐵牛機休分踈。

疊變之有異義。不暇評議。是非已在人口。彌見人情不平。而真法衰弊。若有通爻象大義。而明宗猷者。只協贊是道。不須諍辨。之和會之蓋言也。有所疆界。而義也無所戾止。故順義辨事。所睽皆通。每事取言言。者亦反之。遂不可合。若得其言乎意通于此宗。則吾常所俯仰屈伸。盡爲疊三變五之轉側也。吾疊變吾重離。而曾不謾今吾全體全用。無向無背。不見傷犯。是則正也偏也。中也。萬法何不疊倚于此。今吾特牛生兒。是正中偏。今吾羚羊掛角。是偏中正。今吾長年不出戶。是正中來。今吾僧堂前相見也。是偏中至。今吾何作何言。事無作無不作。無言無不言。當頭正面與諸法。一

異。豈不兼到。東西南北無不可。於是二草二木。齊爲莖草。爲金剛。唯爲我混身。重離本非卦爻。五相豈隨巽兌筌筭哉。世只見人從橋上過。尙疑橋流水不流。有五位之可。一言而幾乎。者裏是妙峰孤頂。

或問若如所言者。卦爻疊變不足作乎。曰胡爲爾。古已有數說承之者。徒事乎其事。不以玄悟流如占卜術。遂爲諍亂端。無益于濟世。設如斯者。不若無是而退約。已謹念永平之意。在杜其泛濫。返源脈。仍舉枯木。天童一老之語。決唯知上祖正法眼藏。而不可事後世之溷擾。也是予所深懼也。然而經世法言。隨時損益。蓋恒而德者。能之其損也遠。害其益也興。利所以辨義以行權。豈妄爲誣世。又強而抑止之謂哉。今人倦進益德。恐退辨道損己。如此者。遂入不器。無所終歟。是予所深耻也。仍而唱五位義。明是但吾人之本德。曾不他害。希不棄洞祖慈恩矣。抑又不違永平之誠訓。唯在參玄知焉。若夫疊變之說。當依古說知歸宗之旨。

或問。古解。疊變。何是何非將何的從。曰。咸足的從。而成是咸非。何謂也。曰。夫爻象之義。大而至矣。備而曲矣。宏括。囊天地萬彙之形情。故義不啻一。二。而立言之至辭。章結局。其所成隨。心分人各異。而如其面。果遠乎大體。何如不非而因之會于大體。則衆義合轍。猶十日之視天日。誰言一二何如不是。爾則的從在己立會。何如索是非。故衆說皆足。則六爻變動。往來交互如市而然。集散夏易。各隨之得。故云在己鳴於宗徒久效其名。於義則未也。自試覺範。笑行策。短鼓山。疑顯訣。不如自不到之過之正。汾陽和尚道絲毫動則差。

扱て五位を講するに就て今回は時間がないで先づ私の考えた處丈を、さつと御話申します。それで不能語といふ事は語る事能はずと云ふので有るから一寸考へて見ると妙で有るが。之は來る事能はずとか、去る事能はずとか住する事能はずとか云ふのと同じで。不能と云ふ言葉は出來ないと云ふ事になります。處が其出來ないと云ふ不能にして、語つて居る處が有る。誠に妙な事であるが、こゝが入用なので言語に定りが無い。それで如來は嬰兒の如しと云ふて、其有様を見ると、行くが如くにして行かず、來るが如くにして來らず、

語るが如くにして語らず、去るが如くにして去らず、住するが如くにして住せずと云ふ様な譯で、少しも其の去來言語の相に執着を認めない、行住座臥俱に執着と云ふものはない、誠に脱落解脱の境界である。又不可得無所住の境界と云ふてもよい。御互が、寺を持つと直に寺に執着する、學問をすれば直に高慢の心が起る、そんな事では此の不能語の意味合には解せない。全く如來の相と云ふものは執着を離れて慢心も我見もない。それは悪いと云ふ事は。さうかなと云ふて。それに頓と抵抗する事はない。氣に入るの氣に入らぬのと云ふ様な區別は見ない。丸で春風の吹く様な者で。吾々は好い風ぢやとか。悪い風ぢやとか云ふて、色々執着をするが。風の手前に於ては、少しも頓着はない、平等に吹て居る。今即ち佛の去來動作と云ふものは、一向不能で、言語に跡痕や執着を止めぬ處の者で有る。吾々は甘くやつたとか、何だとか云ふて。寝めらるれば嬉しく思ひ。又誘らるれば腹を立つと云ふ様に。種々雑多な心配が付て回る。即ち色々の御供が後に付き回つて、いつも執着や我見が離れない。此等の煩惱妄想がすつかり離れて、行住座臥俱に、その執着の相を停めたのが、不能語と云ふ者で有る。

それから、偏正五位と云ふ事に就ては、前に於て一寸大體を話して置いたが。即ち此の正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到と、此の十五字は。誠に簡短で有るけれども、唯文字を讀む丈では、何にもならない。之が本統に腹に這入つて、能く洞山の偈から曹山の着語に至る迄、すつかりと古人の宗意を能く味つて見ると、此十五字で浮山で有る。此五位の十五字を尋常の左右に篤く信じて使つて行つたならば。偏正

五位の回互不回互の道理は自然に現はれて来る。乃ち軍人は軍人、商人は商人、各々其業に依て、此五位の道理を味へば。外諸縁に従つて萬法に墮せぬ處の活用が有る。即ち一切の物に應じて、一切の物に墮せぬと云ふ事になるから、即ち天地自然の道理に背かない事になる。即ち親に従つて親に背かず、君に事へて君に背かず、總ての物に應じてそれに従つて、爾も墮せぬ處が有る。能く其鹽梅を考えて見るがよい。其故に之を「蓋是設也不專爲功之進修正明從上物體現前尅叙東西密付之道而已」と云ふ、之は古來此五位を功勳の爲に用ゐた様に思はれて居つた、即ち修行の道路の爲に設けたものだと思つた者がある、白隱和尚も、功の進修に見て居らるゝが、是は誤りである、其功の進修に見るは誤であることを看破したのは、洞水和尚の元字脚である、又洞水和尚は、曹山大師の五位顯訣に據たもので、「不爲明功進修之兼涉教句直是格外玄談要絕妙旨祇明從上物體現前冥叶古聖之道」と云ふてある、是がよろしい、尤も此の五位は功を積み、進んで修行する階段に見れば見えぬ事もないが、實はそう云ふ譯ではない。これは何の爲て有るか云ふと。從上の物體現前する事を明すと云ふので。偏正回互の道理、即ち君臣父子の回互する道理が有り。又其中に君は君臣は臣と云ふ様に不回互の道理がある。それを即ち正中來偏中至と云ふもので。其から正中偏偏中正の回互する有様と、正中來偏中到の不回互の有様と、一所になる處の者が兼中到の一位で有る。それが最も極意で有つて、自由を得らるゝので有る。それで、これは何の爲に設けたかと云ふに。洞水和尚が元字脚の中に、偏正五位全就師家作用上設之と云ふてある。其意味はどう云ふ處に有るか云ふと、師家が普

く諸縁に應じて諸縁に墮せぬと云ふ。即ち座禪儀にも「不觸事而知不對縁而照」と云ふ様な譯で。誠に諸縁に普ねく應じて諸縁に墮しない、これか師家の作用活用です。それで萬物は皆五位を離れては居ない。例へば、火と云ふ者は因縁所成の上からは火と見るか、其の本體を云ふと空と有る。斯くの如くの物として五位を離れたものはない。其處の様子を叙東西密付之道と云ふ。明りに名を付けると名に迷ふて来る。萬物は諸法を諸法と合點すればそれでよい。吾々が法界に住して居る、直に法界と吾とは二つはないので有る。丁度魚が水に住んで居る、水と魚とは離れない、水即魚魚即水で有る。吾々が五位を離れない處も、それと同じで、其處に落着て、全く五位が吾物にならなければならぬ。それから「會於正中妙挾有類不齊混知處之要」云々と有る、此中の挾の字は、別本には叶とある、即ち指月は叶と云ふ意に見て居る。挾の字は洞上古轍に有る故、今は此字を用ゐて居るが、實は叶の方がよいので有る。それから類不齊云云、之は蕎麥粉の中に、餛飩粉が混れば、其が能く知れるのと同じく。正中偏も其道理で、理の上に事有り、事の上に理が有る、混じて居るが、又別な處が有る。之は申す迄もない。其れて不拘一途之名義と有る、これは、心經の色即是空空即是色と一般である。其で心經は容易に説けない處の道理が有る。色不異空空不異色と有るか、左の柱は右の柱に異ならず、右の柱は左の柱に異ならずと云ふ事になると色と空とが二つ並ぶ事になる。又正中偏と云ふのも其と同じ様な風になると、二邊が取れない。兼中到と云へば、一邊で有る、即ち色空二法ではない。色の當縁が即空と云ふ事は。一本の柱の上に色空を並べた爲に即の字を入れた。どうも、此心經を説くには苦

しい。即ち云ふ字を以て講釋は出来るけれども。空と云ひ色と云ふ、直に並べて來ると第二見を起し易いと云ふ。それで一句に薦得すれば佛祖の爲に師となる。之がなか／＼出来ない。能所迷悟二ツに見ないで一句に薦得すれば宗意を得らるゝので有るが。兎ても凡夫には容易に到達する事が出来ない。色々の物を見て、直に迷ひを起す。食物を見れば直に喰ふ氣が有る、其の喰ふ氣の有る中は、有爲と云ふ事を免れない。全く喰ふ氣がなくなれば、本來の物體が現前する事になる。學校は學問をする處で有ると云ふが、之は學問の餓鬼道です。私がこうやつて本を讀むのも矢張り、餓鬼道の中です。私は喰はずに死なうと思ふて居る。此邊の處は實地に修行をせねばならん、唯文相丈の議論ではいけない。

それから、「於是乃以定是法位而是法住是位即是世相之常住而本爾者也」云云とは。山は高く水は深い又水は冷かにして火は熱きに住して居る。其は法華に云ふ通り、法住法位世間相常住とある、元來然る可き處の法で有る。其故、佛は十二因縁は吾れ既に非ずと云ふ。即ち十二因縁は法に叶ふて居る、これはこれでよいと證明した様なものです、全く按排した者ではない、割りつけた者ではない。衆人は貪瞋痴の爲に頓着する故、疑が起つて解らない。其故、今其の一念の迷を破つて洞山が吾々に御示しに成つたので有る。都て物と云ふ物は一念起れば直に塵がつく。今の若者は躰の下で餅を搗て居るです、更に落着く様子が無い。洞山はそうでない、新其命と云ふて一回擧着すれば一回新なりて。何にも別に變つた事はない、やはり本來有る處の面目を、五位の上で現はした迄である。露はハハ法華經と舊弊に啼くと云ふ發句が有るが、其は別に變つ

た事はない。然るに世の中には、何か珍らしそふに、傳授とか、秘密とか云ふて、隠した者で有る。即ち百正傳授杯と云ふて大層八ヶ間敷い事も有つたので有るが、そんな譯はないです。山は高く世間相常住で現はれて居る。解らん者が解らんと云ふは、解らん者を被つて居るから解らんです。若し此の執着が離るれば、世界の都ての教と云ふ者は皆佛法の本意に叶ふて行く。佛法の本意に叶ふて行くと、矢張り世界の文字と言語とに叶ふて行く事になる。

「夫五位者當先解正偏是何義而以知其中自有回互等宗也」云云此文の中で、最も肝要な處は、正者無他以唯一切諸法畢竟解脫而分別之所不能解と云ふ事が能く解らなくてはいけない。一切の諸法畢竟解脫と云ふ事は、唯煩惱や分別に取り去らるゝ丈で。解脫と云ふても別に異つたものに成ると云ふ譯ではない。又人間の身體が無くなつてもぬけると云ふ譯でもなし。唯煩惱妄想が取れさへすれば其てよい。此身體は、一つの箱の様な者で、私はモ一八十年も使つて居るが、何時ボツ壊れるか知らんが。それに就ひて、私は奥州の方へ參つて、或寺で病んだ時にかう云ふ歌をよんだ。

古桶の底のぬけると死ぬるのは時を嫌はず處定めず

と云ふたが、どうで御座ひます、人の死ぬると云ふ事は、煩惱と分別と貪瞋痴とが死ぬる丈です。其がなければ死ぬる者はないです。唯箱がボツ壊れる丈です。私は八十にもなる故、箱が古いです、私も一返死にかゝつた事が有るが、何にも心配はないです。箱がボツ壊れると思へば、それによります。こゝ云ふ事を考

へて見るに、一切諸法は畢竟解脱の者です。諸縁に對して少しも分別がなければ、諸法は諸法の儘で解脱して居ります。私は古ひ箱で塔婆化の者が口を利いて居る様な者で、あなた方にしても皆塔婆の化者で、塔婆が往來して居るのです。古歌にも

## 世に人の生れしけふは死出の旅

とあるが、全くそれに相違ない、此處は分別の解する事能はずと云ふ處で、人々能く考えて御覽。此の執着を離れると、別に何の心配もない。誠に天真而妙と云ふ處に行くので、一切の理は圓融無碍で有る。富貴の中にも貧乏も有り、貧乏の中に富貴も有る。稜羅錦繡を纏うて居ても、心の中は乞食同然の境界に居る者も有るし。又人の軒端や橋の下に寐て居る様な乞食でも、安樂な境界に住して大尊貴生の氣を以て居る者も有らう。世界と云ふ者は、誠に面白い、實に天真而妙です。雜沓此上なき、都の真中の深の中に、鴨が悠々として、闇中に閉日月を得て遊んで居る。また山中に仙人の様な者が居て、閑かな境界に安住して居る様では有るけれども、心の中では、今日は誰か蕎麥粉でも持つて來て呉れるで有らうかと向ふを眺めて居て、心の騒いで居る者も有るてしやう。此の邊は誠に面白い、皆それ／＼の境界に依て、趣きを異にして居る。實に正中偏偏中正の様子は、皆此中に在るのです。何でも解脱々落に行かなければならぬ、その様子を譬へて唯一嬰此兒五相完具不能也と有るがそれに相違ない。完具不能とは全く脱落の意で雷が落つこちでも何とも思はぬ。行住臥座語るも聞くも寐るも起るも皆脱落して居る。こう行くのが、吾々の身体に取つても衛生とな

るので、之が一番の衛生で有る。たまさか牛肉でも喰ふたり、鳥でも喰ふたりして、色々と貪瞋痴を起すと、直に腹の中の衛生を害する。之ではまだ解脱の境界とは云へない。あなた方が弱たからと云ては、色々な物を喰べる。皆貪瞋痴の爲につき廻されて青く成たり、赤く成たりをして。此五尺の身體を腹の中の製造場で害する事が多い。私は年來酒を好む、之は衛生の害です。其他何か食ひ度と思ふて、其用意させた品の出來様が遅いと、腹立まされに澤山に食ふ、之は衛生の害です。却々脱落の境界には成れない。どうか此不能の境界に至り度ひ者です。どうか此不能の境界に成て、五位と云ふ上に就て、偏正躰用事理等の意を能く味ひ。之を尋常の舉動の上に使つて行き。主の位に居て其位に執着せず、賓と成て賓の位に執着せず、すつかり脱落の境界に成らんければならん。無暗に權理で有るとか義務で有るとか云ふ名目を立て、論ずる故、世界が脱落にゆかない。不能でない故、誠に六ヶ敷なる、それは言語名稱につき回されるからです。

それから、洞祖妙以三營終歸於一云云と云ふ事があるが、つまり脱落の極意を云ふにすぎない。歸一と云ふことは五位の上なれば兼中到で有る。不能語の上では重離を以て根本とするので。つまり兼中到の用きを云ふにすぎない。これが一番の入用で、妙に諸縁に應じて諸有に墮せずと有る。即ち吾々の眼耳鼻舌身の五官が他の塵境に對して、見たり聞たりして居るが少しも其塵境に執着しない。執着が無ければ物を明かに見るとが出来る。即ち別續を見ても、馬鹿にされない。執着がなければツキリと見るがよい。別續でも糞桶見た様な者ぢやと見さへすれば、見たと云ふても、諸有に墮せない。又彌那迦陵の音聲を聞いても其聲に執

着しないのは。つまり諸有に墮せないので有る。即ち妙に諸家に應じて諸有に墮せんと云ふのは、此處ぢや。そこが正中偏偏中正と云ふて偏正二つ並べては居らん。其故正中偏の有る處には、偏中正が有て正偏自在で有る。そふ成て來れば、諸縁に應じて諸有に墮せん處の境界となるから、五位が手に入たと云ふ者で有る。唯五位を分割して饒舌る丈てはいかない。私杯も若い時には讀乍みら解らなかつた。再釋して見たり看讀して見たりして、随分畔上師杯とも骨を折つて、御互に讀んだことも有り、随分議論したことも有る。終にはどツちも解らんで、眼を三角にし、聲を高くして、根氣の強い奴が勝た。誠にどうも仕方がない、私はいつも聲が高かつたから勝つたが。切躡つて考へて見ると、矢ッ張り分らん。そんならば、何で向ふが閉口したかと云ふと。それは唯此ちらの聲の高いのと強情とに閉口したので有る。實際は五位が腹に這入らるので有つた、それでは何にも役に立たない。何でも正位の時には正位で用らき。偏位の時には偏位でウント働らくと云ふ様に行かねばならない。彼の秀吉杯は、能く正偏の道理に叶うて働らいて居るといふてもよい。殺す時には、飽く迄も殺して軍をした。それが將軍に成て死ぬる時は、どうで有たかと云ふと。こう云ふ歌を詠じた

露とちき露ときえぬる我身かな浪華の事は夢の世の中

ぢやんと正位に歸する處が有る。今日あなた方が布教々々と云て力を入れるが。何でも働らく時にはウント働らくウント働らひて偏位の境界に成らねばならぬ。けれども、唯それに斗り執着して働らき度と云ふて働らき。寺が立派に成たとか、金が殘たとか云て死に度ない杯と云ふ考を起すは、即ち妄想で。正位に歸るこ

ぢや知らんと云ふ者ぢや。學問するにもやる時には、ドンクとやつて骨を折るがよいが。終には、高慢に流れると云ふことになる、其は餘計です。何でも人間は餘計な御供が尾くからいけない。貪欲我見人見邊見と云ふ様な、御供が大變尾く。そんな御供や隨行は突き放なして、獨立して働らく様でなければならぬ。どふも秀吉の偏位の上に働いた有様は、誠に豪いす。之を形容して云ふと千峯萬峯に入り去て没蹤跡の處にも居らない。其時には脱落して不能の道理即解脱の道理が、ぢやんと具つて居る。能く之を考へて御覽、此處が正中偏々中正と回互した有様が、ぢやんと解るです。

それから、正中來偏中至兼中到に就て御話を爲るので有るが。段々と頷の方に行くと、其趣が分ります。それで正中來と云へば、正の一部分を云ふので、不回互を顯はすので有るが。來の字の有るのは資を相手にするの意で。來と云ふ文字を加へて正位を現はして居る。乃ち來の字を付けるのは幾分か偏を談する言葉を以て、正の不回互の一部分を現はして居る。それから偏中至と云ふこともそれと同じく、正位の中に、自から一方の位の不回互を現はして居る。諸法從本無所從來其於無比不可觸云云。扱て正位に至りますと、一切の物はどこから來ると云ふとはない。全く雨と云ひ、風と云ひ、都てのものが從來する處がないです。全く五位は虛玄の大道無着の眞宗と云つて、曹山はこれを鳥道玄路展手との三つに説いてある、此三で五位の消息は解る、先づ平常の道ゆきは鳥道で、鳥と云ふものは、毎日飛んで居ても、其跡方はない。其と同じく今日吾々が、どこの法性で有るか、どこが一法かと尋ねて居れば見つからん。其の没蹤跡の所が玄路と云ふので。其所に行



つて從來する所のない、正位を見届けて。即ち展乎と云つて、爲人度生して、吾々の今日行住座臥の上に、少しもひつかかりはない。乍併多くはこう云ふとこれが悟りぢや、これが眞理ぢやと思ふて、直にひつかい。其他因果と云ひ、天堂地獄と云ふと、皆其綱にひつかいつてとれない。それぢや鳥道を歩めな、そこを脱するのが正中來で有る。それから嬰兒之相如來而不能也云々と有るが、これも正中來の道理を云ふので。あなた方が好い靴を履いて來るとか、或は蝙蝠を以て來ると。此所に居て本を聞いて居ても。靴を玄關の傍に置いたが、若し盗まれればまいか、洋傘を誰か仕舞ふて呉れ、はよいがとか思ふ様なことでは。まだ靴や蝙蝠を、はいたり持つたりして居る、雪隠の草履は人に穿れ様が穿れまいが、何とも思はない、少しも欲いと云ふ考はない。唯縁に隨て運轉して居る。そこが來るが如くにして不能也と云ふ、誠に執着がない、鳥が空中を行く様な者で跡方はない。何でもそう云ふ工合に、物に執着なく脱落の境界と成つて。國家の爲め、町村の爲に働らかなければならぬ。古人が虚玄の大道无着の眞宗と云ひ。或は諸縁に應じて諸有に墮せずと云ひ。或は法性で有るとか、不變眞如で有るとか色々説くのは。唯此の意識分別を離れて解脱の境界にさせ度いからて有る。誠に古人は縦横無盡に説かれて有る。何でも諸法は畢竟諸法のみと云ふことが有るが、そう悟ればよいけれども。山へでも這入て悟りが知れると云ふ様な奴は。鼻斗り高く成て暗い所は歩くことが出来ない。又學問をする者は、其學問に突舞はされて、キョロ、キョロして居る。皆是等は物に突舞はされる處の病人ぢや。それは御客が外から這入て來て、心の主人を眩まし、目を三角にしたり、腹を立てたりす

る。又心配したりする、皆これは外から來た所の御客に支配せらるゝので。惡ひ御客が中へ這入込んで自分の家として仕舞ふ。宿賃のない野郎が這入て來て、吾儘される程馬鹿なことはない、誠に妙な者です。其から偏中至と云うも、正中來の意味が分れば別に變なとはない、つまり兼中到の一位に歸するので。諸法畢竟體于此宗云々と云ふ丈で、何もかも、皆こゝに歸するのです、それでこう云ふ歌もある、

行く先もまた行く先も同じ事一寸滾邊の土に成うか

誠に自由です。行住座臥共に五位の中に住して居る。朝も晩も五位に背かず、俯仰屈伸盡爲曇三變五三轉側也で。吾々は五位が手に入れば、直にそれが兼中到の丸出し、重離六爻の丸出しで、少しも罣碍はない。乍併一念起ると云ふと、我と云ふ者を認め、それが直に御客に成て仕舞。在家にしても、己が親だと云ふ念が起つたら、本統に子を養ふことは出来ない、其では眞實の親ではない。己は子で有るから、親の財産を譲り受るは當然で有ると云ふ様では其は本統の子ではない。誰やらの問答に。如何なるか是父子の情。刀斧斫れども入らず。こういかなければならぬ。子だ親だと區別の有る間は、親密ではない。眞に中の好い處には、決して其念は起らない、父子一體になると云ふとは、針程も罣碍のなき處を云ふので有る。そこを今吾全體全用無向無背不見傷犯云々と云ふので、すつかり五位が手に這入たと云ふ者で有る。それから、今度は五位をひつ括つて。今吾特牛生兒是正中偏と有る、即ち正中偏を云ふのに、特牛が兒を産んだと云ふ。誠にけしからん話で、これは空界无物の處に、色々の物が有る處を云ふので。世間の學者にしても、森羅萬象がど

うして出来たかと云つて段々尋ねると、これを佛教で不思議とか、无明とか、或は空とか云ふ様に論じて。つまり世間の學者も何か有るだらうと云つて。論じつめるとだらう量見に成つて。だらう博士になり。又段々論じて行つて、終にからつばになると、からつば博士になる。だらう博士やからつば博士に成るより仕方がない。自分の智慧の有る丈、せめて行くより仕方がない。そこを特牛が子を産んだと云ふ、出来まじき者が出来て居る、これが即ち正位の空界無物であるから、森羅萬象何ても現はれて居るのが正中偏て今度は羚羊掛角是偏中正、夫から、正中來から偏中至になると。中す迄もなく、山は高く、水は流れて、歴々と現はれて居る。それから兼中到と行くが、是等に就ても一心二門三大等と、分別をつけて探つて見るが。それは意識の分別で、本統ではない。そうすれば、ばつとして抑え處のない者で有らうと考へる、其では心細くなる。そうかと云ふて、魂はどんな者か、其を知り度いとか。或は死に度くないとか、或は物識りに成り度いと云ふ了簡で、色々を見付るが。終には唯兼中到の一位に歸する迄で有る。つまり本來无一物无我无人相とすつかり合點すれば、それでよい。佛が不生不滅と云はれたる此外にはない。之を表から云へば偏介不曾藏とも云はれるし。又裏から云へば不可思議と云ふことも出来る。又、モ、一つ言葉を換えて云へば、表からは諸法實相、裏からは常自寂滅相と出てもよい。何んでも色々と参究して自分が、法と合體してこゝちやと、信心歡喜する時節がなければならぬ。其にしても正師家を擇ばねばならぬ、唯慢心や妄想斗りてはいけない。又意識分別でもないけない。扱て段々と参究した後には、極地に至れば爲すこともなく、語ることもない、ぞ

こを東西南北不可なしと云ふ。そう成て來れば、何に就けても心配なことはない。其時になれば極度に達した後で有るから、今度は何をしてもよい。精出して思つたり、心配したりするがよい。これが即ち合ひの話で日を暮すと云ふので有る。之を踏躡、窮見とも云ふので有る。即ち言ふともない爲すこともない、无言説の道理を得れば。今度は饒舌ても何をしてもよい。教外別傳と云ふとが分れば、今度は致々として御經を讀むがよい。別傳で有ると云て、何も經の外に有るものではない。其故大般若經を讀でも、其御經が分らんとになれば。唯別傳と云ふ看板を被つて居る丈で。其人の心の中には、別傳も御經も何にもないです。其ではつまらぬとて有る。總て法と云ふものは、味ますとはない。寒ければ着物をきる、暑ければ脱ぐ、腹が空れば飯を食ひ、春になれば花が咲く、秋になれば木の葉が散る。働けば食へるし、寐て居れば貧乏する、必要な學問を精出してすれば月給が澤山取れる、无益な學問を一生懸命にやれば唯學者として貧乏して居る丈だ。法と云ふものは少しもうそがない、天地の道理は味ますことは出来ない。其で世只見人從橋上過尙疑橋流水不流有五位之可一言而幾乎者裏は妙峯孤頂と云ふが、これも法の面目を云ふた丈で。別に不思議でも妙でもない。橋流れて水流れずと云ふは常住不變の道理を現はすので。富士山が流れても、水は流れない。水は水で動かない道理が有る。それはどう云ふことで有るか云ふと、譬へば水車の廻つて居る處を見ると、あれは全く不動着の容子を現はして居るので。水車は水車で動く物であると云ふのが定法で、水車の持前で有る。廻つて居りつゝ、常住で誠に心配はない。若しこれが廻らぬことにでも成つたら、車屋で亭主が驚愕

して立騒ぐことになる。これが即ちどこに當てはめても、五位の用らひて居る有様が見える。そこで今五位の脱躰を申すと一言で盡きて居る、這裡は妙峯孤頂、此中には吾々も偏位も、正位も、回互も、不回互も有ることを、観破せんければならん、のである。

**逐位頌** 是則洞山自製。述五位之義。非餘人之所加。

此の頌に就いては。或は曹山の作て有ると論ずるものも有らうが、曹洞宗では洞山の作と定めて置きます。

尤とも曹山慧霞は、曹山の嗣で、僅かに洞山より三代目位で有るゆへ、曹山の作と云ふことが、本當の様に聞こえますが、全たくこれは、洞山の作で有らう、兎に角、五位が本當に解かれれば、曹山でも洞山でも宜敷

**正中偏** 一句題目。下皆效之。此位。則明正不獨正。全偏是正。即三更初夜月明前。是言正位。前猶

堂前是。中泯然不墮諸數。何得分合。故曰不對而具。又圓也。此中絕待。而法法自位。逢也不背。不萌芽未生。何法平爲因緣。莫恠相逢不相識。識也不觸若識達于正時。故曰莫恠。銘曰明月堂前。是之義。

**隱隱猶懷舊日妍** 是言不識之所以也。隱隱不昭明也。舊日猶久日。遂不相識也。妍難侵也。言正中

允當也。又有作嫌。以言不識也。而於今則迂矣。今是何時節。人人履背觸其非之地。本不即離。不知誰子。與猫犬處。久遠之實。未嘗瞞欺。日日卓無動搖。生死已來。眉毛生也。

こう云ふ頌の體裁は、碧巖や從容録にも有ります。即ち偏前妍と洵が暗んで有る、題の三字の句を添えて都合四句に成て居る。それで此の正中偏が今日自由に我物に成れば。つまり外の偏中正正中來等の四つが自由

に成る。それ故正中偏を以て兼中到としてもよいし。又正中來も正の一方を以て兼中到としてもよい。今此五位の中で暫く分て頌に作つた迄の者て有る。其故此の正中偏等の頌は學問としないで境界にして見るがよい。自分の智慧や、忘想分別では分らない。即ち己れがと云ふ見に片依つたり。或は一つの我見を押立て見ると云ふことは好くない。舊習忘じ難しと申して、中には儒者より這入た人が。同じ坊主に成つても、矢張り儒者臭い處が有る。又西洋の學問を學んだ人は、矢張り坊主に成つても、從來の病はぬけない。其他宗門でも臨濟から這入て來ると、天台から這入て來ると、矢張り其の舊習に依て臭みは抜けない。どうも無病にして初めから宗門に這入ると云ふのは少ない。それは互が能く鼻の孔を大きくして嗅ぎ付て御覽、少しづつは臭みが有る。何んでも此の臭みがとれて、正中偏を自由に使ふ様にならねばならぬ。それで此の正中の偏と云ふて、偏の方は左之右之運作轉倒の位て有る。之は正の偏で有る故、單に偏一方に屈著す可きものでもない。丁度空中に畫を書いた様な者で。空中に天地を畫き世界を建立して居るので有る。今日では地球が回ると云ふ。そうすると、人間は提灯に付た蟻の様な者で、提灯に付てぐるぐる廻つて居る。そこで世界が破裂して火が出ると、所有人間は死で仕舞ふ。能く考えて御覽、全く此世界は空中に宮殿を造つて居ると同じて有る。即ち空は有に依て立て居るので。國家と云つても君一人ではない、矢張り人民が有る。又之を平常の器物に就いても茶碗と云ものは、中が空で有るから用をなすので有る。車にしても空な處が有るから心棒をはめて回るとなる。人間でも口から這入て尻へぬけると云ふ穴が一番必用な者で。此の食物を通ずる道中

の穴がなければ生て居ることは出来ない。都て箇様に空と有とに依て成り立つて居る。正位が有れば偏位が有り偏位が有れば正位が有る。そのこの處を即ち明正不獨正全偏是正即圓兩意云々と云ふので有る。それから正と偏とが二つ並んで有るか云ふに。そう云ふ譯ではない。正を全うした處の偏、偏を全うした處の正と云ふので。即國家主義と云ふも箇人主義を全うした處の國家で無ければならぬ。箇人を離れて國家は成り立たないと同様で有る。二つの者が並んで喧嘩をする譯ではない。夫婦の様に並んだ者ではない。正位が天地に充つれば偏位も天地に充ちて居る。空が此の躰に充つて居れば有相も亦此の躰に充つて居る。即ち空の現る處には有が有り有る處には空が有り。无差別の理の有る處には差別が有る、差別の處には无差別の理が有るです。對待したものではない。名にまごつく故、議論が出来るので。今日では何的々々と云つて的が強い故誠にいけない。真理だ真理だと云つて尋ねて騒ぎ廻るのは。丁度自分の鼻へ糞をクツツクテ、之も臭い之も臭いと云つて。臭い奴が臭いものを嗅ぐ様な者ぢや。こゝを能く考えて見なさい、正位も偏位も並んだ者でない、分つことも合することも出来ない。只名のみに迷ふて論じて居ては際は限はない。つまり、學者が首てもくくならなければ止まない。何でも曹山の著語で有る處の不對而具又圓也と有るが、此の鹽梅を能く考えて身を脩めるにも家を齊へるにも、又大きく國家を治むる上に就ても對せずして、能く具つて居ることを考えて御覽、これが解れば喧嘩はないです。扱其の様子を云ふと、三更初夜月明前。偏正の道理が現はれる様に。文章の上で文字を上手に使つたものです。三更と云へば夜更です、初夜月明中と云ふ意味です

が。全躰月は明かてはない、分つた様な分らん様な暗い様な明るい様な、見へる様な見へない様な處で有るが。これは正中偏の處を申すので。浪然不墮諸數云々と有るが回互の位で有るから、諸法差別の偏位には墮せない。丁度佛が三介に墮せないと同じで。世間で云ふと、例へば巡査が盗人を逐ひかけて行く、盗人は逃て行く、その時は巡査も盗人も同じ道を行くので有るから、側から見ると、俱に盗人では有るまいかと思はれる。それと同じく佛が三界に流浪して衆生濟度をなさるも、丸て巡査と同じ様な者です。けれども偏位に居て其諸數に墮せない處が有る。そこを又萌芽未生何法乎爲因縁と云つて對待の法は入れない、全く以上は正位を申したので有る。

莫惟相逢不相識之は、只文字を形容した丈の者で。相逢とは諸法一切の現はれた處を云ふので。自分が自分に逢て居る、目が目を見て居る、自分と自分で知音ですから、そこを不相識と云ふ。自分が自分で知己になるのです、即正と偏と別躰でなく、知つて居る己と己を知て間違はん時は好い知音で有る。之は正位の上から逢た故、即ち偏正俱ならざる者が相對した故知り様がない。吾が吾に逢た時に知る者はない。こゝは面白いです、そこを此中絶待而法々自位云云、耦する事も對する事もなくして知己に成て居る故、背く者も觸るゝ者もない。それで明月堂前時々九夏と云ふことは、即ち正中偏の道理を云ふた者です。

隱々猶懷舊日妍。あなたはどなたですか。知音の様で知音でない様な鹽梅です。即ち隱々は正明ならずと申して、はつきりしませんが、どことなく昔の別嬪の俤が有る。此妍と云ふ字は侵し難しと申て、別嬪で有て

麗はしいが、併し車夫が御嬢様を見た様な者で侵し難い。兎に角、昔の佛が有る。其で此の意味合は、正中無用是偏無用全用也と申して。鳥が飛ぶが風が吹ぶが、之れ皆无用の處で有るけれども。そこに全用の用らきが有る。去れど逢而不識と申して、向ふも此處も知らん。其の知らん處が即ち知音で、誠に入用です。此處は今是何時節人々履背觸共非之地本不即離云々と申して。此處に至れば五位の理に背觸することは出来ない。空と云つても假の空で本眞の空ではない。これが眞理だと云ふも其は假に云ふ丈で背くこともツツカハルとも出来ない。然らば何物が眞理で有るか云ふに。不知誰子で世間は、我は桓武天皇五代孫、其上々々と段々尋ねて行くと一番始めが天の御中主の子孫だと云ふ。又其先はと問へば、此馬鹿野郎、好い加限にしると云て、つまりは誰の子か分らん。けれども與猫犬處て犬猫と一處に無差別に成て居る、我も彼も邊際を究めて見ると、矢張變つた事はない。今日は今日の様にやるがよい。學ぶ時は學び、病氣の時は病氣で、ウナツテ寐て居るがよい、これが即ち三无差別の道理で有る。洞山が水牯牛と成たと云ふも、それは類に隨て墮せずと云ふので。御前方が寺を持て、在家を教化するに就ても、其の心得がなければならぬ。無暗に學問したからと云つて高慢になると、熱い國に行て綿入を着て居る様な者ぢや、高慢は餘計な者ぢや。そうかと云つて、無暗に謙遜しても引込思案計りで、自分が生徒として居る時は遊惰にして居り。年取れば寺に引込んで、昔の遊惰に流れた話でもして日を暮すと云ふ。僅かに隱居金でも貯て細い欲をやる、そんな事になれば。此五位の自由の境界即離の境界は分らん、猫犬と處る事は出来ない。そこに氣が付たのが久遠實成の佛

で有る。そう云へば、何か高い處にツツツツル様に思ふが。佛が直に犬猫と一處に居るので、五百塵點劫の佛はチャンと此處に居る。久遠劫と云ふと遠方の様に聞へるが、其は文字問頭の話文で、それでは本當の修行と云ふものではない。未曾瞞欺日々卓無動搖云々と申して、言句を離れ前後際斷に活潑々に用ゐて行く。日々卓動搖なして物の繫縛がとれて動かん様な境界に成らんければいかぬ。これが正中偏と云ふので。即偏位の用きが正中に有る。かう云ふ用らきは何も變つた事はない。生死已來眉毛生也と申して、吾々が生死輪廻して生を受けて居る、此の方眼横鼻直眉は矢張生へて居る。何も變つたことはない、先づ此面目に達しなければならぬ。

**偏中正** 是位。則明偏位是正。不全正不成偏。亦圓兩意。兩意圓。失曉老婆逢古鏡。是言偏逢正。偏故。亡一異封。故曰。緣中會也。又青山覆白雲。是之云。記得。而經事多故曰。老婆。其所遇之物。塵却無瑕。故曰。古鏡。老婆遇古鏡。不照不避亦無。背觸病。而不遇古鏡。老婆死矣。不不得。老婆。古鏡亡矣。此一只得。同身共命。故曰。語中不傷。分明觀面。別無眞。纔相遇時。渠正我矣。但此分明不以。知不知根境之待緣。是故。休更迷頭還認影。此句。則誠於別無眞。若因。知見。而作。眞妄迷悟。及祖佛之道理。則不。是本頭。乃認。影者也。二光三病。多目之。眞豈認著爲。眞之物哉。故曰。不。改換。未。有。眞時較。此字。終。不。記得。又曰。失。

五位は中々六ヶ敷い、理の上丈で形がない故、能く考えて見ねばならぬ。偏と云へばいづも物が有るが、其偏中には正位の形のない無物の道理が有る。其故一方を立すれば、必ず一方にも道理が有る、故にそれを能く腹に入れて考えて見ねばならぬ。事相の時には理相が有り、理相の時には事相が現はれる、これは覆ふ可らざるものです。これを世間の上から申しても、春に形ちはないけれども花が咲くと云ふと、春の相が現は

れる。人間も其の通り、愛國の心が有れば愛國の形が必ず現はれ。頑固な性質が有れば必其の性質が現はれる。孝心が有れば、それが親に對して直に現はれる。都て物と云ふものは、事理偏正離れない、回互の道理が有れば不回互の道理も有る。又回互不回互等の兼中到の道理も現はれて来る。之は唯言葉の土では分らんが。暫く總ての物に就いて研究して、自分に躰つて考えて見ると、日用都てのことは、朝から晩迄人と應對するにも。又人の舉動を見るにも又は世界の變化を見るに就いても。此の五位の十五字は離れた者はない。偏位と云へば事相て有るが、其事相の上には必ず空相も現はれる。例へば壹尺四方の箱が有れば、其に寸必ず一尺四方の空が有る。此偏正は離れた者ではない、そこを明偏位。是正不全正不成。偏亦圓兩意云云と云ふので有る。其て偏正の境目が有るか云ふにそれはない。即ち亡一異封て。只色々の縁が並んだ處に、正位は必ずッ、ッ、ッ、ッ居る。そこを偏位の中で合點する迄のこと有る。之を緣中會也と云ふ。其れから又青山覆白雲と有る、青山は白雲で見えないけれども。山はチャンと動かんと云ふ。其の青山が正位で、白雲は偏位で運動するもので有る。之を躰用に見ると、青山は動かないから躰、白雲は動くから用。今躰は用に隠されて居るが、躰用必ず離れたものでない。用と躰と合はん者は天地間にない、それ丈の躰が有る故、其れ丈の用が有る、用と躰とを離れて用はなさない。位を見るには功を以て見ます、功を見るには位を以て見ます。其丈の位には必ず天爵が付て居る。馬鹿な人でも從三位に成て居ると云ふのは、其れは人間界の話で別者ぢや。例へば人は大臣に成らんでも、其丈の働らきが有れば大臣丈の者に見える。その道理を偏中正正中來

等と云ふのだ。其がヒ、ッ、ッになる世の中が轉覆する。此五位の常法から見行て、世の中に處して行かぬばならぬ。是云云と云ふのは、この偏中正の事ぢや、失曉老婆逢古鏡。失曉と云ふは、とりはずして笑ふとを失笑と云ふと同じで。思ひ掛なく寐過ぎた婆々が、眼をこすり乍ら出て來た。そうして古鏡に逢ふたと云ふ。婆々は即偏位で、古鏡は正位で有るから、偏位の老婆が正位の古鏡に逢ふたことを云ふので有る。其れから偏之爲體有摸樣云云、これは春になれば、花が咲くと云ふ摸樣が有り。それは又記得と云つて色々の順序が有る。そこで、而經事多故と申しまして、色々なことが生じ、萬事煩はしくなり、經歴が有る故そこを年取たる老婆に譬へた。夫から其所遇之物歷却無瑕故曰古鏡と有るが。眼藏の中にも古鏡の卷が有る。却々六ヶ敷い、天地を鏡とする、それが古鏡で。即ち大きな鏡の上には、天地日月星辰悉く皆映つて居る。全く此世界は古鏡の影て有る。之を昔からの歴史に就て云ふと桑田變じて海となるて。世界は都て大變變化して來て居る。僅か日本と云ふ國の中にも、亂世から段々移つて足利とか徳川とかと變つて來たが。皆鏡に映つた影に過ぎない。其を暫く歴史と云ふ迄のこと有る。天地皆影坊子で何萬年の中には、必ず世界は改るに相違ない。唯大鏡の中の影坊子を色々と議論して居る丈の話て有る。扱其鏡を能々試得して見ると別に欲も可愛も無いです。其を「真理と云ふのでせう。其時には一口に吞盡して盡十方世界は沙門の一隻眼となる。又一句に薦得すれば、佛の爲に師となる」と云ふことを看破するのが古鏡と云ふ者ぢや。そう成て來れば不照不避亦無背觸病で。縁に對せずして照し事に觸れ



間に髪を切つて置いた。そこで女郎が目を醒まし頭を摩でヒツクリして、ア、御客はこゝに居るがわしの頭はどこへ行つた知らんと騒ぎ廻つたと云ふ話の様なもので。皆目で見ると腹の中へ留つて主人に成て居る。其他口や耳や鼻で嗅たり聞たりする者は、皆腹の中の主人と成て、本心が味まされて仕舞ふ。本來自己の主人と云ふものは誠に明鏡です。天地を影坊子と見る處の者が自己の胸中には有るです。能々考えて見なさい。人間はオキヤ、と生れてがら、親で有るとか家で有るとか、國家で有るとか、恩義で有るとか、其見たことや聞いた事は皆腹の中へ覚えて、其が主人と成て其見聞に支配される事になる。之を圓覺經に六塵の縁影と有る、誠に面白い。其影坊子が主人となり其体が奴隷となり、影坊子に使はれて居る。其故何でも自分の頭に迷はん様に、自分の頭は自分の頭と合點する處に注意なさい。此句は前の別無真と云處を受けて來て居る。何でも自己の知見に依て偏だとか正だとか迷悟で有るとか佛祖の道理だとかとつき廻るのは九で頭を無くした様な者で。色々目より見、耳より聞いて這入て來た處の者を、自分の本來の頭の上に、又一ツの頭を重ねて、二つの頭が有る様な者です。その處を二光三病と申して、二光とは能取光所取光と云ふ能所の二つが立つ、それから三病と此の二光から出たもので、此事は莊嚴論を引て頌古唱提に明に書で有る。これは面倒で從容録の齧頭の方にも出て居るから御覽。即ち三病とは、一には未到走作と申して。未だ其の地に到らん先は何の學問をするとか何の論を聞くとか。そこら中乞食の貰ひ食ひする様に、騒ぎ廻る様な者ぢや。二には已到住著の病これは物識りに成た様な顔付きて其所に住著して居る。三には透脱無依極樂も何もかも通りぬけて世界はどふでもよいと云ふ脱洒無碍の處。これ等は皆病です。何でも能く自分の病氣を考えて癒さなければならぬ。中にはこちらが親切に癒してやらうと思ふて居ると。却て腹を立て、居る病氣も有る。それから眞豈認著爲眞之物哉と申して、之は眞理だと申して認めたら、早や誤謬で有る、自分で照了自得したのて無れば、眞とは云はれない。法華に止ね説く事を須ひず、我法は妙にして思議し難しと。即ち佛は説けないと云ふ所で有るのに、私は眞理を認著したと云ふは既に早や二光三病の人で有る。故曰不改換未有眞時較些子で、別に眞の面目は變つた譯でない、未だ眞有らざる時、認む可き物のなき所に。あゝ今迄は悪るかつたと汗をかいて慚かしく成た時が。些子に較れりて、やゝ其時が合點したと云ふもので有る。其故記得せず、又曰失せりと申して。之を得たと云ふものはない。此時に本當の所に突き當つたと云ふもので。之は裏から申した者で、すつかり失却した所が。即ち元是眞壁平四郎也。利巧に成らうと思ふた時、ト、馬鹿に成つたと云ふ。そこに始めて得所が有るです。

**正中來** 是位。則明正獨位。觸尊而不受。群下之禮。不可觸。又、無中有路。隔塵埃。是言正主德。不無此體。遂不可觸。然有統御物。而風雲相隨。其類。故曰無中之路。此路。唯大人之所。有。但能不觸位。乎天德。當能以美利。天下。而不有其利。不言所利。大矣哉。故曰不。相。借。也。當今諱。宗是故。左輔右弼。無。語。默。故曰。句。句。無。語。也。勝。前。朝。斷。舌。才。辨。善。奉。君。之。潛。行。密。用。其。持。己。宜。篤。眞。如。大。鏡。之。酒。不。兼。味。去。翹。藥。道。至。而。時。寧。君。固。無。爲。臣。亦。熙。哉。是。頌。妙。不。道。德。位。不。斥。諱。字。特。以。不。觸。之。誠。意。勝。乎。英。才。今。誰。知。主。但。非。曹。谿。西。天。道。遠。此の五位を見ますと、人々の左右にチャンと具つて居るので。前云ふ通り、只それを暫く分割して頌に現は



した迄のとてある。今正中來と云へば、暫く正位の正面を現はすので。來と云へば、偏位の趣きを兼て正位の一位を現はしたので有る。それで前の正中偏々中正は回互の道理を云つた者で。今此正中來偏中至は回互の道理を云つた者で有る。去ば正位は正位の全面を現はし、偏位は偏位の全面を現はせば、それで好いので有る。けれども正位の全面を現すには、只正位丈では現はれない故。偏位の趣をかねて説て來たので、偏中至と云のもそれと同じて有る。即ち頌の方には、無中有路隔塵埃と云ふは正位です。又その次の但能不觸當今諱と云ふのもこれも正位です。即背觸俱非也と云ふ處の正位の上に有るので有るから。如何なる能辨者でも言盡されぬ。隋朝の時代の李知章と云ふ能辨者でも當ることは出來ないと云ふので、古事を引いた。これは言句葛藤の外に正位の道理を合點しなければならぬと云ふ意なのである、即ち也勝前朝斷舌才と申すので有る。此諱と云ひ才と云ふ字は、皆偏位の分際では、述られぬと云ふ處を現はした者です。扱前にモ、ド、ッテ正中來の意味を委敷申すと。正中から來つて偏位を兼たのではない、前は正中偏々中正と正偏回互の道理即ち回互宛轉の道理を現はしたので有る。そこで其回互宛轉の處には正一方偏一方の道理がなければならぬ。其故正中來は正の一位を申して正の獨立、他に對しない處を申したので有る。そこで不受拜下之禮云云と申したので。君位は君位の處に獨立する時は残らず皆其人の君位の獨立の面目に成て仕舞ふ。陛下が陛下の自位に居る時は天下中は皆吾物で。君の御威光と云ふものは法界に遍くして居るです。そこに又物に對しない時は、遍法界に普く亘る處の境界になる故、一天下は皆國王の境界です。其故そこに自位を守らずと云ふ道理

が有です。即ち自位を守らず、獨立して居る時には偏位を離れて居るから。即ち我のない時は、我に非ざる者はない。其から如一氣含有象云と有るが、森羅萬像の森々羅列して有る處のもの。即ち天には日月星辰等より、地には山川草木と色々有るが。皆是等は一氣に含まるので。春なれば春の氣に含まれ、夏なれば夏の氣に含まれて仕舞ふ。之が即ち正位に含まれて仕舞ふので有る。併し其正位の氣はこゝかと云て尋ねると、モ、イに遠して遠して分らなくなる。故に曰過也と有る。こゝの處を合點が行けば、忽然として後に有りて、正位の位が分る。其がこゝて有るこれだと云ふと正位は死て仕舞ふ、少しも落處をといめない故。そこが正位の法界に遍うして居る處で有る。尋ねんとすれば、ト、ツ、に居らないので有る。乍併又相隨來也と申して、其正位は自位を守らん故。春は心持がよいとか、夏は熱いとか云ふ用なきが出て來る。君位に居る陛下は、國中の者は我物として居るから。其君位の御威光が萬民に亘つて、國王の心其王徳は天下に淵滄して居ると同じことだ。茲が君位の徳ちやと認むる處はない。其處を無中有路隔塵埃と云つて。春なればどこからどこ迄も春の氣が亘り。夏なればどこからどこ迄も夏の氣が亘て居る。けれども其春の氣、夏の氣は何物ぞと抑へて見ることが出來ない。そこを是言正主徳不偏謂其高明徳無比體遂不可觸忤と云ふ。それから有統御物而風雲相隨其類故曰無中三路云と有るが、之は勿蹤跡の正位で有るけれども、能く萬物を統御して居る。その處を風雲相隨其類と云ふ字で無中有路と云ふ四字を現はした。即ち雨と云ひ風と云ふ、此風雲は乞食の家でも華族の家でも區別なく行き亘る。即ち正位はどこへでも行亘ると同じことである。即ち無中

有路と云ふ處を現はしたのは餘程面白い。こゝが大人の有する處で全くの天徳で有る。コゝ云ふ風に美德を以て。天下を利して行かねばならぬ。けれども不有其不言所利と申して、マ、凡夫の考へは兎角己がと云ふ根性はぬけない。己が御蔭だとか、己が世話したとか云ひ度くなるもので有るが。其の凡情を取り去て仕舞ふて、己が々と云ふ様な事を言はない様に思はない様に成て。ドン、と人を世話してやるがよい。何でも利益を鼻に掛けてはいかぬ。褒られても、誇られてもそんなとは構はず。ドン、骨折て行けば其でよいので有る。春に啼く鶯は法々華經と啼て飛回つて居るが、少しも毀譽褒貶には拘はらない。人間と云ふ者は悲しい事には、ド、ソ、ゆかない。褒て呉れなければ氣に入らなかつたり、悪く云へば腹が立つたりする。そんな事ではいけない、其等の考えが盡て仕舞ふて。本統の働きが出来た處を大矣哉云と申すので。世間の穢ない道とは違ふて、少しも塵埃に穢されん處の道を往來して居る。そこを不相借と申したので。全く自分は塵を離れて、高い處を通つて居るから、世間の道は借りない。無中の道に往來して居る功勳邊の偏位の事は少しも借らない處を申したので有る。その處を但能不觸當今諱と云ふ。昔て申すと諱と云ふ事はゑらい事で。我宗でも關三刹の役寺の名は、末派は云はない位で有つた。近頃は開けた故環溪禪師の時分杯に致しましても、或僧が私はカンケイはしないカンケイは御座りませんと直接に面會して云て居る。何とか拘はり合が無いとか云ふ様な風に答ふる事が出来ソ、なるのだと云ふ事が有つたが。マ、ソ、云ふのも尤もぢや。又駒込の吉祥寺へ行て吉祥々々大吉祥と云つて何とも思はん坊様も有つたが余り無機用な事は云はぬがよい。

人の忌む可きは忌むがよい。そこで今此の當今の諱に觸れずと云ふは即ち天皇陛下の御名は侵されん。其と同じく今此正位の諱には觸れる事は出来ない。多くの參學の人等が諸法實相だとか。或は不變真如だとか、或は法界大總相だとか云ふが、皆其は諱を侵して居る。此正位と云ふものには觸る事も背く事も出来ない。けれども丹霞和尚の云ふた通り、全軀即用枯木花開と申して、軀より云へば正位で有るか、軀を離れた用はない故、そこで全軀即用と云ふ。即ち背觸俱非なる處の正位が皆ク、ツ、付て居る。即ち遍一切の者は正位を離れては決して現はるゝ道理はない。今此枯木と云ふとは正位で有るが、其が直に花の開くと云ふので、萬像が現はれて居る。即ち正位と偏位との離れた者でないことを云ふので。今丹霞は偏位の現はれたる處に依て正位の位の見へる處を申して居る。そこで之れが正位だと認むる處が有れば己に宗を失するて罪となるので有る。何か一乘法とか、或は眞如とか一の動かん者の様に思ふ、ソ、に心を定めると、法と云ふものは死物になつて仕舞ふ。何でも言句に付き廻される様ではとても、此宗意を會することは出来ない。當々正面で有る故、何でも其正面を靦面に會得するのでなければいかない。吾々は靦面相遇無異と申して、チャ、と正位に逢ふて居る。其が分らんと云ふのは横、ツ、に曲つて居るから有る。其から左輔右弼無墮語默。これは天子の諱と云ふに因んで字句を使つて居るので。つまり云はれんと云ふて默すれば默に落ち、語れば語に落ちる。今それを語默に墮しないで自由自在に働らいて行くこれを句々無語と云ふので有る。即ち有語中の無語で、一句半句云つても少しも語に瑕がない。正位は背觸もしない、言ふ事は云ふけれども其か無語と同様で

罪咎はない。能く考えて見ると平常の言葉が有語中の無語でなければならぬ。饒舌り乍ら語に咎のない様に  
なればよいのです。古人は裏から云ふたり、表から云ふたり、色々字句を使つて有るのは、全く全體即用  
の理を合點させるが爲めで有る。次に也勝前朝斷舌才と有るが何でもチャンと正位の觀面に當ればよいので  
有る。別に辯才を待つに及ばん。潜行密用て其行ふ事は、ツツ、行つて行き更に罣碍がない。丁度魚の水に  
行くが如きて當り障りなく、外より窺ひもつかず、また頓と外へも現はれん。吾々が尋常の左右言語と云ふ者  
は、頓と窺ひがつかん様にして。喜ぶ時は喜び悲しむ時は悲んで、ツツ、と遣つて行く、こゝが潜行密用  
と云ふので有る。これは臣下より申たので有る。次に如大羹玄酒不兼味と有るが。これはサツ、パリした處の  
云はれ精進料理とても申しまじやう。支那でも元と酒は無つたと見へて、此の玄酒と云ふことは水の事を申  
したので有る。今日墓處へ詣て、水を捧げると云ふのは、これは古い眞似をする事て有る。其から大羹と云  
ても清淨な者を上るので有る。此等の語は何を申したかと云ふと。正位の位の無心にして天下に遍うして居る  
處の道理を申したので有る。誠に之は妙ですが。是頌妙不道德位不斥諱字云々と有ります、全く此正位と云  
ふものは、如何なる辨才を以ても説盡すとは出来ない。背觸俱非で有る今誰知主と申して前朝斷舌才を以て  
云ひ盡されんと云ふものは何物で有らうか。誰か其本意を知る者が有らうかな。それは只肝心の正位と云ふ  
程の事で、正位の主たる者は誰か。之は今禪宗の言葉で、非但曹谿西天道遠で。之は石頭の語です。即ち正  
位の主となる處の者は曹谿でも何でもない、曹谿には一物もないのみならず、西天道遠して。西天で有らう

が、どこて有るが、如何に廻つて見ても、其正位の主人には逢はれないです。尋ねると云ふと西天遠しで、  
終に分らん事になる。即ち曹谿では本來無一物と云ふて更に贅物はない。元んや西天には尙以てない。扱て  
ソ、成て來ると見付からんとになるが。全體即用枯木花開でチャンと眼の前に突き當つて有る。當々正面の  
處に早く氣が付けば好いので有る。何も曹谿や西天に向つて探すには及ばぬ、チャンと目前に有るのです。  
**偏中至**是位。則明偏之才能。立功幹。蓋四大性萬物質。契用。兩又交鋒不用避。是言偏之功用。  
無窮。於語默是非之間。事。好手猶如火裏蓮。是此交鋒之妙。謂其用隨處甚希有矣。隔法異。  
交鋒。不避不傷。血脈不斷。功實不居。聲色非之途。隨往而歸。其宗。故有冲天氣。此氣能作諸  
**有冲天氣**是言必有。所必歸也。功實不居。聲色非之途。隨往而歸。其宗。故有冲天氣。此氣能作諸  
道而總衆來。臨通無中路。此位。以臣事而遂歸。主。稱冲天氣。是爲君臣之分。而斯分德。能成。  
初二回互也。非分而各立。焉成回互。非回互而圓。焉得各立之全。唯天網也。是故不漏。  
これは事相の上を申したもので。全用即體芳草不艶と丹霞和尙か申されたが、即ち川の働きの有様が體を離  
れない。一體事相を離れた處の體は無いので。其の様子は無所住に往來して居る。即ち本體を離れずして有  
相の働きの有る故、全體即用、枯木花開て花は咲く／＼常住、紅葉は散る／＼常住で、咲くも散るも、皆  
寂滅相で有る即ち芳草不艶で香ひの好い草は、奇麗で無ひ。其香ひの好い處は偏位の用きであるが。其中  
に不艶と云ふ空體の正位がある。そこで、此の偏中至は偏位が正位に至る道理が有ることを申すので。正中  
來の方は正位より偏位に來る道理を申したので。即ち正中來は正の一位。偏中至は偏の一位を申したものと  
見ればよい。そこで、是位則明偏之才能立功幹盡云々とある、易に幹父之蠱と有る、蠱は程傳に事也と申し

て、つまり有事也と有る。何事も親に従ふ事は氣を付て自分が司つて、それを取治めて行ふ。故に其を指して強を幹すると云ふ。何しろ親に従つて事を取り計らふて勤めて行くと見ればよい。之が偏位の分際ぢや。其れから蓋四大性萬物質契用與處云云と有る、此中で用と處とに契ふと云ふ事が最も必要で。即ち火の働きは火の熱きに歸し、水の働きは濕ふ處に就く。これが處と云ふので用と云ふ事は只其働らきを申したので、如何なる働らきが有つても、其働らきの極まる處は正位で有る。そこを一切賢聖の事業皆在此云云と云はれた。それから故曰兼縁と云ふ事は、事を云へば理を借らぬ、理と云へば事を借らぬと云ふことはない様に色々の縁を兼て居る。これは前と同じく曹山の著語です。皆此一切の事業は偏位の縁を兼ると云ふことに承知すればよい。次に兩刃交鋒不用避と有る、兩刃と云へば偏位と正位と鋒を交ゆると云ふ事ではない。只偏位の中に迷と云ひ悟と云ひ。事と云ひ理と云ひ。互ひに相交はつて居ると云ふことを兩刃と申したので有る。即ち衆生と佛と、事と理と、互ひに相離れぬ道理を云ふたもので。これが偏位の位です。只一方丈では全昧が働らきを爲さぬです。其働きの變通無窮於語默是非之間事々交鋒不避不傷云云と云ふので、世間の何事の上成就ても。語默是非の間、悉く偏位の仕事をして居る。此世界は時々鋒を交へて丸て合戦の様な者です。其道理は血脈不斷と申して、人間が呼吸をして生て居ると同じ。天地の道理も永久に相續して行くです。扱其次の句に好手猶如火裏蓮と有る。偏位の位は誠に上手な手際です。火裏の蓮と云へば理外に理の有る事を示したので。ド、も吾々の身軀に就ても、此所で死んだ者があちらへ行て生れる。丸て夢の様な者で、一

旦死んだ奴が今度は生れ變る杯と云ふは、實に火裏に蓮華の生じた様な者です。之は分別妄想を離れて自由自在に何處へても行く處の様子を云ふたもので。此偏位の働らきは誠に好手です。その處を其用隨處甚希有矣隔法異成離合不動聲色純真と云ふた者ぢや。此聲色純真と云ふ字で妄想分別の者でない、無心無念にして行く處を云ひ現はした。故に下に不見傷犯乃天真と有る。これは申す迄もない。次に宛然自有冲天氣、此の宛然云云と云ふのは、分明の義、威光の義だと云ふがさながら、ド、も天に冲ると云ふのは、丁度鶴が天に飛んで行くとき見えなくなる奥深い處に行く様子。今それは何を云ふかと云ふに。偏位の働きは、ゾツと自から正位に入り去る鹽梅を冲天の氣有りと云ふたので有る。そこで偏中至の義が分る。即ち隨往而歸其宗故曰冲天氣云云と有るのは正位に歸する事を申すので。其正位の位は何で有るかと云ふに。能作諸法之機關。之は前にも云ふ通り、有が有れば空が有る、空が有れば有が有ると云ふやうな譯で。都て物が有れば必ず空が有る車にしても廻る處は機關で有る、そこに空が有るです穴のない車では心棒さすとも何も出来ない。其故一番入用の者は空な處なので、茶碗にしても穴の無い茶碗は役に立たない。人間も口から尻へ抜ける處の穴が有る。此調法の機關と云ふ字は余程面白い。都て物は空所に歸する故、世界が活動して居るのです。かやうに見來れば、世の中の一切の事は、此の五位の仕事を爲すです。そこを今日人々種田轉飯蒲鞋燒浴成只爲此事已云云。此中に代他と有るは正位に代つてと云ふ丈です。其から終りの句に非分而各立焉成回互云云と有るが。之は偏位は偏位正位は正位と各々立する處不回互の處が有つて初めて回互を感ずると云ふ丈で有

て、之を世間の事にしても極親密の人は却つて疎遠の様に見えますが、其の疎遠の人が極親密の處が有るで  
す。次の句に唯天網也疎是故不漏と有るこゝちや、天網は疎にしてバラ／＼ぢやけれども、決して漏さぬ、  
密になると却つて漏れるです。即ち不回互の處に回互の道理が有ると云ふことも目から知れるてしやう、

兼中到

是位。則明正偏來至。不偏乎各位。更回而相涉義也。

不墮有無誰敢和

是言兼帶之不動無

有無法。本非有無。實不爲過。格故曰動則死。又隨處擇活。推測不已。見知交加。二法成執。邪習而無相比者。蓋彌長。遍迷諸法。蓋一見者。百禍之根矣。兼帶之法。本離是二。二已不與。從起者去。故無和者。人人盡欲出常流。是言法已不墮。過非人亦應出。見殼有無諸見。及回互不回互等名義。皆爲常。折合還歸炭裏坐。是言究竟歸處。折合究竟也。成裏所歸處也。其歸者非久近時日之可記。其出與歸。無別處所。是中何量有無。已坐炭裏。孟飯。益水。日用兼到。安感證悟。律呂不差。固夫不階級之作務而已。嗚呼鈍置人也久。

こゝに至るが目的です。けれども人間は當々正而五位に至つて居るです。回互と不回互と更に異にして、互  
ひに映ひ合て居るです。丁度珠が皎々として互ひに相照り合て居る様なものである、動則死と申して、正位  
偏位の死活は正を云ふ時は正の獨立、偏を云ふ時には偏の獨立で。働らく時は働らき、死ぬる時は盡天盡地  
死の一枚で有る。何でも物に臨んで、吾々の念頭が動く。いつでも動着するです。機に臨んで疑はず、隨  
處に心好く、ドシ／＼と遣つて行く。即ち日用光中の舉動の上に就て。貧乏の時は貧乏の様に、富貴の時は  
富貴の様に。人の僕と成つては僕の様に、車夫と成つたら腕一杯輓くと云ふ工合に。隨處快活なれば其て好  
へです。觸處生涯隨分足と云ふのは此邊の事を申したのです。ソ、なれば兼中到に外れる處はないです。處

が富貴に在て誇ると云ふと、僅かな事でも吾儘の爲に不和合を生ずる。一寸安樂に構へて居つても、何かの  
事で眠れない事が有る。ソ、すると翌日昨夜はド、云ふもので眠られなかつて有ふかと云ふて。其を苦に病  
むと云ふ様な者ぢや。それでは隨處に快活は出來ない。然らば不墮有無誰敢和と申して。此兼中到の道理に  
何物が實際に同道唱和する事が出來様か。ド、も有無と云ふても。趙州の無と云ふ事を云ふが無々と其無を  
打消した處が打消せば打消す程。無を欠けは無を欠く程、其無が残る様な者で。此有無に墮しないと云ふ處  
は余程六ヶしい。その處を次の句に人々盡欲出常流と申して。世の中の人々は多く常の流義を自拔け様と  
して居るが。つまり次の句で折合還歸炭裏坐と申して言句に述べられん場處が有る。言句動作に預らん處  
の者で有る。此の坐すと云ふ讀方と夫から坐せんと欲すと前の句に反つて讀む處の讀方と有るが、ソ、坐せ  
んと欲すと云ふのは轉處が有て場處がきまらんから活語に成て働らいて居る。ソ、これはどちらでも聞える  
が、能く其の意を會して有る方がよい。古人は分らせたい爲に色々と言ふ丈の話で有る。其から前に戻つて  
是言兼帶之不動無の云々と有るが之は分る。次に以有識已來推測不已見知交加二法成執云云。此の識ると云  
ふ事は分別の起つた處で。其が爲に色々推測して。佛性で有るとか第一義諦で有るとか、或は一路涅槃門  
だとか色々事を推測するです。丸て盲人が小便たれに起きた様な者で色々工風をして手探りを遣つて居  
る。そこを迷諸法云々と有る皆之れ百禍三根で有る、有見无見八萬四千の煩惱悉く迷いの根本に成つて居る。  
此兼帶之法本離是一と申して妙に諸縁に應じて諸有に墮せずと云ふ處です。ソ、行けば隨つて起つて來ても

別に色々の諸縁の者に對して和する者はない。更に諸有<sub>二</sub>不<sub>一</sub>隨しないのみ、つまり墮せずして應じて居るのです。其から、次の句に是言法已不墮過非人亦應出見殿云々と有る。つまり見殿を出ると云ふのは常見の見や、無見有見の見に這入らない處を申すので有る。其から然畢竟無實可出故曰欲出今是何時節銀盤盛雪類而不齊老鶴移夢時と有るが。これは同に非ず異に非ずと申して、別に色合は無ひけれども銀と雪とは違ふ様な者で、三界に居て三界を離れて居る、即ち人間界に居り乍ら人間界を離れて居る道理が有る。即ち六祖が獵師の處に十年も居つたと云ふ事と有るが一處に居ても、チャンとそれに和せない處が有る。誠に類して齊しからざる處の道理が有ります。その處を老鶴移夢時と申すので、<sub>マ、</sub>こゝらの鹽梅を總ての事に用ゐたら好からふと思ひます。其れから次の句に就て。炭裏と云ふとは千峯萬峯に入るとか。沒蹤跡にし去るとか。諱を侵かさずしてそこに至るので無れば本當の者ではない。そこで此處は非久近時日之可記其出與歸無別處所と申して。五百塵點劫と云ふ様な時日を以て、其時日を云ひ現はす可き者ではない。そこを及其到也兼帶非兼帶豈以位次而論焉哉云々と有る、初其中の吾有我而佛手驢脚とは、名の名とす可き所が無いと云ふとで。只其邊の事を心得て一念一句の下に於て出離する所の道理も有る。又僅に一念の上に於て畜生道や餓鬼道に陥る所の道理も有るから、能く其處を合點して御覽なさい。その所は容易にはうけかわれない。只坐炭裏蓋飯盆水日用兼到で。日光中に使つて居るので、少しも違はない、不階級之作務と申して、チャンと已に具はつて居る所の五位を、日光中に自由にして居ると有る故。色々と差別をつけて角立つ事はない。兼中到

と申しても外の者ではない、朝から晩迄吾々は兼中到の使ひづめ有る。チャンと妙に諸縁に應じて諸有に隨せん所を造つて居る。何か兼中到と云へば一つ他に認る所が有るかと云ふに。決してそんな者はない、當々正面皆兼中到して有る。然るに此兼中到に迷ふて居るのは、馬鹿な話で有る。マ、色々と申して來たが能々此の兼中到に馬鹿にされて仕舞ふたので有る。そこを嗚呼鈍置人也久と申すのです。先づこれで偏正五位の大體は濟んだのです。之れから功勳五位に移れば大變面白くして修行の階級が分り偏正五位程は六ヶ敷ないが。今は時間がないでこれ丈にして置きます。

(終)

## 洞山五位説 (終)

# 臨濟禪師四料簡

釋 宗演禪師御提唱

(文 挾 廣 文 筆 記)

師晚參示、衆云有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、時有僧問、如何是奪人不奪境、師云照日發生舖、地錦、瓔珞垂、髮白如絲、僧云如何是奪境不奪人、師云王令已行天下衛、將軍塞外絕、煙塵、僧云如何是人境兩俱奪、師云并汾絕信獨處一方、僧云如何是人境俱不奪、師云王登寶殿、野老謳詞、

此の度、當大學林に於いて夏期講習會が行はれると云ふ事は、豫ねて雜誌上でも拜見して居りました、ところで、私が此度、信州の佛教講習會へ赴いて居る途中に於て、コチラから御人が参りつて、是非コチラへ参るつて、少こし話しをする様にと云ふ事でありましたが、何分私の方では、夏安居中で他出する事は、のがれられない所を強ひて信州に参つたので、今日は歸り途であるから、別に御話しする事は充分出来ない、マルテ驟雨の通る様な者である、で、あちらでも、臨濟録の或る部分を講釋して居りました、ソコテ今日も亦その語録の中にある四料簡の御話しを致すのであるが、此の四料簡と云ふのは、料は「ハカル」簡は「エラフ」と云ふ字ですが此れを我々が宗門の提唱風に云うてしまへば極アツサリとした事で、別段多辯を費やすに及ばぬが、夫ればかりでは、始めて御聞き取りの御方には如何かと思ひますから、實は少こしへッ下り

て御話ししやうと思ひます、それで此の四料簡は洞家に於ける五位の如く精剛なる武器があると同じことで、臨濟にも四料簡と云ふ事は随分銳利な兵器である、禪と云ふ者は御互に承知して居る通り、元より宇宙の真理なるものを言句思慮の上に顯はしたので、否、實は其の言句思想などと云ふものは超絶してしまつて、ソコテ始めて真理に悟入すると云ふのが、これが禪の本領です、である故古人は吾宗に語句なし更に一法の人に與ふるなしと云ふ、此が禪宗の家常の茶飯です、即ち彼れ是れと辯舌を以て説き顯はす所の法ではない、ドゥッとして眞の境界を得んとすれば、一回白汗を洒いた上に豁然として始めて貫通する事の出来るので、何程富樓那の辯を振つて學理を論ずる事が出来ても、禪の本領より見れば遠うして遠し、ソ、ン、ナ、ラ、バ、禪と他の學問其の學問中の學問とも云ふべき哲學、即ち禪を哲學とは關係があるかと云ふに、マ、ン、ザ、ラ、無關係の者でもない、乍併、哲學を以て禪をさばくと云ふのは依樣畫、胡、盧、と同じで到底哲學者が自分の知識の思想を以て、禪宗の本領を窺ふ事は斷じて出来ぬと云ふて置かねければならぬのみならず、言語を絶し思想を打超へた所に於いて始めて悟入すると云ふ、云はゞ直覺的のものでそれから、這入らなければ禪の眞味は解らない、大抵世間の學問と云へば、先づ哲學で云ふても皆な知識とか經驗とか、さう云ふ學理に當て籍めて其の考へた知恵を以て、而して真理を規則的に系統的に研究して行くと云ふのが當然のやり方で、頗るそれは有要な學問ではあるが、禪と云ふものは、其趣向が大いに相違のあるもので、禪より哲學を見ると大變迂遠な者である、併し希くは、哲學を研究し、それから禪にも這入り、兩面に通じて、而して真理を辯證しやうと、と云

ふのが御互の希望です、悲しひ事には、禪を會して居るものは他の學問の方に迂いと云ふ傾きがある夫れから學者は只だ學理々々と云うて夫れに當て籍めやふと云ふ、ヤ、ハリ一邊に傾く風がある、それ故將來禪道佛法を世に顯はさうと云ふには兩方面共に、御互に研究しなければならぬ、で、まづ本文に移つて一々御話し致しましやう

師晚參示衆云……此れは臨濟錄中の一節である故、一段々々に切れて居る其の中の一段を掲げて居るので、有時奪人不奪境、有時奪境不奪人、有時人境俱奪、有時人境俱不奪、

此の中文字より定めて置かねければならぬが、即ち人と境とを四ツに分けてある此れが一番の字眼です、人と境と使うてゐるのは佛法の書物の中でもすくない、多くは此を換へ詞で云へば、常に心と境と云ふて居る、心は即ち一心、境は即ち萬境です、心と云ふ字を人の字に換へた、文字は換つて居るが平生云うて居る心と換へりはない、此れは最初に腹へ入れて置いて貰はねばならぬ、此を、ダ、ン、と換へ詞で云へば、名目が多いのですから、心と境と云うてもよいし、自と他と云うてもよい、又主と客と分けてもよい、若しくは原因と結果に分けてもよい、即ち世間の各學科に種々さまざまの名詞がある如く、此れもヤハリ所に依りて名を換へてあるが、兎に角、心と境とに定めて置けばよい、どころが、サ、ウ、どうでしやう、心と境と云ふ字は常に佛法の中には使ふて居る字であるが、成程此の世界は諸法無自性と云ふて、元來諸法は自性なし即ち一切の諸法には自立の性質がないと云ふ事で、此の性質と云うても、こゝは能く聞き分けて貰はなければならぬ、



今は充分談するではない、例せば、マ、こゝに倫理學上、善惡と使うても即ち善があるから惡もある惡があるから善もある、けれども、善を取り除いたならば惡獨り立つ事は出来ない、又惡を取り除いたならば善獨り立つ事は出来ない、此れを佛法の詞で諸法無自性と云ふ、此れが有る故彼れも立つ、彼れがある故、此れも立つて行くこと云ふ事になるが、進んで絶對界に這入れば、ソ、ナ事は無い、善惡是非凡べての相對的の詞は皆無くなるが、暫くこゝでは人と境とに分けて顯出した、ト、コ、ロ、デ、人と云ふもの即ちこゝで云ふ人、自己を原因とすれば凡べての萬物は結果と云ふ事になる、原因結果と云ふ事は御互に常に使つて居る詞ですが、原因と云ふ者の大抵の定義は此れあれば彼れあり、此れなければ彼なしといふ、此れが原因のきめ方、それで結果の方は彼あれば此れあり彼なければ此れなしと云ふので、只だ此の主客の二つがある丈です、自然人なら人、心なら心が、原因になると一切の萬物は、此の原因の中に隠されて仕了ふ、若し又、境が原因の主となれば、自己、心と云ふ者は皆な萬境の方に覆はれて仕了ふ、奪はれて仕了ふ、此れを虚心に平らたい觀念で眺めると、原因と結果と同じ事で、原因なきの結果は本當の結果でない、結果なきの原因は本當の原因ではないです、ダン、と證じつめて見ると、原因と結果とを立つるのは、假りに終りと始めを立つるとか、或は有形無形を立つるとかと云ふ、只だ賓主處を換へる丈です、カ、ウ云ふ事を哲學者に言はせると一つの辯證法とでも云ふてしよう、即ち此れあれば彼あり此なければ彼なし、彼あれば此あり彼なければ此なしと云ふ工合に、其の凡べての論理法で、一昧の者に及ぼして見ると成程哲學に當て符めても臨濟の立て方と換つて

居らぬ故、哲學者は哲學の一種であると云ふ工合に説く事もある、夫れだけでは、我々は満足する事は出来ない、夫れは大體臨濟に於てカ、ウ四料簡を立てたのと云ふのは、此れは正しく一つの法を示しただけである、法を使ふ所に於ては絶對的に人と云はうが、自己と云はうが差支ない、臨濟の宗旨はこゝです、元より對待を絶した所の一と一つの活きたる所の眞理を暫く四料簡に依つて自由自在に使ひ廻はすのである、夫れ故一つの眞理を四通りの方面から見たと云ふてもよい、即ち前より後より左より右より見たのである、例せば一つの富士山ではあるが、其の富士山の絶頂に登れば對待を絶して居るが、併し其の眺める方面に依つて即ち駿州と甲州とは眺める趣きを異にして居る、それで餘計なことじやが假りに、昔しから今迄の西洋の哲學に當て符めて見ると、奪人不奪境と云ふのは、唯物論に似た事になる、此の唯物論の事を夫れ一々盡して居る事は出来ないが、まづソ、ウ云ふ有様ですそれから奪境不奪人と云ふと唯心論の趣きに似て居る、夫れから、人境俱不奪と云ふと唯理論と云ふてよいでしょう、又絶對論にも當るでしょう、夫れから人境俱不奪と云ふは二元論又は相對論と云ふやうな者で、一方で一元といへば一方では二元論と云ふ様に凡そ西洋東洋の哲學者の説が、今に至る迄歸着する所はない、一元論者は、どこ迄も、凡ての宇宙を一元で觀察しようと思ひ、二元論者は二元で凡べての宇宙を觀察しようとする、唯心論者も唯物論者も亦爾り、此れは水火相容れられざるもの、如くに固執して居り、甚だ窮屈千萬である、臨濟の眼より見れば最も窮窟である、此に至ると臨濟は自由なもので、或時は奪人不奪境と云ひ、或時は奪境不奪人と云ふ、即ち唯心論を以て唯

物論を否定する事もあり、唯物論を以て唯心論を否定する事もある、又一元論を以て二元論を否定する事もあり、又二元論を以て一元論を否定する事もある、此れを佛法の詞で云ふと即ち掃蕩門又は遮情門と云ふ、其の方から云へば、互ひと互ひに否定すると云ふ場合がある、若し又表徳門即ち建立門より云へば此れは互に許ると云ふ事があつて、即ち唯物論を叩いて見れば、唯心論は離れて居らぬ伴ふて居つて、又唯心論を叩いて見れば唯物論も伴ふて居つて、切れ／＼になつて居らぬ、又二元論と一元論とは互ひについて廻つて居ると云ふ理窟で、即ち互に助け互に成すと云ふ事になる、即ち奪ふ時には一切奪ひ、與へる時には凡べて與へると云ふ遣り方である、

凡そ此の臨濟録一部は勿論の事、臨濟禪師が一生涯、人の爲にして法を扱ふ事は、此れを自由自在に振り廻はしたので此れと云ふ者に依つて居らない、或る場合は如何是佛と云へば、直に一棒を施し、又如何是佛と云へば、一喝を下すと云ふ様に、併し此の一喝や一棒を振り廻はす所の形や言語の上で、其の的意を見やうとしたなれば、決して禪の禪たる本領を見る事は出来ない、夫れで此等の事を合點しない所の者は、臨濟は何にもかも奪ふて否定する故、西洋にある懷疑論者の様であると云ふ者があるも知らぬが、決して、サウではない、なぜなればと云ふに、肯ふ時は肯ひ許す時は許す底の一定の法がある、夫れなれば獨斷論者であるかと云ふに、ソウではない一定の者を固執し固定して居らない、其の邊を見て貰はなければならぬ、サウ云ふ事は文字の上に現はれて居らぬが、兎に角活きたる禪意を會して置いた、此れを眺めますに或時は春の

景色、百花爛熳と咲き亂れ鳥も吟すると云ひ、或時は夏の景色、或時は秋の景色、天地蕭殺として木の葉も飛び散ると云ふ、ソウ云ふ天地自然の現象も宗旨の扱ひより見れば、禪意を會得したも同じです、夫れて能く或る者が出て来て云ふ事であるが、此の四料簡を外交上に使つたならばよからうと云ふ者もあるが、併し此の四料簡を、一とつの「サンガテ」や、「ブンマツシ」と見てもいけない、此の四料簡は元來一心を以て萬事に向ひ隨機應變自由に取扱ふのであるから、此れを樽俎折衝の上にも、又商法の掛け引上であらうが、又御互ひ人と交際する上に就ても、我々の一舉手一投足の上にも自由に使ふ、必らずしも一喝を吐き一棒を下さなければならぬと云ふ譯ではない、即ち佛と問へば乾屎橛とか、麻三斤とか答へなければならぬと云ふ鏘形的では、此の眞意を會する事は出来ない、餘り弘むると限りがないから、此れより一句々々に就いて申しませう

有時奪人不奪尊、即ち或る場合は心とか我とかと云ふものを、全然奪ふて仕了ふと、萬境がずらりと現はれて居る、此れが所謂甲あれば乙あり、乙なければ甲なしと云ふ事に當て籍めて見てもよい、又原因結果に見てもよい、即ち萬境が立すると云ふと、人は鶴の毛の先き程も立たぬ、併し此ればかりでは眞理ではない、即ち眞理を甲乙いろ／＼の方面から見ただから有時にはとこと、わつて居る、此れは一才一とつ咲いて居る所の草花でも、ソウです別に百合には限らぬが、露を帯びて居る朝顔の花を見ても萬境を代表して居る、其處に至つては「ソロモン」の榮華も、奈良朝の榮華も、此の一とつの朝露に咲いた花にも及ばぬ程である、即

ち萬境に現はれて居る、彼の山の巍々と聳へて居る有様、又河の滔々と流れて居る有様、凡べて蒼の天に戻り魚の淵に躍る有様、皆サウです、此れを奪人不奪境と云ふのである、又有る場合は、グルリと地位を換へて、乙あれば甲あり乙なければ甲なしと云ふ事を奪境不奪人に當て辨めて見ると一切の境を奪ふて一切の人を奪はぬ事になる、常に禪者が平生云ふ事です、又我々も云ふ事です、此の世界に、土一と嘗めもない、此の本堂には誰れ人も居らぬと云ふと一寸悟り臭ひ様に耳に觸れるかも知らぬが、悟りでも何んでもない、他の教理の天台の空假中にも華嚴の四法界にも、此場合はあるのです、今は夫れを辨ずる暇はない、兎に角、境を奪ふて人を奪はぬ事になると、所謂、宇宙無雙日一乾坤只一人と云ふ句がある其の趣きです、一切萬境を奪つて我一人と云ふ境界、所謂唯我獨尊の境界と云ふのは、こゝちや、事をなす上でもサウです、或る一とつの仕事をして仕上げやうとするには、奪境不奪人の境界で行かねばならぬ、例へば屋島の檀の浦の戦のキツツ、ハツツの上、敵味方接衝の中に在つても大寂定中である又「ナポレオン」の所謂、豈に我を遮きるの「アルプス」山あらんやの意氣である併し戦ひばかりではない、自分と云ふものを立て、他を奪ふて獨立の境界になるのは、萬事に付けて必要である、

夫れから人境俱奪、此れも同じ事である、甲なければ乙なし、乙なければ甲なしと云ふ有様で、諸法と云ふものは凡べて相對です、善と云ふ者があつて惡が立ち、人と云ふ者があつて境が立つ、凡て能認する意識がある故、能認せらるゝ者がある、能認せらるゝ者がある故、能認する意識が立つ様な理窟で、此れは互に倚り掛つて持ちつ持たれつして居る、夫れを解き離して見ると、人境俱奪て人も境も立たぬ事になる、所謂諸法無自性ぢや、今度は第四番に現はれて来る、今云ふ所と正反對で、人境俱不奪といふ、即ち甲あれば乙あり、乙あれば甲ありと云ふ、此れが所謂人は境に依つて立ち境は人に依つて立つ鹽梅です、壞らずして成立つて居る、境は人を容れ、人は境を容れて衝突して居らぬ、

此の四料簡は一種の學理を成立させたのでない、自然現象を云ひ顯はしたもので、我々の心理作用は凡べてこゝにあるのです、コッまづ此れだけで句面は分かつたか知らぬが、實は我々の本領ではない、コッナ蛇足を添へて御話しをした丈である、その積りで御聞き取りを願ひたい

夫れから問答に就て講じます、此れは人が出て来て問ふたのであると見てもよいが自問自答と思ふてもよい、兎に角問答牀に出來て居る、即ち第一が如何是奪人不奪境、師云照日發生舖地錦、瓊孩垂髮白如絲、扱て私が前で申した様な迂遠な辯は臨濟禪師は弄しない、此の文字言句程便利な者はないが、大に又語弊を具へた者で、凡べて學理と云ふ事は悲しひ事には、多く文字言句にヒツツヒいて仕了ふて、四料簡と云ふも直ぐ其規則に、カラマレテ仕了ふ、大鉢吾宗に言句なく更に一法の他に與ふるなしと云ふ、其處から來て居るのですから、饒舌べる時には悉く世界を一枚の舌として饒舌るです、夫れ故凡べて詩的に舒布する有様如何なる理窟も、どいかぬ、ところから來て居る、夫れから自然を歌ひ出し、自然の儘を感じて接した所を謠ひ出すので、所謂言句を絶し見聞思慮を離れた處から出て來て居る、夫れ故詩的の考がないと、禪宗語録は、サッ

ハリ趣味が解からぬ、詩の境界詩の意味が解からなければならぬ、其處が禪宗の一とつの特徴であつて、今同じ佛教の中でも教相的になると道筋を立て、論じてある、夫れに反して、コチラは不規則の所、即ち無造作の所に天真爛漫の妙を示すといふ、夫れ故、詩の語句に就いては、自分と自分で能く練つて考へて見なければならぬ、夫れで此の答の句面をザツト申すと煦日と云ふのは、暖日と云ふも同じ事で、春先きになると地に鋪く錦で、古歌にもある通り「見わたせば柳櫻をこきませて都を花の錦なりけり」此の境界には己といふ人と云ふものは少くも立つて居らぬ、夫れで萬境は直に原因と云ふ有様を述べて、孺孩垂髮白如絲、人を云ふやうであるが、孺孩は即ち生れたばかりの赤子、然るに白髮と云ふは赤子に無い筈である、こゝが即ち人を奪ふて居る、コウ云ふ處に言句の妙を顯はして居るので、昔し老子は白髮で生れたと云ふ、今は夫れには拘はらない、即ち孺孩垂髮白如絲、直に人を奪ふて境を奪はぬ有様が顯はれて居る、夫から次に如何是奪境不奪人師云王令已行天下徧將軍塞外絕煙塵、誠に今日の明治の狀態が現實に顯はれて居る様です、王令が一たび行はるれば誰れ一人背く者はない、天子の掌中に一切の主權を握つて居る、又夫れと同時に一たび帝王の御信任を得て將軍なる職權を行ふ時には、此の句面の通り塞外には將軍が令を専らにして誰れ一人反抗するものがない、煙塵を絶すと云ふ事は、煙塵は物騒と云ふ程で、昔は戦争でもあると「ハ、ロ、シ」を揚げるから此字が出来た、即ち將軍の命令には誰れ一人立て附く者もなく、天子の御領内には誰れ一人王令を奉せぬ者はない、云はゞ日本四千萬人、上み御一人で、しろし召して居らるゝと云ふ、全く御一人である、

夫れから次に、如何是人境兩俱奪師云并汾絶信獨處一方、此の并汾と申して當時の支那時代では北の方に有つた國で、一向其の時分には政令の行きとよかぬ所であつて、此の并州汾州は全然中國と懸絶して居つて音沙汰も絶へて居ると云ふ有様、誰れ一人も交通をしないと云ふ、シテ見ると人と云ふ者も境と云ふ者も有るが如く見ゆるが、其の用をなして居らない其働きをなして居らぬ故これを俱奪といふ事を云ひ顯はした、夫れから次に、如何是人境俱不奪師云王登寶殿野老謳謔、此れは人も境も各々自由を恣にして居る有様です、丁度仁德天皇様の御詠に「高き屋に登りて見れば煙立つ民の窟は賑はひにけり」と「仰せられた今此の御歌と此の句と殆んど相應して居ります、誠に、ドウも仁德ある國王が寶殿に登りて眺むれば野老謳謔すと云ふ、野老と申しても農業者ばかりでない、各々一般の人民が其業に勵げみ、其事を樂んで、國王も一般人民も眞理の徳を分けて互に奪つて居らぬ、互に相許して居る有様は、此の短簡なる詞で云ひ顯はした、即ち王寶殿に登れば野老謳謔すと大抵此れで意味が通じたか知らぬが、まづ通ずる様な積りで申したです、此れを敷演すればますく蛇足を付けて御話するだけです、なほコウ云ふ事は只た聞た時ばかりではない、其の四料簡を使ひ廻はす上にあるのであるから、臨濟の四料簡は此通りと云ふ丈でない、偶まゞ佛法の大意を尋ねると云ふと一棒一喝の上に此の四ツを示して居る事がある、臨濟録を靜讀して見ますと其の場所くゞに依つて此の四料簡を自由に使ひ廻はした事は掌を指すが如く能く分かつて居ります、ドウカ暇のある時に見て下さい、先づ此れで……



## 修證義大意

大内 青巒居士述

(文挾廣文速記)

私は此の二十七日より、修證義の御話をする御約束を致して置きましたが、生憎病氣に罹り遂に出席する事が出来ないうて、甚だ自分に取ても不本意のみならず、皆さんに對して申譯のない次第であります、然るにコチラの講習も最早明日で満散になると云ふ譯で、自分に出て諸君に申譯をしなければならぬし、又此會を設けられたる所の幹事發起者諸君に於ても、私しが出ない爲に、あなた方に對して甚だ氣の毒に思ふ邊もあり、自分も亦甚だ遺憾であるから、御目に掛りて御挨拶をしなければならぬと思ふて、それで、<sup>マ、ハ</sup>シの御詫ひのしるしに、會て私が書いて置きました讚佛偈の講話を一部宛諸君に進げて下されと云ふて、幹事の手許まで差上げて置いた様の次第であります、夫れ故今日もとても御話しは出来ないのである、昨日も島田善根翁が参りまして三十分許りの御話、夫れも學問上の話であるから、別段力を要するのではないが興に乗じて話を致して居りますと、其中に多少熱が高まつて來ると云ふ様な譯で、直ぐに熱度が一度已上も高まる様になつて來ます、醫者の申すには、「<sup>オ、コ、リ</sup>」は最早おちた様であるがまだ脾臟と云ふ者が膨脹して居つて本當に收縮して居らぬから、兎に角いつ起るか分からぬ、それ故、なほまだ「<sup>キ、ナ</sup>」を呑んで居れと

云ふ様な譯で、今日幸に起らぬと云ふ約束の日です、それで明日は閉會といふ日であるが熱が發作すべき約束の日である故、明日はドーカ分からぬ、夫れ故、今日推して出ました譯で、只だ御目に掛つて、ホンの御挨拶だけで、到底何にも御話しが出来ない、だか、大鉢元と御約束の御話は修證義を御話し申す事になつて居るが到底あれは、五席や八席では充分に説明が出来ぬと云ふ事は開會の日に御断りを申したのである、委しくは御話し申せば、三十節已上もあるのですから、僅か位の御話しでは、自分でも、たんのうせぬのであるが、まづ大略大段五段と分かれてあるから、一段／＼に就て、その大鉢だけを御話し致さうと最初から考へて居りました、それで六席になつて居るのであるから都合始めの一席だけは簡短に大鉢を御話し申して、跡の五席だけは一段／＼に就て大意を御話しする見込みであつたのである、それで只今は前に申し上げた通り何んの御話しも出来ないのであるが、僅か三十分か四十分の間、思ひ出づるに任かせて聊か修證義に就て御話しを致さうと思ひます

扱て此の修證義と云ふ者は曹洞宗の在家化導と定めてあるのである、何故に此れは定められたかと云ふ事は根本的に心得て置かぬければならぬ、それは人にも話し自分も曾て十數年前に講じた處の者が印刷になつて出版されて居る事故御覽下された御方もあらうが、大鉢曹洞宗に於て、佛祖正傳と唱へ、迦葉から二十八代達磨に至り、師資嫡々相承して五十一傳して承陽大師に至り、それから諸君に迄も相承して來た事は、誠に立

派であるが、これは云はゞ、形式であつて、儀式の上よりは二様になる事は諸君が御承知の事である、其の二様に就ては、大法を相續するに就て、即ち嗣法傳法の事は全く出家に限る事であつて在家の人には到底出來ぬ事である故、高祖は現に正法眼藏の中に、其の御断りはがしてある唐朝の龐居士は英邁な入て禪門に於ても餘程達せられたる御方であつて、悟りの上では歴代の祖師に後れを取る事は無からう、けれども出家でない故、傳法相承する事は出來ぬのである、それである故江西の馬祖大師の堂奥に入る事は、許さるゝ譯にはいけない、乃至進んで維摩居士は、釋尊の御一代の御化導の上に於ても、最も目醒ましい事で、誠に結構な人である故、維摩は實に居士中の泰斗のみならず、御承知の如く文殊菩薩も後へに瞻着するだけの大見識を持つて居る人である、それで此人の御自身の悟り其見識と云ふ者に就ては少しも不足はない筈である、てはあるがサ、云ふ維摩居士でさへ、若し此れが出家であつたならば、更に好維摩を見るであらうと仰せられた如く、始終出家と云ふ事に重きを置かれて説かれたのである、それ故出家と云ふ僧侶の、側より見ると、たとひ、どれ程の悟りがあつても、識見があつても、在家の身分では、嗣法相續が出来ないので、これは昔しの實際の事であつて、今日迄も儀式の上はサである、夫れで自分が曹洞宗に於ては、眞實佛祖正傳の佛教を受けつゝあつても、坊さんでなければいかん事になつたら、在家の人達ちをドー諸君は化導するであらう、同じ在家の人であり乍ら隣りの眞宗寺に行けば在家同士何んにもかまはず、出家に限らぬ、戒定惠三學も入つた事ではないそれで口に南無阿彌陀佛と申せと云ふのではない本願の謂はれを開き開信の一念に

ヤレ難有やと其の本願の謂はれを信ずる心が起つた時、親鸞も蓮如も我々も誰れも彼れも少しも違はぬ所の  
大涅槃の悟りが開けるのである、夫れは天台の流義から云ふても其の通りで天台大師の御一生の仕事は何ん  
であるかと云ふに、あれ程の三大部と云ふ大著述をなされたのであるが、結局は一生に初住に入ると云ふよ  
り外はない、一生に初住に入ると云ふ事は今更申す迄もないが五十二位の中、第十位の満じた即ち信満の時  
初住である、それで初住に入れば天台の三大部の學問も修行も、それで盡きて居るので、今生に於ては最早其  
外に目的はない、トコロが此れを眞宗の側から云ふと十位の満じた處、即ち信満の所が直ぐ様入正定聚住不  
退轉の時である、其の信の満するのが、即ち聞信の一念に彌陀本願の謂はれの聞き分けられた時、之を階位  
に就て十とか八とか、云はぬけれども、信心決定した時が直ぐに住位に入るのである、天台では、初住と云  
ふが、即ち信の満じた時、佛に成る約束の出來た時が眞宗の教である、眞宗の方では、翁、媪や一文不知の  
者でも信ずる事が出来る、それがマ、淨土宗に行くと、モ、一段と化他を廣くして、區別を立つるが、誰れ  
も彼れも上品上生するとは云はぬが、下品下生でもヤ、極樂淨土の區域には入るのである、淨土宗の元祖  
法然上人が「たゞ往生極樂の爲めには南無阿彌陀佛と申して往生するぞと思ひ取る外に別の仔細さふら  
ず」と云はれたのは其の方の側である、此の一念と云ふ事の念は、心念憶念の念ではない、上人の念と云ふ  
のは、たゞ南無阿彌陀佛と稱ふるばかりで、必らず往生が出来ることと云ふ事である、然るに眞宗では念佛とは  
佛名を稱念することと云ふ事ではない佛願を憶念する事であると云ふて、聞信の一念に自然に即時に必定に入る

と云ふ、然し信じさへすれば譯けはないが容易に信じ難い、それを易往無人と云ふ聞信の一念で往ける故に  
行き易いけれども、眞實に信心決定する人が少いから往く人がない、眞實信心を得たなれば別に六ヶ敷事は  
ない、親鸞上人や蓮如上人と一蓮托生で、どの様な翁媪でも往けるに相違ない、サ、云ふ教が隣りにあるの  
ですが、曹洞宗に來ると佛に成りたいと云ふ場合には出家をした上に戒行堅固に守り、坐禪辨道せんければ  
ならぬと云ふ、それではとても、いけないと云ふことになる、偕、ソ、なると曹洞宗の信者なる在家の者は、  
右往左往で依り處がない事になる、ソ、少し本當に曹洞宗の宗意を研究して見たいと云ふ者が有て、承  
陽大師の眼藏を一度拜覽する事に成て深く考て参りますと、到底曹洞宗に於ては我々在家の者は成佛が出來  
ないと云ふ事になる、承陽大師が慥に仰せられて有ると云ふ事になれば、遂には私の宗旨はいけないから寧ろ  
改宗したいと云ふことに成て、遂には聞信の一念で直に成佛の出來ると云ふ、樂な宗旨に這入りたいと云ふ事  
に成て來る、何の爲めに我々は、ソ、ナ面倒な宗旨の下に居る事であらうぞ、私は早速曹洞宗の信者と爲る事は  
御免を蒙る、隣の樂な御宗旨にゆきたいが、ド、であらうかと云ふ眞面目な問を起された場合に、曹洞宗の  
御出家方は、何と御答になるであらうか、是は迂濶に聞ては困る、實は大問題であると思ふ、御出家方が今  
迄通り右往左往として御儀式だけが有難いと云て居る中ではよいとした所が、それは本當の者ではない本當に  
在家を化導すると云ふには棄ては置かれぬ、若し在家には構はず自己の修行だけでよいとして、山の中  
へでも遊げて居る事になれば、それは出家としては本當の者知らんが、到底在家を化導する譯にはゆかぬ

到底それでは今日の曹洞宗を維持するわけにはゆかない、けれども前云ふ通りで有たならば、在家の少し思慮ある者は眞面目には信ずる事にはゆかない、遂には改宗することになる、何とも是は仕方がない事と思ふ茲に於て何故に曹洞宗は、云ふ風であるかと云ふ事に付て歴史的に御話をしてみたいけれども、それは今充分御話するの暇がない、先づそれは御預りとして、兎に角、實際に付て曹洞宗に於ては在家化導の方法が有るか無いかを研究して見ると、決して無いのではない、所謂佛祖正傳嫡々相承して高祖大師まで五十一傳して來て居る、即ち釋尊世出以來迦葉から阿難阿難から商那和脩と云ふ様に今日まで傳つた者に付て見ると、二様に成て居る、即ち一は出家嗣法の相續と、モ、一はそれと同様に傳戒相承の儀式が慥かに有ると思ひます、其中で傳戒相承の方は、ド、ウ云者かと云ふに、此戒は梵網經に説いて有るが、天台に於ては圓頓戒と稱へる戒法で有て、是は傳教大師も一生の力を奮はれて顯戒論を書き大乘戒壇を立られたそれは傳教大師の御生涯の歴史を見れば解ります、それ程傳教大師が力を入れたる所の圓頓戒なる者は曹洞宗に於ては迦葉以來五十一傳して、承陽大師に至るまで嫡々相承して、夫から更に展轉して諸君に迄至たので有るが、其戒は如何なるものかと云ふに全體戒には比丘戒も比丘尼戒もあり、優婆塞優婆夷の戒もあるが、今此戒は申す迄もない出家在家に通じたる菩薩戒で有て、敢て出家に限たものではない、出家在家俱に受けなければ佛とはなれぬ、昔より無戒の佛はない、出家と雖ども必ず戒を受けなければならぬ、在家と雖ども必ず戒を受けなければ、成佛は出來ない事に成て居る、即ち此在家出家に通ずる圓頓戒即菩薩戒は曹洞宗に於ては系圖正しく嫡々相承して居る故、今其事を委しく話せば限りもない事であるが、先づ略して云て見れば、承陽大師が大篤信家たる波多野出雲守義重を御化導遊ばさるゝに付ても只此菩薩大戒を授けられたのであつて佛祖の命脈を嗣續したとも傳法嗣法とも仰せはない、それから又鎌倉に於て北條相模守時頼の歸依を受けた時にも唯佛祖正傳の菩薩戒を授けられたので師資證契即通する所の嗣法相續ではない、それで高祖大師の御一生涯には在家化導と云ふ事になれば、必ず御受戒より外はない、然らば其の受戒と云ふものは如何なる者かと云ふに、即ち衆生受佛戒即入諸佛位位同大覺已眞諸佛子也と佛祖が證明した、所て、諸佛の位に入ると云ふも、何か向に位と云ふ者が有て這入るのではない此戒を受くる當躰が直様諸佛の位に入るのである、即ち前に云ふ所の初住の菩薩に成る位ではない、直様諸佛の位、大覺と云ふ妙覺果滿の佛と少しも變らぬ所の身となるのである、只此戒を受けさへすればよいので、ソ、コを衆生佛戒を受けば諸佛の位に入ると云ふ、コ、では持つ持たぬと云ふ議論はない、只受けさへすればよいのである、夫故曹洞宗に於ては此受戒を以て在家化導の標準としなければならぬと云ふ動すべからざる根據は、ソ、コにある、全く傳戒相承の外にはない、が然し此傳戒相承の義に付ては室内相承の儀軌の外に何ぞ今日の愚夫愚婦にまで及ぼして分り易い所の祖師の御示しの纏た者があるかと云ふに、ド、ウも見當らない、正法眼藏の中を横に豎に種々と拜覽して探しても單純に分り易いものはない、皆悉く高尚すぎた御説のみである、室中に傳はつて居る所の傳戒の儀軌は單純であつて、誠に結構ではあるが、然し此儀軌は中々六ヶ敷いのである、外に何か在家化導の標準として在家の老若男女誰が見ても

して居る故、今其事を委しく話せば限りもない事であるが、先づ略して云て見れば、承陽大師が大篤信家たる波多野出雲守義重を御化導遊ばさるゝに付ても只此菩薩大戒を授けられたのであつて佛祖の命脈を嗣續したとも傳法嗣法とも仰せはない、それから又鎌倉に於て北條相模守時頼の歸依を受けた時にも唯佛祖正傳の菩薩戒を授けられたので師資證契即通する所の嗣法相續ではない、それで高祖大師の御一生涯には在家化導と云ふ事になれば、必ず御受戒より外はない、然らば其の受戒と云ふものは如何なる者かと云ふに、即ち衆生受佛戒即入諸佛位位同大覺已眞諸佛子也と佛祖が證明した、所て、諸佛の位に入ると云ふも、何か向に位と云ふ者が有て這入るのではない此戒を受くる當躰が直様諸佛の位に入るのである、即ち前に云ふ所の初住の菩薩に成る位ではない、直様諸佛の位、大覺と云ふ妙覺果滿の佛と少しも變らぬ所の身となるのである、只此戒を受けさへすればよいので、ソ、コを衆生佛戒を受けば諸佛の位に入ると云ふ、コ、では持つ持たぬと云ふ議論はない、只受けさへすればよいのである、夫故曹洞宗に於ては此受戒を以て在家化導の標準としなければならぬと云ふ動すべからざる根據は、ソ、コにある、全く傳戒相承の外にはない、が然し此傳戒相承の義に付ては室内相承の儀軌の外に何ぞ今日の愚夫愚婦にまで及ぼして分り易い所の祖師の御示しの纏た者があるかと云ふに、ド、ウも見當らない、正法眼藏の中を横に豎に種々と拜覽して探しても單純に分り易いものはない、皆悉く高尚すぎた御説のみである、室中に傳はつて居る所の傳戒の儀軌は單純であつて、誠に結構ではあるが、然し此儀軌は中々六ヶ敷いのである、外に何か在家化導の標準として在家の老若男女誰が見ても



分ると云ふ、即ち此儀軌を平易に和解して了解の出来る様な者があるかと云ふに、それも無い、前に於て當時の兩禪師が御相談をなされた、今其歴史を云へば色々込入たことも有て、長くなるから殊更に申ませんが、兎に角、畔上瀧谷の兩禪師が御協議の上、高祖大師の御言葉を集めて修證儀と云ふ簡短なものを編輯なされたのですが、是は別に新に出来たものではない、只新たに出来たと云ふのは言葉の綴り合せだけであつて、Fノ様な者にも分る様にと云ふ考えて、それも今の新たな言葉を以て新たな人の云たものでは自ら愚夫愚婦の信念の立場が鈍くなると云ふ恐れもある故、即ち正法眼藏の中から陶抜きいて綴り合せたものが、所謂修證義である、て、要する所修證義と云ふ者は、新たに出来たものではないと云ふ事であるが、それなれば、イッ頃からあるかと云に迦葉から阿難、阿難から商那和脩と傳へて嫡々相承し來つた者である、今夫れを確實な證據を取ると室中の儀軌である、が如何にも此儀軌は高尚に過ぎ簡短に過ぎる故、止むを得ず高祖の金言を集めて一編とした者が、即ち修證義の成立である、それで前の御話を約めて云ふと諸君は元より高祖の御遺弟の事であるゆゑ、私が申す迄もない御承知であらうが、曹洞宗宗門の相承と云ふものには嗣法相承と傳戒相承の二様に成て居て嗣法相承は出家に限り在家に及ばぬ、縦へ維摩や龐居士の如き立派な偉い人でも嗣法相承は出来ない、況んや今日の愚夫愚婦に於てをやせず、然らば在家はFノかと云ふに單に傳戒相承するのである、其傳戒相承は出家在家に通ずると云ふ、所謂五十一代嫡々相承して來たに依て之を高祖大師が在家の即ち波多野義重や北條時頼を濟度する所の標準とせられた事は推して知るべきである、高祖は既に在家化

導は傳戒儀軌に依るとすれば、此曹洞宗に於ては在家化導の標準は此傳戒相承の儀軌に依るより外はない、偕てそれを高祖の言葉を集めて一編の冊子とし、Fノ様な在家の人たちでも、讀めば其義を了解せらるゝだけに、兩禪師が御編輯に成たのが修證義であると云ふことだけの話をしたのである、偕て然らば修證義と云ふ者は五段に分れて居るが、何故に五段に分れたかと云ふ事に付て見ますと、一番最初が總序、それから後は懺悔滅罪受戒入位發願利生行持報恩、此の四段が修證義の本文である、所謂正宗文である、其正宗に入る爲の序分として、通佛法の上から初めに因果の道理を説いてある、をれて此總序と云ふ標目を付けたは如何であらうと云ふ疑はあらふが、それは別の議論として今は措きますが、兎に角、後の四ヶ條を實行せらるゝに付て、其土臺として彼の總序に示さるゝ因果の道理が明らかにならなければならぬ、是は何にも受戒に付て云ふのであると限た者ではない、所謂嗣法相承の坐禪辨道の側から申して、此因果の道理が先きに立つのである、偕此因果の道理に入るには無常を觀ずると事が第一で是又受戒の爲めにはかり拘はつた事でなく、出家辨道の爲めにも大切である、即ち學道用心集の中にも無常を觀する心即是發菩提心なりとある、是が正しく規模である、即ち高祖の御示の通り此無常を觀じ因果の道理を明らかにし、其道理が得心が出来れば此善因善果惡因惡果の道理は、欺く事も味ます事も出来ぬ事になる、F成て來れば我々は互に善果を得る事が出来る、けれども世の中の有様を見ると今日では兎ても善果を得られそうな者は恐らくはない、今日我々が受け難き人身を受け來ると云ふ事は既に是宿善の果報であるけれども、今申す如く

其善果を滅茶々々にして、今日は惡果の業因を作るものが多い、して見れば將來は甚だ危い事有て、多くは惡道に落る者のみで有ると假定してもよいのである、實に悟りと云ふ事は大切では有るが、世の中の大方の有様は皆迷の方のみで多くは地獄の候補者有つて、堂々たる天下の人物でも多くは迷の候補者である、況んや極淺間敷い考への淺い愚夫愚婦に至ては皆悉く地獄の候補者である、是等の人は因果の道理も分らず無我夢中の者である、大躰世の中は迷ふと悟るとの二つで、ツマリ換言せば離苦得樂の外はないが多くは樂でない、苦の境界に居る者か通常である、それを苦を苦とも思はないと云ふ者は余程のベラ棒で苦を苦と感じない者は、それは病氣に罹て青ざめて糸の如く瘠せ衰へ、ゲ、ホン、ノ、とセキが出てたしかに肺病有つても是は痰のセイでなど、云て何もかまぬと同じ事である、ソ、ナ、苦を苦と知らぬ程馬鹿な者はない、是等の衆生を思へば誠に憐れな者であるが、偕て是等に向て因果の道理を知らしめ離苦得樂の道を得させるには、ドーシたらよからふぞ、それには即ち佛祖の大慈悲を以て救ひ下さる所の廣大の慈悲を聞いた所の懺悔滅罪受戒入位と云て、只佛戒を受くる當躰が、即ち佛の位に入て苦を離るゝ道がある、南無阿彌陀佛と申せとも云はず座禪辨道も入らぬ、只一任せに此戒を受くるので、佛祖正傳の戒法を能く持つや否やと云ふに就ても考ふるにも及ばぬ、只よく持つと教授師が教ゆる通りに受くるので、其當躰が直樣位大覺に同うし已ると云ふ道がある、それで戒法を受くる當處に於ては、モ、少しも議論もなく理屈もなく慎んで其戒を受けたいと云ふ觀念が起れば、其加行即ち準備として懺悔と云ふ事が起てくる、即ち受戒が目的である、修證義の全編は此外に

何にもない、懺悔は即受戒をさせる爲めの前方便である、それで今例せば、穢ない猫の梳とか犬の梳とか云ふ様な者がある、穢には不潔の者で何とも仕方がない、然るに今それに御馳走を盛らふと云ふ時には其梳に付て居る穢ない者を洗ひ落せば清淨になるから、復次結構な品物を盛る事が出来るので、其盛る所の器には變りはない、唯其器に浸みこんで居る者を落すだけの事である、今も其如く結構なる佛祖正傳と云ふ品物を盛る爲めには、其前に煩惱妄想と云ふ罪垢穢れを落すと云ふ即ち懺悔の法に依て洗ひ落すので其上に受戒に依て結構な佛祖正傳の菩薩大戒を盛るのである、偕其食べる方法は、ドーすればよいかと云ふと、即ち發願利生行持報恩と云ふことが、我々の身心の上に作用が起て来るだけである、即ち修證義の全編は結局すると受戒と云ふ二字より外はない、此受戒は何の爲めにするかと云ふと、入位が目的である、眞宗に於ては念佛本願の謂はれを聞き分けるのが入位で、即ち入正定聚住不退轉だけの話である、又天台では一生に初住に入ると云ふのが所謂入位である、其他宗旨に依ては念佛坐禪觀法と種々の儀式があるが、今曹洞宗に於ては受戒一法に於て入るゆへ其受戒をするに付て懺悔を先にするので、我々が全く塵垢の中に居て迷て居ると云ふ事を合點させる爲めには、即ち總序の因果の道理に依て得心させてゆく、ソ、成てくると我々御互の身心は穢ない者であると云ふ事が分る、分て來た時に洗ひ落す方法が即ち懺悔で、懺悔すれば清淨なるものに成て來る、ソ、成て來る後の作用は、ドーかと云ふと發願利生行持報恩と現はれて來るのである、是が修證義と云ふもの、大躰の姿である、之を常に得心がゆかないと云ふと此修證義の取り扱に於て其大躰を誤り、説教するに

付ても修證義と云ふ者の精神に透達しない者になる随分此修證義に依て説教をする者の話を聞いて見ると丸て説教にならぬ者が多い、因果の話をしてゆけば因果ばかり受戒の話をするれば受戒ばかりで、サツバリ連絡が付かぬ、是は修證義が分つて居らぬからです、そこで御出家の諸君に相談して置きたい事は人に話をする爲に修證義を研究する者が多くてならぬ、僧侶自身か實際に此修證義に依て、得心を得ようとか安心を得ようとか、思うて研究する人は滅多にない様です、今迄に私の所へ聞きにくる者があるが、多くは只ソコのは、ド、云ふ風に云たら、宜いのである、自分が高座へ上りて在家の男女に得心させる様に云ふ事が出来るであらうと云ふ様な事を聞く輩が多い、丸で落語家の稽古でもする様に、心得て居る者が多い、夫故諸君もド、か此惡弊に落入らぬ様に願ひます、それでなくとも自ら眞實の得心が出来たならば、不知々々自由に話をする事が出来るわけです、

夫れで修證義の成立は前に申す通り大體が五段に分れ其第一段は總序であるが是れは曹洞宗に限らず事ではない、又修證義に限らずものではない、凡て佛教通途の談である、ソコ、第二段は懺悔滅罪を勸むるので我々御互が無始劫來限りなき罪過を犯して居るが其罪過を奇麗に懺悔するのであるソコ、第三段に受戒入位即ち是れで凡ての罪過を悔い改むると同時に是より後は必ず佛祖正傳の戒法に隨て行くので之を極俗に言へば今までは悪かつたと云ふと懺悔滅罪の上で得心が出来た後はよりは、モッ決して悪いとはせまいと云ふ誠實の心が出るが第三番の受戒入位である是より後は悪いとをしないと云ふと持戒の式に掛けて佛戒を受くるので

ある是が即ち佛の戒法であるから之を受けられた限りは我々の心掛を以て佛の仕事が出来ねばならぬと故第四段發願利生と云ふて一切衆生を皆悉く濟度し様と云ふ願心が出る其願に續いて惣てすると爲すと皆悉く行持報恩となつて行かなければならぬと云ふと第五段である是が修證義全篇の組立てである此大本に立戻て考えて見ると佛教と云ふものは大層六ヶしい様に聞ゆる即ち華嚴阿含方等般若涅槃等の教經を拜見して見たり尙各宗の祖師方の排立せらるゝ有様及其議論の裂しい様子は六ヶしい様子であるが之を取り摘んで一口に云へば凡夫が佛になる丈で凡夫が佛になると云ふのは一昧、ド、云ふことであるが之は諸君が素より御遠弟のとである故御承知であらふが如何にも佛教を一口に申すとは六ヶしい夫れであるから氣を付けて研究して貰いたい、夫で六ヶしいと云ふのも外のとではない凡夫の衆生が佛になる丈であるが其凡夫が佛になると云ふとは、ド、すればよいか之は己を棄て、宇宙と一致するのである其己を棄て宇宙と一致すると云ふとは、ド、云ふとかと云ふに即天地萬物凡ての物は箇々差別して居ても同じ姿のものはない即ち山は高く水は流れ柳は緑に花は紅皆別々の姿で長短方圓大小深淺皆悉く差別の姿である此差別の姿は彼れ其物、の自性に於ては長いものは長いまゝで其位を全うし少さい者は少さいまゝで其位を全うするのである然るに、コ、テ、ラの心が其に執着して兎角忘れられぬとになると凡てのものが錯雜して参ります全躰我々が世の中に處して居る所の此躰は變遷無常で定まるとは無い、唯變遷無常で定まるとが無いのみならず己れの心と云ふものは朝な夕な憎い可愛いと云ふ八萬四千の煩惱の爲めに何れか一昧よいのであるか己れの心であつて己れの心が定まることが

出来ない此情の可愛いと云ふ様な心は誰も云ふとで分り切つた話であるが今直ちに變るとになる今までの可愛いと直ぐに憎くになると云ふ様に少しも定まつたものではない己れの心は凡て一定して居らない、此無常の身此無常の心を以て天地萬物差別の境界に對して其間に於て一つも常住と認むるものがない是れは全く差別に執着するからである其差別の執着を離れて平等一體の眞理に一致すると云ふ場合がなければならぬ我々御互の身は限もなき宇宙の間即ち無限の空間の間に自分の身は五尺しかない、又時間の上よりも宇宙無限の此時間の中に己の壽命は五十年しかない、即ち無量光無量壽無限の時間無限の空間の間に五尺の身五十年の命を以て我れと定めて行くとなれば我々御互人間と云ふものは誠に價値のないものになる故東坡居士が「眇たる蒼海の一粟此の生の須臾なるを悲しむ」と云はれたが實に我々は茫々たる大海に一粒の粟が流れて居るやうなものである夫れで、**ド、**丈の時間を保つかと云へば此の生の須臾なるを悲しむで僅か五十年丈である夫れでは人間が萬物の靈長と言はるゝ價値は少しもないとなる然らば、**ド、**すればよいかと云ふに畢竟己れと云ふものゝ執着妄想を離れ宇宙間の對待を絶し己れを棄て眞理と一體になる即差別を離れて平等になるやうにせんければならぬ其差別を離れて平等になつた姿は、**ド、**云ふものと云ふに凡夫が佛になると云ふまでのと故凡夫が佛になると云ふのは差別を離れて平等に結歸するのである其平等の躰を名けて佛と云ふ其佛は又**ド、**ナ物であるかと云ふと宇宙の本躰を名けたるものであるが其本躰は、**ド、**云ふ様に其働きをなすか手近い所で各宗各派互に比較して見ると能く分るが今は左様云ふ細かい話は出来ない大躰に就て在家の布教に

最も長じて居る一番單純な教は眞宗である今此眞宗と云ふものは修證義を標準として居る曹洞宗に掛合せて見ると、**ド、**なるかと云ふに眞宗は佛願と云ふと云ふ此願に就ては種々あるが今佛の願と云ふものは何かと云ふと一切衆生皆悉く己れと變らぬ様な悟を得させたいと云ふのが阿彌陀如來の本願である此本願に就ても淨土門で講釋すると大層六ヶしく云ふて居るが又眞言宗では本誓と云ひます誓とは誓願とも熟字して、**ツ、**マリ本願も本誓も同じとて是非斯うしたいと云ふ目的とする所がある丈のとである之を眞言密教には色々と説いてあつて兩界の曼陀羅三十七尊など、種々様々あるが天地萬物皆悉く本誓のないものはない事々皆悉く互いに約束のあるもので水と云ふものは必ず無限の空間を通じ無限の時間を徹して何所へ行つても物を濡ぼすと云ふのが水の本誓である火は何所へ行つても物を焼くと云ふのが火の本願である是非、**サ、**したいと云ふ譯ではない自然の道理で花は必ず紅に咲くのが花の本誓柳は必ず緑になるのが柳の本願である此本願本誓は少しも背いた所はない少しも誤つた所はない天地萬物皆悉く本願本誓に依ると云ふてもよい柱は必ず堅に梁は必ず横になつて居る之が即柱の本願梁の本誓である天地萬物皆悉く本願本誓である故此天地萬物を統一する佛の本願本誓は、**ド、**云ふものと云ふに皆悉く己と同様の平等一味の悟りに結歸せしめるのである、此佛の本願に就ても千差萬別で彌陀は四十八願と云ひ藥師は十二願と云ふ、色々名はあるけれども、**ツ、**マリ其本願本誓に至る所の前提方便である小供、**ダ、**カシである、其本誓本願は一切衆生悉く己はないと云ふとを悟れば直ぐに其本願本誓で佛に限つたとはない、即ち前に云ふ如く水の本誓本願は天地萬物己と同じ様にすると云ふのが

本誓である、水は己の力の及ぶ限り滯はすと云ふが是れが水にある所の力である、是が即水の本誓である、凡ての者を遂行する有様がある、火も亦己と同じくすると云ふ即何物でも焼ける丈焼かうと云ふのが火の本誓である、況んや天地萬物を統一する佛である故一切衆生地獄餓鬼畜生悉く己と同じ平等一味の悟の境界になさうと云ふのが佛の本願本誓である、其本願と云ふものは其は淨土門の言葉になるが曹洞宗では暫く之を佛戒と云ふのである即ち淨土門では佛願とも云ふ此佛願と云ふ所はサ、行はなれればならぬ水は物を滯らすと云ふ時には思ふたを行ふ姿である戒は規則の義である必ずサ、行はなれればならぬ水は物を滯らすと云ふ、サ、あるのが水の本願である、水が物を滯しつゝ行く働きが即ち水の佛戒である、ソ、曹洞宗に於ては佛願を頼むとは云はぬ佛戒を受けて之を心に思ふばかりではない之を實地に行ふて行くのが佛戒である其佛戒は曾て過去の諸佛方が書かれたともなければ説かれたともない、釋迦が敢て拵えた者でもない、唯法爾として爲する所の佛戒である、過去の諸佛も斯の如く今も亦斯の如く未來も亦斯の如く誦する丈である、夫れ故廬舍那佛が戒法を誦すると云ふに就いて梵網經には戒法を誦すると云ふてあるが其は自然に、ソ、具はつた者を誦するので唯自然に具はつたものに就いて記憶を呼び起す丈けのもので即ち讀む丈けのものである而して此誦すると云ふことに就いては大に注意して研究すべき所であると思ふ、之は別に立てた戒ではない即ち廬舍那佛を始め千百億の佛釋迦も誦するものである、其讀む丈けのを我々の上に儀式に掛けて迦葉から阿難、阿難から商那和修と云ふ様に嫡々相承して五十一代承陽大師に至り尙又輾轉して諸君に至るのである

る故之は釋迦が立た戒法ではない、又釋迦がソ、しなければならぬと云ふものでもない、吾々御互が一切衆生皆悉く法性法爾として斯の如くさなければならぬ道理を先徳の教に従ふて我々も斯の如く之を修して行くのである、其を今儀式に依て受けるとなる、此で始めて此戒を受けると付て懺悔と云ふとの有様を能く穿て置かなければならぬ、此懺悔と云ふとに就ては中には少しばかり學問などしたものは馬鹿な理屈を云ふとがある、夫れて其理屈を聞いて大抵の坊さんは吃驚する、扱て、ソ、云ふ理屈を云ふかと云ふに我々人間に無始劫來罪過があると云ふのは餘り人間を輕蔑した言ひ分て耻を我々御互に支へるものである、我々は此世に生れてから三十年五十年世の中の批難を受たともなく何の罪を作つたともない、然るを我々を指して徒らものである惡るものである罪の深い者であると云ふのは淺ましいとて實に思ひも寄らぬ怪しからぬ話である扱て、ソ、云はるとになると懺悔と云ふとは土臺が立たないとなる、其は人間と云ふものは五尺の體五十年の命をア、テにして云ふから、ソ、である、今受くる所の戒法は何かと云ふと無限の空間無限の時間を通貫して所謂宇宙一枚の心、宇宙一枚の働を自然の上に持つのが受戒入位の仕事である、換言せば己を棄て、宇宙に一致するのである、差別を棄て、平等に結飯するのである、此平等と云ふ宇宙と云ふとを目的として行くとなれば、ソ、言ひ分はないのである、我々御互は五尺の體五十年の命をア、テにして惡ひとはしたとがなただの罪過がある筈はないのだと云ふ考を持って押通さうとするから宇宙の眞理平等に背くのである、特に學者とか何とか云はるゝ者程我執と云ふものは強いです、即ち己が〜と云ふとが強くなつて居るので其己を

見る心が直様宇宙平等の眞理に背くことになる、其心を打棄てし進んで行くとは出来ない、夫であるから懺悔の道理も分らないのである、此懺悔と云ふとは高尚に論ずれば誠に深い意味合のあるとで譯の分らぬ者即ち恐夫愚婦に向ては何と云ふても仕方がない、止を得ず其根機丈に方便上説明するのである、其實を云へば懺悔と云ふものは我々御互が種々なるもの、上に就いて無始劫來迷ひ來た有様を云ふので、之を除くと云ふに我と云ふものを見るのが既に罪過である、我と云ふのは天地萬物皆、ペラ、ペラ、になつて居る差別を云ふので今懺悔すると云ふとは其執着を離れて無我に悟り入るのである、之が懺悔の極點である、能く得心が行き我見を離れ執着の解脱が出来た時には此五尺の體のまゝが直ぐに無限の空間と一致し此五十年の壽の儘が直ぐに無限の時間と一致する、其が即ち戒體發得と云ふので三世諸佛同等の佛戒を受けた時である、淨土門の佛願と云ふは得心が出来たと云ふので、佛願と云ふものは一切衆生を濟度するより外ない、即ち佛戒の一切衆生を濟度するより外ないのです、其戒法は梵網經の言葉で常住佛性と云ひ其を分つと慈悲心孝順心と云ふのである、今受けた戒は何かと云ふと常住佛性である、差別のあるものは無常であるけれども今受けた戒は常住である、其常住なものは即ち佛性である、其常住佛性の性質ある戒法は如何なるものかと云ふと慈悲心孝順心で我々の五尺の體の姿の儘が直ぐに其れてある、己より下に向つた時は慈悲心と現はれ己より上に向つた時は孝順心と現はれて来る、即ち我々御互は一切衆生を、下、かして救ふて遣りたいと云ふ慈悲心其が直ぐに常住佛性の働きの即我々人間界の心の働きの上に現はれたものである、然らば其慈悲心と云ふものは如何に行

はれるかと云ふに利生の發願と云ふより外はない、即ち受けた所の戒法は慈悲心孝順心である故其が直に利生の發願となりて、一切衆生を利益し様と云ふ判断が起て行くのが修證義第四段に云ふ所の發願利生である、其發願利生と云ふものは色々講釋すれば限りもないが、ツマ、リ衆生を利益するのが慈悲心である、夫て孝順心は、下、現はるゝかと云ふと孝は親に對すると即ち父母師僧に對する言葉である、順は凡ての仰せに順ふ即ち長者に對する言葉である、是れは忠順と續いて教育勅語の御精神に合せて申すと「克く忠に克く孝に」と云ふことである、其克く忠に克く孝にと云ふのが孝順心の順の意である、是れは今更私が申すまでもない、即ち孝順心と云ふは我々の働きの上で行く時は報恩の行持と現はれて行くので、忠と云ひ孝と云ひ順と云ふ唯御恩報謝より外はない、ソ、コ、テ箇條を立つると四恩と云ふとが起て来るが約まる所御恩報謝丈である、即第五段の行持報恩のとして其報恩の行持は即ち修證義の中に「其報謝は餘外の法は中るべからず唯當に日々の行持其報謝の正道なるべし所謂の道理は日々の生命を等閑にせず私に費さしらんと行持するなり」と云ふ御言葉があるが其日々の行持は、下、かと云ふに、此一日の生命を欺かぬと云ふので、此人間が生き延びて行く時間を私に費やさず等閑に使はないと云ふ其私に費やさぬと云ふとは己と己の五尺の身五十年の命の間二十四時間を無駄に使はんで人間の爲めに動いて御恩報謝衆生濟度の爲めになるより外はない、即ち慈悲心孝順心が直ぐに行持報恩と云ふ様に現はれて来る、其は何より来るかと云ふと常住佛性の慈悲心孝順心と云ふ活きた戒である故是非共發願利生行持報恩と現はれて來なければならぬ、其戒法は自然法爾と誰が説いたと云ふとは

ない、三世諸佛同道に斯の如く行はなければならぬ戒法である故之を佛戒と云ふ其を我々が受けた時は菩薩戒と云ふ名を付けるので其は、コツ、テラから云ふのである、戒の躰より云へば佛戒、受けた人より云へば菩薩戒何も蚊も之に籠る所の名から云ふと單に大戒と云ふ、是れは禪宗の方で嫡々相承して來た故之を又禪戒と云ひます、名は禪戒菩薩戒佛戒大戒とあるけれども其品物は一つである、其一つの品物は何であるかと云ふに宇宙平等の眞理が一切萬物の上に働いて行くときの姿を名けて菩薩戒禪戒佛戒大戒と云ふのである、之を以て曹洞宗の化導の標準と定められたと云ふとは昨日も申す通りで曹洞宗に於て今始めて定めたと云ふのではない、五十一代嫡々相續したのは此の戒法と嗣法の外はない、尤も嗣法相續と云ふことは出家に限つたもので在家に及ばぬと云ふとは昨日申した通りで今は別に申す必要もないと思ひます、只今は在家出家に通ずる所のもの特に在家の化導の標準となされたものは此の佛戒より外にないのですから、今日と雖も今日以後と雖も此戒に依りて一切衆生を濟度するが承陽大師の子孫たると思ひます、之を世間の理屈の上に合せても一段と研究して見ますと面白いと思ふが段々話しが長くなるから別段御話し申すとも出來ないが要する所世間の人達は今日宗教に對して何を望んで居るか云ふと即ち念佛を申すと云ふとも感服しない、又御題目を稱へると云ふとも感服しない、多く「ド」云ふものを求めて居るか云ふに高尚なる所の理想を我々の上に朝な夕なに實行する方はないかと云ふとが目的になつて居る、即ち合理的々々々と云ふとは極手近かな所から云ふて居るが宇宙の眞理を直襟呑込んで直ちに其を行はふと云ふとは出來ない、扱て其宇宙の眞理は如何なるものかと云ふに是れは形に現はれて居る所の佛戒を云ふまでのことである佛と云ふと別なものに聞ゆるが外ではないツ、マ、宇宙の規則である、宇宙の規則とは何か、取も直さず火は熱く水は濡ひ花は紅柳は緑これが即規則である、して見たならば我々御互が、火や水が本性を守ると同じく之を人間に代へて見たならば親は親らしく子は子らしく妻は妻らしく夫は夫らしく水も火も其物々の性質に従つて間違ひなく行くと云ふのが宇宙の眞理である、其を行ふ方法として始めには懺悔滅罪受戒入位發願利生行持報恩と云ふ箇條を立て、行ふて行つたならば知らずく帝の則に従ふと云ふ如く其設けたる所の箇條の方便に従つて學ぶと云ふとが大切である即ち之は第二第三と段々方便としては箇條分けをして行かなければならぬ、凡て箇條と云ひ儀式と云ふものは成丈深切に成丈平易に教へて行かなければならぬ之が特に承陽大師の教である、何事も理屈に走ては行けない、實地に行ふとは高祖の御流義である故同じ懺悔と云ふても理屈を云へば事の懺悔、理の懺悔など色々申すとはあるが承陽大師の御見識の上から云へば、理の懺悔と云ふ道理の懺悔の上には能く分つて居ても必ず事相の懺悔儀式の上に掛けなければ許さぬのである、唯夫れ丈は早くから守つて居ると云ふ理屈ばかりで承知されない、必ず受ける授けると云ふ儀式に依らなければ御許しなされないものである、之が承陽大師の御流義で法規法式を尊ぶのが其れである、扱て御話し申せば限りもないが今日は、マ、閉會式で諸君の尻も落付かない様な譯で中には歸縣する爲めに御忙はしいと云ふ人もあるであらう早く六ヶしい窮屈の話より何か愉快なお話しを聞きたいと云ふものもあるでせう、そんな工合ひで私も餘り充分に話しが出来ません、

色々御迷惑ですから遺憾ながら、中途であるが實は各宗の法義に合せて見て夫れで修證義と云ふものは如何なるものであるかを御話して見たいと云ふ考へであつたが、色々障礙の爲めに果すことが出来ないのは遺憾です夫れで尙参りますれば今日諸君へ會長より渡された證書の上にも私が修證義を講じた趣になつて居るさうですが講ずるまでには行かなかつたとしても唯其れは全くの詐りではないと云ふ證明丈で、修證義の大意に付ても僅か二日間の御話しを申上げて、ホの九牛の一毛丈の御話を致した譯であります、先づ今日はコレで

## 修證義大意終

## 宏智禪師頌古提唱

### 目次

第一則	世尊陞座	二
第二則	達磨廓然	八
第三則	東印請祖	一七
第四則	世尊指地	二七
第五則	青原米價	三五
第六則	馬祖白黑	四二
第七則	藥山陞座	四九



# 宏智禪師頌古

大内青巒居士提唱

虎溪生筆記

宏智禪師と云ふは宋の紹興ころの碩徳で彼の碧巖集を著した圓悟禪師の弟子の大慧と云ふ人と同時に兩雄對陣し盛んに洞上綿密の宗風を擧揚せられた人であり、名は正覺と申して俗姓は李氏、法を丹霞子淳師に嗣いで天童山に住職せられた、明の末に我國へ來りて、水戸の義公の皈依を受けた東阜心越禪師は實に宏智の法孫であると申すことじや、宏智と云ふは没後に宋の天子から贈られた諡號であるが、其頃の音の禪とで今にワンシと讀ませて居る、さて其宏智が彼の雪竇の頌古に漏れた公案一百則を集めて、一々頌古の此を附けられた、其れを同く宋の末から元の初まで生きて居られた、萬松行秀和尚と云ふ人が彼の圓悟の碧巖集に倣ふて、示衆と着語と評唱とを加へ從容録と名けられた、臨濟宗では餘り用ゐんけれども曹洞宗の方偈では碧巖と同様に之を參究する、彼の碧巖集が春蘭ならば此の從容録は秋菊じや、謂ゆる蘭菊の〳〵巖其美を擅まゝにするので、花を愛する者の眼には孰れも皆賞玩すべきものである、然し萬松の評唱は頗ぶる長文で且つ議論に涉る點もあるから今は、示衆と本則と頌と着語だけを相談するとしませう、尤とも凡そ公案と云ふものは碧巖集にせよ從容録にせよ無門關にせよ其他いつれのものにもせよ皆坐禪辨道の蒲

團の上に於て着實に觀念參究すべきもので有て、之を口舌に載せ筆端に走らしかして講釋などを爲すべき  
のては無い、爲すべきもので無いことを今は強て爲すのであるから、トウセ本統の仕事では無い、謂ゆる  
拖泥帶水ぢや、いやはや見にくいとも聞かぬしいとも言ひやうの無い次第では有るけれども、兒を惑んで醜  
を忘るゝも亦た萬々已むを得ざる仕合、マ、よ笑ふものは笑へ罵しるものは罵しれ、それも亦た一段の  
風流で有らうよ、

第一則 世尊陞座

示衆云。閉門打睡。接上々機。顧鑿頻申。曲爲中下。那堪曲祿木上弄鬼眼睛。有箇  
傍不肯底。出來也怪伊不得

示衆と云ふは萬松老人を其門下の衆僧に示されたのじや、何を示されたぞ、世尊陞座の公案と其れを宏智  
が頌きた偈とを示さうとて、先づ其小序を述べたのじや、初めの四句は佛祖の一切衆生を化導せらるゝ様子  
を二段に分けて示された、上々の機を接得するには門を閉ぢて打睡する、門を閉ぢると云ふは宇宙の眞理  
は元來出入往復すべきもので無い故じや、出入往復すべきもので無いから、門を閉ぢる、門を閉ぢるは千  
門萬戸一時に開くのじや、打睡と云ふは臑を曲げて之を枕とす樂み亦た其中に在りと云ふほどの事は、儒者  
でさへ言ふでは無いか、盡天盡地の間に於て元來貧富貴賤迷悟苦樂等の有るべきものでは無い、生死もなけ

れば寤寐もない、佛もなければ衆生もない、何を苦しんで起きて働らくぞ、睡れ睡れ、無始劫來未來永劫睡  
ッて睡りぬく、睡りぬけたら其れが大醒覺じや、覺の睡のと云ふも實は遲了八刻よ、凡夫の情量に任せて  
カウ云ふて聞せた迄のもの、眞に睡りぬいて居るものが斯んなことを云ふに及ぶかよ、とは云ふものの中  
以下の衆生を化導するには顧鑿頻申もせぬば成らぬ、顧鑿の二字は雲門の故事であるなどと云ふ人もある  
が、雲門が云ふても云はんでも顧はカヘリ、ミル鑿はカンガミル、カンガミルと云ふは其人の機根を考へて  
見ることよ、佛には鑿機三昧と云ふて、人機を鑿みる三昧があると云ふことじや、カヘリ、ミルと云ふは自分  
獨りで向ふへばかり往かすに、後から踵て來る若い者を振り回して見てやること、頻申の二字は頻はシキリ  
ニと訓ませて、事の急迫して來ること、申は伸の字と同義で、ヒルと云ふ意味、ソユで頻申の二字が緩急と  
云ふことになる、中下の人を濟度するには必らず此の方便が無ければ成らぬ、前の閉門打睡は大智慧門、  
この顧鑿頻申は大慈悲門、慈悲と智慧とか備はッて始めて佛じや、門を閉ぢて打睡もせぬば成らず目を覺  
まして顧鑿頻申もせぬば成らぬ、中々佛に成ても忙がしいぞ、ソユで那ぞ曲祿木上に鬼眼睛を弄するに堪  
ふんやとある、曲祿木と云ふは椅子のことであるが、椅子も椅子、謂ゆる安樂椅子のこと、思ふたら好か  
らう、鬼眼睛と云ふは鬼は亡者のことであるから活氣の無い死人が、目玉をバチクリして居ると云ふやうな  
ことじや、安樂椅子に寄り掛りて、エラソウな面をして活氣も無い眼の玉ばかりバチクリさせて居るわけに  
は往かんじや無いかと云ふたのじや、箇の傍に背がはさる底ありて出で來るも也た伊を怪しむことを得ず

とある、若し其様なことて有たならば、傍はらに其れを肯がはない人が有て何と云はれても仕方が無いではないかと云ふ意味じゃ、何故に斯んなことを云ふかと云ふことは、本則を見れば成るほどと思ひあたるで有らう、ソユで本則は

舉。世尊一日陞座。今日不文殊白槌云。諦觀法王法。法王法如是。知他是世尊便下座。別日再

舉の字は舉示または舉揚などと續く字で、今この公案をヒキアケて見せるぞと云ふ意味であるが、古來の讀くせでユスと讀ませてある、世尊と云ふは釋迦如來のこと、釋迦に十號と云ふことがある、世尊と云ふは其中の一つで、世の中に尤も尊崇せらるゝと云ふ敬稱じゃ、陞座と云ふはシツツと云ふ讀くせて又は上堂とも據座とも云て、説法するため壇上へ登ること、釋迦如來が或日説法なさうと思し召して例の高座へも登りなされたと云ふまでのことよ、それを妙に詮議だてして一日と云ふは二三に涉らぬの意、また古今を絶したるの一日などと、經論師が如是我聞の如の字に十如是を掛けて講釋するやうな見やうをする人もあるさうじゃが、ソんなに六かしく云ふにも及ぶまい、其下に割註のやうに書てあるのが萬松の着語じゃ、今日便を着けずとある、便と云ふは俗に都合と云ふほどのことて、便を着けずと云へば今日は都合が悪いぞと云ふことじゃ、後の別日に再び商量せんと云ふた着語と照應する、果して世尊が陞座せられて未だ一言のも説法も無い間に、傍はらから文殊菩薩がノコ〜と出掛けて、諦觀法王法法王法如是、文殊師利菩薩と云ふは文殊師利を妙吉祥と漢譯する、菩薩は例の如く具さには菩提薩埵、漢譯して覺有情と云ふ、上み覺を

求め下も有情すなはち生きとし生ける者を救ふと云ふ意味、然し文殊と云ふ菩薩か實際の人間で佛弟子中に有たやうには思はれない、全たく釋迦老人の大智慧を表し示して、其銳と云ふことは利劍の如く其諸魔を降伏する勢ひは獅子の百獸に王たるが如くであると云ふ所から、獅子に騎り劍を持って居る姿を畫き出したものに違ひないやうだ、兎に角文殊が白槌して言はれたとある、白槌と云ふは凡そ佛の在世に上座の人が一般の衆僧に言ひ渡すことでも有るときには必らず槌と云ふものを打ち鳴らして一同に注意を與へ、ソレから何なりとも言ひ聞かせる、槌と云ふものは木を八角に削つたもので、下に其大きいのを置き別に小さいのを持って上からカチリと打ち鳴らすもので、今も禪宗などでは日々の食事の時だの、上堂や布薩などの時には用ゐて居ります、上の白の字は、物申すと云ふ字だから物申すために、槌を擧つと云ふ意味で、白槌と云ふのじゃ、サテ文殊が白槌して何と云ふた、諦らかに法王の法を觀るに法王の法は是の如しと云ふた、法王と云ふは佛のことて有るから法王法と云ふもの佛法と云ふもの同じことじゃ、佛法と云ふて外には無いぞ之を諦觀して見れば只是の如くじゃ、是の如しと云ふは、コノト、ホリと云ふまでのことよ、山は是の如く高く水は是の如く長し、花は、コノト、ホリに開き月は、コノト、ホリに照る、此間に僞妄は無いぞ、吾々人間も父は是の如くに慈にして子は是の如くに孝、君は、コノト、ホリに仁に臣は、コノト、ホリに忠と言ひ得て疑ひなくんば、天下泰平家内安全じゃ、何の釋迦や彌勒のも世話になることが有らうぞ、釋尊未だ一言を吐かざるに當りて文殊早く此證明を爲す面白立合ぢや、萬松の着語に他は是れ何の心行ぞと有る、文殊が、

ッ云ふ料間で、コシなことを言ふたか諸人よく氣を附けて参究せよと門下に注意した着語と見える、世尊便ち下座、モ、何も言ふことは無い元來何も言ふことのあるべき筈が無いので有るから直に高座を下られた、是れが眞實の法説法よ、ドゥじや是れが門を閉ぢての打睡か、又は願鑿顯申か、抑も亦た曲縁木上の鬼眼晴か、萬松は別日に再び商量せんと着語した、今日は都合が悪いから又他日御相談に及びまじやうと云ふ、ソレは萬松の見かたよ、諸君は諸君で見ろが好い、サテ又宏智古佛はドゥ見たぞ

頌曰一段眞風見也莫教入眼綿々化母理機梭了義織成古錦含春象大巧無奈東君漏泄若拙

何陰陽無曲獨

頌と云ふは梵語の伽陀を漢譯したので、伽陀を又は偈陀とも書くところから、其れを略して偈とばかり云ふたり又は偈頌と梵漢ならべて云ふたり致します、サテ其の偈頌にも色々ありて經論の中などには、孤起の偈と云ふもあり又九重説の偈と云ふもあり、遂には都べて僧徒の詩を偈と名くるやうにも成て居る、然るに今は頌古と申すので、佛祖の言行の甚た高尚逸美なるものを偈に依りて後學に示したり自から樂しんだりするのが即ち頌古です、雪竇の頌古百則は即ち碧巖集の原本では是れは世人が能く知て居る、其後この百則を宏智が作られた、宏智の詩偈を集めたものは別に斷璧と云ふ本が二冊ある、中々文才にも富みたるもので、雪竇は豪放佚宕のところ多く、宏智は綿密森嚴のところが多い、俱に禪林文學の壯觀と謂はねば成らぬ、サテ第一句に一段の眞風見るや、ドゥじや世尊陞座せられて未だ一言も發せられざる所、先生の風山

高く水長しと云ふたやうな眞實清高なる風彩、諸人よく見えたかな、形に其れと目にこそ見えぬ聲に其れと耳にこそ聞えぬ、恰かも春風のドコとなく吹き居るが如く、綿々として化母機梭を理す、綿々は絲の絶えざる貌、化母は物化の母と云ふことで萬物を生育する根源を稱するの名、機梭は布を織る器械であるから、春風駘蕩の間に萬物發育の作用が片時も息まずに進退消長して居るぞ、斯くて織りあげた所の古錦、これは今さら新たに出來たものではない、無始劫來只是の如きもので有るから古錦じや、サ、其古錦に色々の春の象、百花爛熳の美を含んで居るが、何も其れを物々しく人の鼻先へ附きつけて見せるには及ばぬに依て、陞座したま、一言をも發せぬ、一言發すれば早や第二第三じや、然るに東君の漏泄を奈何ともする無し、東君は春の神と云ふことぢや、春の神が遂に漏泄と機密をモラして紅霞で青天を彩色したり、梅花の暗香で月を黄昏ならしめたり、甚だ狼籍なるが如く、文殊がソ、ソと出掛けて來て法王法如是などと餘計な批評を下して無瑕の玉を疵物にするは困つたものじやと云ふ意味らしい、ソ、ソで萬松が一句ごとに着語して第一句眼に飄入せしむること莫れ特地に出ること遠た難しと云ふた、一段の眞風を見るやと、宏智は言はるゝが、見るやと言へば見ると云ふことに心を取られて眞風が眼の中に飄び入たことならば、中々それを眼中から出すことが難澁で有らうぞと云ふのじや、第二句に參差蹉了して縞を交ゆると云ふてある、參差は齊等ならざるを云ふとあつて今は機梭をテチラコチラと通はす貌、蹉は足の運びの右左くひちがふことであるから、ソ、ソ、ソ參差蹉了の四字で機を織る形容じや、了の字には意味はない、縞の字は十縷を縞と云

ふと申して機糸のこと、其れに經と緯とあるから交ゆると云ふた、佛祖の慈悲智慧ひとかたならぬ御苦勞の様子を云ふたもので、第三句の下に大巧は拙の若しとある、是れは老子やらにある句であるが、今は古錦に春象を含んで表面に現はさぬところ、凡眼にはベツと綺麗に見えぬと思ふて有らうが、其拙ないやうに見える所が、却て大に巧みなる所ぞと云ふたのじや、第四句の下に陰陽は曲げて狗むこと無く節氣は相饒さずとある、春夏秋冬と移り易る陰陽氣節の循環を曲げるわけにも往かず、又餘計なことをするわけにも往かぬ、春は花開き秋は紅葉散る一點も私情を容れぬ、東君の漏泄また何としゃうぞと云ふたのじや、碧巖の着語は多く相表裏し相抑揚して眞理を敲き出す調子が有り、從容録の着語は多く門下の者に注意する指導的の言葉のやうに見える、其れゆゑに碧巖のやうに活潑愉快なところは少ないけれども着實に參究するには又一段の親切なところが有るやうに思はれる。サテ宏智や萬松は此公案を斯んなやうに見られた、諸君は自づから諸君の見らるゝ所が有らう、人々おのづから光明の在るあり、他の鼻孔を借りて氣息を通ずべきでは無い、

第二則 達磨廓然

示衆云。卞和三獻。未免遭刑。夜光投人。鮮不按劍。卒客無卒主。宜假不宜眞。羞珍異費用不着。死猫兒頭拈出看。

これは碧巖集の第一則になつて居る話で、達磨大師が梁の武帝に逢はれた時の問答じや、ソコで萬松老人の垂示は徹頭徹尾風雲際會の難きことを云はれたものと見える、卞和三獻未だ刑に遭ふことを免かれずと云ふは、誰も知て居る通りの故事で、卞和と云ふ人が荆山と云ふ處で、珍らしい玉を拾ふたに依て、楚の靈王に献上いたしたが、其玉が璞玉のまゝで未だ磨かぬので有るから、外から見たところでは石のやうで有る、靈王は玉と偽つて石を獻じた者と思ふたから、大に怒りて卞和を刑刑に處し片足を斬棄てられた、其後に武王のとき復た献上いたしたが、武王も石であると云ふて又片足を斬られた、文王の時には卞和が璞玉を抱いて泣て居たとある、ソコで文王が呼出して問はれた時に、卞和が言ふた詞には足を別られたるを怨むるに非ず、只眞玉を以て凡石と爲し忠臣を以て罪人とせらるゝのが怨めしいと言ふた、文玉はしめて其玉を採納れて玉師に磨かせて見たところが、實に世界第一の明玉で有たと云ふことじやが、今達磨が武帝に逢ふたのも、卞和が靈王や武王に逢ふたやうなものよ、夜光を人に投ず劍を按せざる鮮なしこれも昔し鄒陽とか云ふ人が天子に上げた文の中に言ふてあるとか申すとで「明月の珠、夜光の璧、暗を以て人に道路に投ずれば劍を按じて相舐りみざる無し、何となれば則ち因なくして前に至れば也」とある、文選の三十丸にも史記の鄒陽の傳にも出て居る、いくら結構な寶玉でも暗夜の途中で突然に投げ附けられては驚ろかない者は有るまい、今達磨が武帝に向て幽玄微妙なる向上の宗旨を突然に聞かせられたので有るから、武帝が驚ろいて狼狽したのも無理は無い、武帝と云ふても二千年前の梁の天子のみでは有るまいぞ、人々

お互ひに平生たしかに決定する所が無いと、劍を拵て狼狽することが多からうよ、卒客に卒主なし卒の字はニツカと云ふ字で、遽に思ひ掛けないお客に飛び込まれると、主人の方では其ニツカに應ずる準備がして無いから、お茶一つ満足に吞ませることが出来ぬ、武帝は達磨のやうな卒客を饗應する準備が無かつた、コレも餘處事とばかり見過ぐすわけには往かん、無常の殺鬼と云ふお客が何時突然に来るかも知れん、隣の婆さんのやうすを見ても向ふの爺さんの噂を聞ても、皆卒客にヤツて來たらしい、其準備をして置かねば成るまいぞ、假に宜くして眞に宜しからず、準備の無いものに向ふて本膳の御馳走を需めても無理じゃ、空腹凌ぎのお茶の子點心だけのことよ、珍異の寶を羞むるも用不着、珍異とメツラしい寶物を進上しても用るやうが無からう、然らば何を進上しやうぞ、死猫兒頭、死だ猫の頭はドゥじや、コイツは價直が分るまいぞ、ソレ看ると拵出したのが即ち達磨廓然の公案じゃ、

舉。梁武帝問達磨大師清且起來如何是聖諦第一義且向第磨云廓然無聖聖帝云對帝對朕者

誰誰磨云不識後帝不契方本不遂渡江至少林面壁九年家無

梁の武帝の傳は委しく言ふにも及ぶまい、姓は蕭氏、名は衍と云ふて文武兼備の人で有た、初めには齊の相國で有たが遂に梁公に封せられ、後に天子に成て國號を梁と稱した、在位四十八年享齡八十六と云ふ幸福な人で、子の昭明太子も文武とも有たらしいが遂に臣下の侯景と云ふ者の謀反に敗れて一代きりて有た、この武帝は殊の外佛法歸依で隨分經論の學問にも勝れ、殊に佛法中の肝要な問題で眞俗二諦と云ふことに

付き其頃しきりに研究中で有たらしい、ソコへ天竺から達磨大師が渡つて來られた、達磨大師は南天竺の國王の子で釋迦如來二十七代の法孫般若多羅と云ふ人の弟子になり其法を嗣で二十八代の列祖となられたが、天竺の化導を畢つて支那へ渡られた、其頃支那は南北朝と分れて居て梁の武帝と魏の孝明帝とが天下を分領して居られたが、中にも武帝は佛心天子とも稱された人で古來まれなる佛法信者であるから、達磨大師が先づ斯人を濟度に赴かれた、然るに武帝は佛法の皮相枝葉ばかり執着して居て、まだ佛法の骨髓が分らぬ、譬へて見やうならば病を治すためには薬が必要であるけれども、其薬に執り着て居る間は前の病が無くなりても矢張り一種の病人じゃ、眞實健康の人なら病が無いばかりでは無い、薬と云ふ名を聞くこともいらぬ、迷とか悟とか衆生とか佛とか云ふて居る間は皆多少の病人よ、然るに武帝は病こそ治つたで有らうが、中々薬好きな人で有たと見える、ソコで薬の中の第一等と云ふところで如何なるか是れ聖諦第一義と問ふた、聖諦と云ふは前に申した眞俗二諦とある其眞諦と俗諦とが融鎔して眞俗不二と成た所とで有るなどと薬の機能を説き立てる向もあるが、何か知らんが聖と云ふは佛のこと諦は審實の義と申して道と云ふも同じとよ、ソコで聖諦と云ふ二字が直に佛道と云ふ二字であると見れば早や分りじや、第一義と云ふは此上も無い主義と云ふほどのとて有るから、佛法の中の一番尊とい道理は如何で御座ると問ひ掛けたのじや、然るに達磨は廓然無聖と答へられた、廓然と云ふはホガラカと云ふことで一天晴渡つて片雲も無いやうな姿、無聖と云ふは無佛と云ふも同じとよ、武帝は佛法の第一の主義を聞きいたと云ふが、その佛

とか法かと云ふやうなものは一向御座らぬぞと達磨が答へた、この答へが夜光の珠ぞ死だ猫の頭ぞ、いかにも價直の知れぬ答ではある、然し前に譬へた病と薬との話で考へたなら道理だけは分らねば成らん、武帝は薬の中の一番よく効く薬は何で御座るぞと問ふた、然るに達磨は元來無病健康な人であるから、薬と云ふやうなものは一向所持致さぬぞと答へられたのじや、これが口真似だけでは往かんよ、胃病でゲイ言つたり肺病でゴホン言たりして居ながら、藥などと申すものは一向に存せぬぞなどと云ふたからとて、それは狂氣の沙汰じや、サスガに武帝は病氣で苦しんだ覚えか有るから薬の尊いことをも知て居る、薬の効能が忘れられないから達磨の廓然無藥が未だ分らん、ソコで朕に對する者は誰ぞと附け入つた、お前は佛も法も無いと言はるゝが然らば現に朕と向ひ合て居る其翁男は何であるぞと問ふた、中々に力のある間ではあるけれども、達磨の相手には成れない、達磨は平氣で不識とはねつけた、不識と云ふはシラヌと言ふたのじやが、此一言は涙のこぼれるほど親切な一言じや、武帝は朕だの對する者だのと左右理窟に迷ふて居る、達磨が氣の毒で堪らんから大きな聲をしてシランと言ふた、此不識が分るほどなら先の廓然無聖で悟れねば成らん、とにかく武帝は達磨の相手では無い、ソコを記者が帝契はすと書いてある、契はすと云ふは符節を合せるやうにスツカリと以心傳心することが出来ぬと云ふことじや、達磨大師も失望で有たらう、遂に江を渡りて少林に至り而壁九年とある、江と云ふは揚子江で此江を隔て、江南江北と分れて居る、少林は江北の魏の方で嵩山の麓に太室山と小室山とあるが其少室山の中に少林寺と云ふ寺がある

と云ふことじや、其後達磨大師は死猫兒頭の價直を知た大丈夫の出て来るのを待つも待つ九年が間、しかも面壁ばかりして居られたと云ふことじや、面壁と云ふは壁に向つて坐禪して居ること、其れが直に廓然不識の有様よ、坐禪と云へは悟る稽古をするやうに思ふ人も有らうが、元來迷悟を超脱した面壁ぞ、只達磨の目的は一人でも半個でも佛祖の衣鉢を傳ふるに足る者を得るのみよ、果して神光と云ふ人が雪に立ち臂を斷りて、支那禪宗の第二祖となられ、達磨は程なく物故して唐の代宗の時に圓覺大師と謚號せられたと云ふことじや、

萬松の着悟、武帝問達磨大師の下に清且に起き来て會て市に利あらずとある、清且は早朝のこと、早起をして商賣に出掛けても餘り早過ぎたせいかな頼と買人が無くて贏からぬぞと言ふので、達磨が武帝の處へ賣りに往た様を評したのじや、第一義の下に且らく第二頭に向て問へと着語した、武帝が一義だの二義だのと數量に涉つたことを言ふに依て、ドウじや第一義ばかりで無く第二も第三も問ふて見ぬかと冷かしたやうな口ぶりで、其實は一の二のと言ふべきもので無いぞと云ふことを顯はした短評と見える、廓然無聖の下に劈腹剗心とある、劈腹といふはハラをヒキサクと云ふこと、剗心はムチをエグルと云ふので、心の底を打明けて少しも飾りの無い所ぞと云ふ意味、對朕者誰の下に鼻孔裏に牙を認むとある、牙と云ふものは口の中にこそ有れ、何で鼻の孔の裏に有らうぞ、朕だの、對する者だのと云ふものは、元來有るべき筈のもので無い、其れを武帝が有りど執着して居るから其れを抑へたのよ、不識の下に腦後に腮を見る、これは人相

の上で言ふことそうな、誰やらの語に「腦後に腮を見る與に往來すること勿れ」と云ふがある、腮は、ア、とかオト、ガイとか讀む宗で、腮の骨が突張て腦後すなはち耳の後の方から見えるやうに成て居る人と親しく交際をすると、飛だ災難に逢ふことが有ると云ふことそうな、其俗説を萬松が利用して、達磨と云ふ老爺は危峻な老爺ではある、ア、不識と云ふた意地悪るさ、斯のやうな人には近つかぬが好いぞと云ふた、ア、ン、ハイ初祖大師を讚歎し盡した詞ぞ、帝不契の下に方木は、圓窓に入らず、これは宋玉の語にも圓なる鑿に方なる柄、吾固に其阻礙して入り難きを知るとある、榎木が楊枝には成らぬと云ふほどのことよ、而壁九年の下に家に滯貨無ければ富ます、滯貨と云ふは賣れ残りの品物と云ふこととて大商賣をする家ほど賣り残りの品も多く有るわけ有るから、賣り残りの品が無いと云ふやうなことは貧乏商人よ、達磨大師は造々と天竺から直輸出で支那へ貿易に出掛けて來られたが、價が高くて頓と賣れぬ已むを得ず九年が間お客を待て居られたのじや、是れは萬松老人が此公案を見られた見かたよ、諸君は諸君で自由に見るが好い、

頤曰磨廓然無聖一回飲水來機逕庭面赤不得非犯鼻而揮斤好手中失不回頭而墮甑已往寥々

冷坐少林老不點々全提正令兵機秋清月轉霜輪高着河淡斗垂夜柄誰敢繩々衣鉢付兒孫承授

想從此人天成藥病天行已過

さて又宏智の見やうは頤で分る、此頤は長短十句ある、第一句に本則そのまゝ廓然無聖と提起せられた、萬松が着語して、一回水を飲めは一回着墮すと云ふ、墮は、ム、セルと云ふ字で、水を飲むたびに墮ると評した

のじや、廓然無聖と答へられたは誠に清冽な水のやうなもので有るけれども、飲め得ないで武帝が墮せたぞ、來機逕庭とある機の字に機根の機の字で、法を聞きに來る弟子のことじや、即ち今は武帝のこととて達磨の廓然無聖と之に來り合せた武帝の機根とは逕庭して居る、逕庭と云ふは門外の逕と奥座敷の庭と云ふことで隔たりのあることじや、萬松が面の赤きは語の直なるに如かずと着語した、これは我國の俚諺に聞くは當座の耻、知らぬは一生の耻と云ふのと同じやうな意味と見える、正真に白狀した方が耻をかいて赤面するよりは好いぞと云ふので、武帝が左右理窟に落ちて居るのを抑へたのよ、得は鼻を犯すに非ずして而かも斤を揮ひとある、次の句とは達磨大師が得失の間に自由を得られた有様を形容したので、二句ともて故事がある、然るに二句とも句の作りやうが逆に成て居るから、チ、ヨツと解しにくいに依て、にも之を「得は斤を揮ひて鼻を犯さず、失は甑を墮して頭を回らさず」と見るが好い、斤は斧斤と續いてオ、ノのこと、これは莊子の徐無鬼の篇にある話で、郢と云ふ國の人が鼻の先へ蠅の羽ほど聖土を着けて大工の名人の石と云ふものに之を斧で剛り落して見ると云ふた、石は直に斤を揮つて土を剛り落したが鼻には少しも傷が附かなんだと云ふ話で、是れは剛るものも名人で無ければ成らんが、剛らせるものも真に大丈夫で無ければ成らん、佛祖門中の以心傳心も其通りで、達磨のやうな名人が斤を揮ひて剛らうとしても、自若として剛らせる人が無くては伎倆の施こしやうが無い、さて今この句の上では達磨大師の如き大家傑は、ヒタリと之に出合ふた弟子さへ得れば彼の郢人と匠石とのやうである、さて又これは相手にならんと思へ



は、即ち失の時は瓶を墮して頭を回さぬやうであると言ふたのじや、墮瓶の故事は後漢の孟敏客と云ふ人が或時瓶と云ふ土鍋のやうなものを背負ふて道を歩いたが、誤つて落したからガタンと云て毀れてしまふた、其時孟敏客は後を振り向ても見ずにサツサと往てしまふたのを郭林宗と云ふ人が見て居て、ナゼ後を振向ても見なんだかと問ふたり、毀れてしまふたものを振向て見たらとても致し方が無いと言ふたのである、其れは其れに違ひないけれども、大抵の人なら振向て見る位のことでは無い、ア、惜いと思した、ドウしたら好からうかなどと愚痴をこぼして破片を拾ふて合せて見たりなどする人が多からう、然るに達磨は實に不人情じや、コンな奴は分らんと思ふたが最後、朕でも帝でも猶豫は無い、直は江を渡つて魏へ往て面壁九年じや、茂松が揮斤の句に好手手中好手に誇ると評し、墮瓶の句に已往は咎めすと評した、これは辯ずるまでも無からう、サテ其次は少林へ往てからの景況じや、寥々として少林に冷坐し、黙々とし正令を全提す、寥々の句は讀で字の如く能く分る、萬松が老て、歇心せずと着語した、コ、ロをヤスメルと云ふことで、達磨大師の慈悲心片々老てます、勉強ぞと讃嘆した、正令を全提すと云ふは軍事上の詞で、令は將官の號令、其號令にも正令と奇令とがある、百萬の敵をも物の數とせず、正々堂々と進撃するのが正令じや、しかも全提とある少しも残る所なく力を窮め盡すのよ、達磨は少林に冷坐しつゝ如何なる正令を如何に全提したぞ、黙々として日々夜々面壁すること九年に渉る、其れが即ち正令の全提よ、八萬四千の魔軍のみかは、三世の諸佛も歴代の祖師も皆此軍門に降伏せぬ者は無からう、ソコで萬松が獨り自ら兵機

を説くと評した、黙々が即ち獨説じや、秋清くして月霜輪を轉じ、河淡くして斗夜柄を垂る、この二句は寥々冷坐して正令を全提せらるゝ其氣韻の幽玄高潔なるやうすを形容したので、秋の夜の澄み渡りたる大空に一輪の明月皎々として照す清らかさよ、しかも夜は深々と更けわたりて銀河の色も薄らぎて見ゆる中に、北斗星の劍先が手も届くかと思ふばかりに垂れ下りてきららかなるやうな有様ぞと、大師入定の氣高さを品評した、以上六句は全く達磨大師の眞贊とも謂ふべき調子で、敢て廓然の話の頌とばかりとは思はれぬ、萬松が秋清の句に高く眼を着けて、看よと着語したのは、此祖師の行履の清らかさ氣高さを勿々に看過くしては成ぬぞと門下に注意したので、又河淡の句に誰か敢て承攬せんと言ふたは、承はウケル攬はトルと云ふ字であるから、斗柄の垂れると云ふ詞に就て、其柄を誰ぞ能く掌に受け取れる者が有るやと此れも門下への注意と見える、細々として衣鉢兒孫に付す。細々は絶えざる貌と注して、相續する姿、衣鉢と云ふは釋尊から達磨大師まで二十八代嫡々相承し來つた、袈裟と鐵鉢とがある、其れを嗣法の信として二祖の神光に付與せられ、三祖四祖五祖と傳はつて、六祖慧能の時に此れは却て後世争ひの本になると云て曹溪山へ納めてしまわれたと云ふことじやが、とにかく達磨が支那へ來りて禪宗と云ふものが始めて弘まつた、ソコで此れより人天藥病と成る、人間も天上も凡そ佛法を修行するに堪ゆるほどの者が、迷とか悟とか云ふことを聞き知りて、之が爲めに忙がはしいことに成た、元來十方三世の間に病も無ければ藥も無い月も花も皆十全健康、雨も風も無病息災である者を、釋迦や達磨が餘計な世話を焼いて、風なきに浪を起

し、平地に骨堆を生じた云ふものぞ、宏智が謂ゆる正令を全提して大聲疾呼せられたのじや、萬松の着語に莫妄想とある、衣鉢だの兒孫だのと何を寐語いはるゝぞ妄想しては往けませんぞと宏智へ一拶を與へ、又一面には門下に注意せられたものと見ても好い、天行已に過く使者須からく知るべしと云ふは、支那の俗間の風習に十二月の大晦日の夜に天から行瘟使者と云ふ悪い神が下つて來るに依て、黄色の紙へ朱を以て「天行已過」と書いて門口へ張て置けは、ソコの家へは其疫病神が立寄りぬと云ふことを言ふが、今萬松が人天の薬病と成るのを疫病の流行するのに譬へて、達磨の西來を行瘟使者の下るのに比べ、天行已過使者須知と云て達磨のお立寄を避けたのじや、何故に斯く初祖大師を輕蔑したやうなことを言ふぞ、その實大師の洪恩重大にして酬い難きが故であると云ふことを忘れては成らんぞ、何故に大師の洪恩重大なるぞ、人々各自に實究して見るが好い、

第三則 東印請祖

示衆云。劫前未兆之機。烏龜向火。教外別傳一句。確背生花。且道還有受持讀誦分也無。

示衆とは相變らず萬松行秀禪師が其門下の衆僧に示されたので有るが、吾々も互ひも皆其示しを今日に受くるのじや、何と示されたぞ、劫前未兆の機、烏龜火に向ふとある、劫の字は梵語の劫波を略したので漢譯すれば時と云ふ字にあたると云ふことじや、イカサマ時は無限に違ひないけれども、物事次第に依て過去と現在と未來との三時に分れる、ソコで限りの無い時間に刻みを附けて今だの昔だの昨日だの明日だの

と色々な名を附ける、即ち此劫の字も時間の一名で一切と云ふは甚だ長い久い間の時間のとだそうな、コゝに四十里四方の箱があるとして、其箱へ芥子粒を一抔につめる、サテ其芥子粒を千年目に一粒つゝ、取除けて其芥子が一粒も無くなる間の時間を一切と云ふと申してある、其劫の前と云ふのであるから幾らとも限り知られぬ昔の昔の大昔の前に、佛だの衆生だの迷だの悟だの生死だの涅槃だのと云ふことの未だ兆さいる所に、一の活機があつて一切諸法森羅萬象の本體本源となる、其れを劫前未兆の機と名けられた、平生聞き慣れた詞で申せば真如とか法性とか本覺とか妙心とか云ふので有るが、其れがドウした烏龜火に向ふ、烏龜は眞黒な龜の子よ、其眞黒な奴が眞赤に燃えて居る火に向てる、燎々分明毫髪も掩ひ蔽されてある所は無いぞ、山河草木露堂々じや月も花も明歴々よ、教外別傳の一句、確背花を生ず、教と云ふは釋迦老人五十年が間横に説き堅に説き衆生濟度のために四辯八音を弄させられた經文戒律、支那譯に成たのばかりでも唐の開元年中に調べた時に五千四十八卷あつたと云ふ、尤も此中には後世の人の説いたものも雜つては居るけれども、トにカク大層な説法じや、其れを後々の人たちが五時だの三時だの四教だの五教だのと部別をしたり、大小權實頓漸顯密などと色々な種類を分けたりして、各自に門戸を張て居るが、佛祖單傳と稱せる達磨の門下では其様なことには拘はらない、畢竟釋迦如來御一代の説法は、唯吾々も互ひの心性に本具せる大光明を放たせやうとの御手引に過ぎぬことと有るから、直に人心を指して見性成佛すると云ふのが即ち教外の別傳じや、其教外別傳の本旨の一句に言ふたらドウ云ふこととなるぞ、確背に花を

生ずとある、確と云ふは石の白じや、石の上に花が咲くもので有らうか、世間普通の花は必らず雨露水土の恩澤を受けて、牡丹は春で無ければ咲かず、山茶花は冬で無ければ咲かず、夏は蓮華、秋は菊と云ふやうに時節までに極りがある、然るに今は誠に不思議よ、石臼の角へ花が咲いた、而も此花は千古萬古開落の無い花じや、釋迦佛は此花に妙法蓮華と云ふ名を附けた、其花の美しさを大方廣佛華嚴とも稱された、之を平生お寺の説教などで聞くやうな話に於て、見やうなら、花が咲くと云ふのは成佛とか往生とか云ふことよ、其往生成佛するのに世間並の教家の説に依れば三大阿僧祇劫と云ふ長い間に生れかはり死かはりして、四諦六度十二因縁種々さま／＼の修行を積んで其れからヤツと往生成佛すると云ふので有るが、教外直指の祖師門下では雨露の力も水土の縁も假りはせぬ修行も時節も用は無、石臼に花の咲くやうに、煩惱そのまゝの菩提、生死そのまゝの涅槃、イマサ菩提だの涅槃だのと云ふのも耳ざはりじや、飯に遭ふては飯を喫し茶に遭ふては茶を喫す、其れが即ち達磨門下の經文よ戒律よ、且らく道へ還て受持讀誦の分ありや無や、サ、此の如きの經文を讀誦し此の如きの戒律を受持することが出来るかドウじや、此の如きの戒律を受持し此の如きの經文を讀誦することが出来るかドウじや、幾ら五千四十八卷の經文を讀誦しても、八萬四千の法門を能辯に説いても、其れは隣の寶を數ふると云ふものよ、何のへチマの皮にも成らんぞ、其れに就て昔し面白い話があると云ふので本則を引出した、

舉。東印土國王。請二十七祖般若多羅齋。往在口王問曰。何不看經。祖云。貧道。入息

不居陰界。出息不涉衆緣。常轉如是經。百千萬億卷。上來諸經無量勝因

東印土と云ふは今の何國であるやら分らんか、或は暹羅あたりでも有たが、王の名は堅固王と云ふたと申すことで、二十六祖の不如密多尊者に篤く歸依して居られた、其頃何人の子で有たやら瓔珞童子と云ふが有て、或時不如密多が王の招請に與かつたとき、其童子に仰せられたには、其方は昔の事を覺えて居るかと云はれた、ソウすると童子がハイ昔の事を思ひ出せば尊師と同居して尊師は般若を演説し某甲は修多羅を受持したことも有りました、其れ故に今此で御待ち申して居りましたと云ふた、ソコで不如密多が之を國王に紹介して此子は大勢至菩薩の應身で御座ると言はれた、王も大に喜ばれて其童子を不如密多の弟子に致し、彼の昔話の因縁に依て般若多羅と名けられたとある、委しいことは傳光録でも見るが宜し、モンと委しいことは五燈會元が好い、サテ其後段々と親參實證の功が積んで、遂に釋尊二十七代の法燈を續ぎ彼の震旦の初祖とある達磨大師の本師となられたのが、此の般若多羅尊者である、或時國王が宮中に招請して御齋を進ぜられた、外の僧だちは常に看經を讀むとであるが、此の般若多羅尊者は少しも御經を讀まぬに依て、王が何ぞ看經せざるやと問ふた、ソコで般若多羅の答へられたには、貧道は入息陰界に居らず、出息衆緣に涉らず、常に是の如きの經を轉ずること百千萬億卷とある、貧道と云ふは道德の乏しい者と云ふことと抽僧と云ふも同じと謙遜の自稱じや、入息出息と云ふは息を呼吸するとして有るが、寝ても起きてもと云ふほどの意味、陰界と云ふとは少し面倒であるが、陰は五陰と申して色受想行識の五つ、色は凡そ

形のあるものを總稱した辭、下の識の字は神識とか魂識とか續いて吾々の心のと、中の受と想と行との三つが心と物との間から起る關係、ソコで五陰と云ふことが吾々の身も心も乃至一切萬物も皆籠つてゐる總名になる、サテ其色陰すなはち吾々の身體には眼耳鼻舌身意の六根が備つてゐる、又これに對して色聲香味觸法の六塵がある、根の字や塵の字の講釋も入用であるが、其れは何時でも言ふことであるから今は略して、其六塵が六根に映れば六識が起る、眼に色が映れば黒いとか白いとか奇麗なとか穢ないとか分別する心の起るのが識じや、耳にも鼻にも其通りであるから、六根と六塵と六識と合せて十八界になる、ヨ、に界と云ふたのは此十八界のことじや、界は區界または境界の義で俗に申せば組合とか仲間とか云ふほどのことになる、眼根は色塵と眼識との間に區界を限つて仲間を結んで居ると云ふやうなわけよ、然るに今般若多羅尊者は寢ても起きても五陰十八界の支配を受けて居らぬぞと言はるゝ、又衆縁に涉らずとある、衆縁と云ふはモロ／＼の有様と云ふほどのことで、世の中の都べての物から事から、迷も悟も佛も衆生も善事も惡事も生も死も都べての物事に關係は無いぞと言はれる、吾々も互ひの上では寢ても起きても五陰十八界の支配を受けて世の中の都べての物事のために煩惱妄想して居るので有るが、二十七祖はソウで無い入息陰界に居せず出息衆縁に涉らずとある、是れが直に御經である三世諸佛の活きた御說法じや、しかも此經は五千四十八卷くらゐでは無い、是の如きの經を轉ずること百千萬億卷とある、百千萬億卷と云ふも人間の想像に當て敵めたままでのこと其實は無量無邊不可思議恒河沙と云ふもあろかなことよ、寢るも

起るも皆御經じや喫茶も喫飯も皆陀羅尼ぞ、商人は牙籌を弾くまゝに五陰十八界の中には居らぬ、百姓は鐵鎌擔ぐまゝに衆縁に涉らすと、仕ることを作すこと是の如きの經とならねば埒明かんぞよ、世間普通の佛教者は御經とさへ言へば五千四十八卷のと思ひ、釋迦如來ばかりが御經を説くものと思ふて居るでも有らうが、達磨大師は教外別傳不立文字と一切の經論を皆取らぬと言はれた、皆取らぬのが皆取たのじや、サスカは般若多羅の嫡子だけの活作略じや、教家の方でも法然上人などは七返までも一切經を讀ませられたと有るが、各宗に皆別々の一切經が有ると言はれた、あげくの果に「たとひ一代の法をよく／＼學すとも一文不知の愚鈍の身になして」と教へられたは、一切經を取て取らぬ、取らぬて取る、達磨も法然も同道唱和じや、然るに理論の上だけで顯教だとか密教だとか聖道門だとか淨土門だとか幾ら囁つて見ても隣の香の勘定では何の役にも立たん、サーも互ひに出息入息陰界に居せず衆縁に涉らざる底の如是經を朝な夕なにドウして轉讀したもので有らうぞ、水を飲んで冷煖自知するより外に仕方は無い、サテ萬松老人は此公案をドウ見られたぞ、着語を調べて見やう、東印度國土瞻般若多羅齋の下に往々に口債を償ひ去るとある、往々にと云ふは世の中の並々の坊さんは大抵いつでもと云ふほどのこと、口債と云ふは口の借と云ふことで、御齋の御馳走に成ること、其御馳走の借を償なはうとて御經を讀んだり陀羅尼を唱へたり念佛申したりするのが多いぞと着語した、何不看經の下に功なくして祿を受くれば寢食安からずとある、在家の檀越の供養に預かるべきほどの徳もなく御齋の御馳走ばかり受けては寢覺が悪いぞと云ふ、千百

萬億卷の下に上、來の講讚限りなき勝因とある、講は講釋、讚は讚歎、勝れたる因縁と云ふと此の如是經の轉讀を拜聽して成佛得脱せぬものは有るまい、實に限りも無い勝因じや、サテ又宏智古佛は此公案をドウ見られたぞ、頌に曰く

雲犀玩月璨含輝暗通一線木馬嘶風駿不羈百花遊過程眉底一雙寒碧眼不曾起看經那到透牛

皮也明也白心超曠劫威音前英雄力破重圍射透兩妙圓樞口轉靈機動智寒山忘却來時路

人拾得相將携手皈須是當

第一句第二句で二十七祖が出息入息陰界に居せず衆縁に涉らざる様子を讚歎せられた、雲犀を靈犀と書たのもあると云ふが雲でも靈でも此字には用がない、犀と云ふは水の中に居る獸で犀牛とも云ふとか申すこと、角と云ふて藥になる角を持って居るそうであるが、古人の詩に犀は月を玩めそふに因て紋を角に生すと云ふ句がある、其れを借て來て第一句にせられたが、用のあるところは璨として輝を含むと云ふ三字にある、般若多羅尊者の五陰十二處十八界などと云ふ凡夫有漏の穢らしい處に居られぬ有様、いかにも八面玲瓏ほがらかに照、月の光輝璨然たるやうであると言はれた、第一句に木馬と云ふは木で造つた馬であるから思量分別の絶えた有様、思量分別の無いまゝに春風のソヨクと吹く野原に嘶いて遊んで居る、駿にして羈されず此句も此羈されすと云ふ二字だけが必用じや、衆縁に涉らすして衆縁に應じ灑々落落たる有様の形容じや、サテ又般若多羅尊者の容貌知何と見るに、眉底一雙碧眼寒し、雪の如く白く髻の如く長

い眉毛の二つ並んだ其下に印度の人のことと有るから、碧色の眼の光ヒカリと輝ツて居る様子、那の眼光では藥山大師が看經を論じて牛皮もまた須からく穿過すしと言はれたことであるが、牛皮を透るなど云ふことは論ずるにも足らぬ、眼光紙背に透ると云ふのやさへも、世間では、非凡なこととしてあるに、看經那ぞ牛皮を透るに足らんやと讚歎せられた、明白の心は曠劫を超え、英雄の力重圍を破る、此二句は尊者超脱の力量を頌したので超の字と破の字が字眼である、明白と云ふことは三祖大師の「信心銘」に但憎愛なければ洞然として明白とある、一點の曇りも無い形容じや、曠劫と云ふは曠は無量とか無限とか云ふのと同じ意味で曠漠なども續く字である、劫は例の劫波と云ふ梵語を略したのであるから、曠劫の二字で無限の時間と云ふことになる、教家普通の説では吾々凡夫が佛に成るのに、多くの時間を經過して一生や二生の間に成佛することが出来ぬやうに言ふ向もあるが、今教外別傳の祖師門下では但憎愛なければ洞然として明白とある、其明白の心が直に無限の時間即ち曠劫を超過する、彈指に圓成す八萬門刹那に滅却す三祇劫と永嘉大師が言はれたのも此のことぞ、然しながら趙州やらが言ふた如く老僧は明白裏に在らずと其明白をも更に打破らねばならぬ、迷の關所は云ふまでも無く悟の關所をも打破る勢ひは、百萬の貔貅を將ゐて萬里の長城を蹴飛して通る如くであるぞと云ふので、英雄を力重圍を破ると言はれた、ソヨで妙圓樞口靈機を轉すと自由自在の働らきが出来る、此句は傍句と申して相手のない句じや、妙は不可思議に名くると申して心も詞も及ばぬ姿、圓は欠けず餘らず十五夜の三更の月の如き有様、樞はクル、と云ふ字で思ふ

やうに運動する形容、口は口業で言説のことであるから、尊者が是の如きの經を轉ずること百千萬億卷と自由自在に言ひ得る有様を讚歎して、靈機を轉ずと言はれた、サテ結末に至りて寒山來時の路を忘却すれば拾得手を携へて歸るとある、寒山と拾得との傳を申して居ては中々長くなる、知りたひ人は白隱禪師の書かれた寒山詩の「闍提記聞」などを讀て見るが好い、今の必要は寒山拾得でも伯牙と子期でも誰でも好い、甲の朋友が來時の略を忘れたときに乙の朋友が其れを導びいて還ると云ふだけで宜しい、來時の路と云ふことは寒山詩にある故事であるが、要するところ吾々も互ひが真如の都の故郷を狂ひ出で、三界の苦海に流浪して還ることを忘れて居る、寢ても起きても如是經の轉讀とも知らずに居る、然るに今般若多羅の如き人は是の如きの經を轉ずること百千萬億卷と大喝一聲せられて始めて其れに違ひないと氣の附くアンパイが、まるで寒山拾得の故事のやうであると言はれたのじや、彼の法華經の衣裏に珠を繫けた譬も同様である、マ、是れで頌の句面もザツと分つた、序に萬松の着語が、あまり面白くも無いけれども第一句の下に暗に、一線を通すれば文彩已に彰はる、暗に一線を通ずると云ふは入息蘊界に居せず出息衆緣に涉らずと云ふところに到着すればと云ふほどの意味、ソツすれば雲扉月を翫そびて際として光を含むと云ふやうなイカにも美しいことになると評したので有らう、第二句に百花叢裡に過れども一葉も身を沾さずとある、草の茫々と茂つた中を通つても露に濡れぬと云ふので、尊者が衆緣に涉らずと言はれたのを宏智が木馬の春に嘶くに比したのに賛成したまでのこと、第三句に曾て蚍蜉の隊を赴はすとある、蚍蜉と云ふは大

蟻のことと云ふもの、蟻と云ふものは食物の香を嗅ぎ附けてソロソロと隊を組で出掛けるものであるが、今般若多羅尊者は世間の經論言句の臭氣に附き廻る仲間では無いぞと賛めた、第四句に過也とある、何ぞ牛皮を透るに足らんなど、云ふも恐なことトウに透り過ぎたぞと見るか、第五句に威音前の一箭、威音前と云ふことも委しく申せば甚だ面倒であるが曠劫と云ふも同じことで、過去の過去の昔と云ふこと、其大昔に放つた一本の箭であるぞと云ふ、ソノマ次の句に射透す兩重の關とある、迷と悟の兩重の關じや、煩惱を斷じ盡して更に菩提をも透過する有様ぞ、第七句に何ぞ曾て動着せんとある。靈機を轉ずと云ふたからとて、何も動き廻ることでは無いぞ、第八句に暫時も住せざれば死人に如同す、コレは忘却と云ふ二字に就ての着語と見える、暫時でもソツカリと油断して居ては活きた人とは言はれぬじや、結句に須からく是れ當郷の人なるべし手を携へて歸つたと云ふのを見れば、同郷の人と見えると云ふのじや、吾々も互ひは他郷の人で有らうか又は同郷の人で有らうか、何時トウして寒山拾得と手を携へて歸れることで有らうぞ、然かし諸君は初から他國へ流浪して居ぬなら其れほど御目出たいことは無い、途中でノメリ死して並木の肥料となるのも、亦た是れ一段の風流かの、其邊は人々各自に實參實究するに任せる外は無い、先づ通辯はコレまでのことよ、

第四則 世尊指地

示衆云。一塵纒舉。大地全收。正馬單槍。開疆展土。便可隨處作主。遇緣即宗。底是甚麼人。

何でも文章を讀むには其文の眼目とする所を見出だすのが何より肝要ぢや詩一首でも其一首の句眼とする所があり又其一句の内にも字眼と云ふ所がある此萬松の垂示は僅かに六句三十一字であるが此中の眼目とする所はどこで有らうぞ隨處作主遇緣即宗と云ふ八字が句眼かと思はれる隨處と云ふは十方法界どんな處でもと云ふことであるから地獄でも極樂でも金殿玉閣でも賤が伏屋でもどんな所へ往ても直に其處の主人公となると云ふのぢや地獄へ往ても閻魔王に叱られたり青鬼赤鬼に苦しめられたりするやうでは地獄の主人公となることは出来ぬぞ極樂に往ても觀音や勢至の御厄介に成て有難涙を流して彌陀の說法を聴て居るやうでは其れは極樂の奴隸と申すもの七重欄楯七重羅網の奥の院の主人公には成れぬぞ况んや人間世界の金殿玉閣を見ては其金殿玉閣が結構に見えたり賤が伏屋を見ては其いふせさが氣の毒に思はれたりするやうでは金玉に使はれいふせさに逐ひ廻されると云ふもので決して其主人公となることは出来ぬぞ緣に遇て宗に即すると云ふことも同じことでのやうな物事に出逢ふても其儘が直に佛祖單傳の向上宗乘中の事にヒタリト契ふて隔てが無いと云ふことぢや孔子でさへも七十の時には心の欲する所に從がふて矩を除えずとある思ふまゝにするがヒタリトと天然の道に契ふたといふことぞ况んや佛祖の兒孫たるものがド

んな物事に出逢ふたからとてヒクシヤクするやうでは仕方は無い隨處に主と作ることに出来るものなら緣に遇て宗に即することは論の無いはず緣に遇て宗に即することさへ出来れば必らず隨處に主と作り得らるゝに違ひないサへ其の通りの自在の人でさへ有れば一塵僅かに擧げて大地全く收り正馬單槍で疆を開き土を展ることも出来るのぢや一座はヒトツのチリと云ふ字で些少なものと云ふことであるから一毛でも一草でも紙一枚でも水一滴でも何でも宜しい大地と云ふたのも大地ばかりでは無い乾坤も宇宙も百千の日月も成るだけ大きな物を擔ぎ出して來るが好いドンな大きな物でも極々小さい物の中へ這入て仕舞ふと云ふことぢや元來吾々が無始劫來に習慣した妄想分別で物さへ見れば大きいとか小さいとか浅いとか深いとか好いとか悪いとか其他百端厚薄長短方圓曲直是非邪正いろいろの差別を附けて物事に其様な自性實躰でもあるやうに思ふて居るが染々と能く考かへて見るが好い富士の山が高いと云ふたのは其れより低い山よりも高いと云ふだけのことぞ有らう實際は信州追分の油屋の玄關の敷臺よりも三尺低いと昔から云ふて居る小さいことの例には蚤の墨丸を八割にしたやうだと云ふけれども是れも其れより大きいものに比べて云ふただけのこと此頃では顯微鏡などを扱かふ人に聞て見ると小さいと云ふことにも限りは無い望遠鏡を扱かふ人に聞て見れば大きいと云ふことも限りが無い畢竟大きいと云ふも小さいと云ふも一時一部分の假の名でしか無いものを實體實性のあることのやうに思ふて居るから妄想分別の止む時が無い試みにガラリと妄想分別を抛うつて見るが好い一塵纒かに擧れば大地全く收まると云ふたのも誠に子供だまかしの言ひ分

であると云ふことが分るで有らう理屈の上では能く分る、分るけれども物事に實地に當つて其理屈通りの自由が利かんで空論になるからソコで佛祖の教訓も入用になり互ひに實修實證せんければ成らんと云ふことにもなる正馬單槍は馬一疋槍一本と云ふことで是れは戦争をして人の國を占領し自分の土地を殖やすことに譬へたのじや是れも前の話に例して見れば能く分つたことで誰れの國じや彼れの領地じやと差別を附けて見ればこそ互ひに守りもすれば防ぎもするから之を攻め滅ぼして疆を開き土を展ると云ふことは容易なことでは無い何萬とか何千とか云ふ軍人が命がけで戦つても都合よく勝てることは中々少ない然るに今は正馬單槍じや馬一疋槍一本と云へは何やらマダ兵器でも入るやうで有るか誰の國じやの彼れの領地じやのと云ふ差別を取り除けて見るかよい盡十方法界みな我が領分よ隨處は主人公となり得る身から見ると日には正馬も單槍も入たことでは赤裸の其まゝで今此三界皆是我有じやサテ其様な人はドコに居るぞ是れ甚麼人ぞと云ふて本則を引出すのであるが本則の主人公は釋迦如來じや釋迦如來にはかり功名手柄をさせて指をくわいて見て居べきもので有らうか又は外に何とか趣向のあることがソコは人々各自に内から省りみねば成らぬ所じや。

舉世尊與衆行次釋迦以手指地云。此處宜建梵刹太歲頭上帝釋將一莖草挿於地上云

建梵刹已竟修造世尊微笑宣明  
 この本則の事に就て五燈會元に出て居る文と相違があると云ふて穿鑿だてをする人もあるが其んなことは

どうでも宜しい世尊が或る時に太衆と同道て歩かしやる次に面前の或る地處をチヨトとお指さしなされて此處へ寺を立てるが宜しいと仰せられたソウすると御同伴して居た帝釋天が其處に有り合せた草を一本チヨイと其處へ差し挿んで是れで御寺が出来ましたと云ふたソコで世尊がニコリとお笑ひなされたと云ふのじや世尊と云ふは此本則では釋迦如來のやうで有るが會元ではタシカ燃燈佛と書てある釋迦ても達磨でも布袋でも其んな別名はドウでも宜しい畢竟隨處に主となり縁に遇ふて宗に即する底の人のことよ、其人は必らず衆と俱に行く決して獨りでは歩かぬぞ、儒者の謂ゆる聖人でさへ獨り樂して樂しむよりは衆と樂して樂しむ方が楽しいと云ふてある、况んや隨處に主と作る底の人は三世十萬の一切衆生と寐ても起きても同道じや、吾々も互ひも日夜に同伴して居るのじやがチヨイと地を指さして此處へ寺を建てるが宜いぞと言はれた時に何としたもので有らうぞ、寺と云へば寺と云ふ詞に付き廻り地と云へば地と云ふ名に付き廻るものも有らうが海でも山でも學校でも神社でも何でも宜しい、チヨイと虚空を指さして此處宜しく石佛を安置すべしと言はれたら何とする帝釋は其時に直に一莖草を挿さんだどある是れも會元の本文では賢首長者と云ふ人であると云ふとじや賢首でも帝釋でも維摩居士でも聖德太子でも誰でも宜しい帝釋は天上界で頭株と仰がれる身分じやと云ふことである隨處に主と作る底の人には御供をして歩かねば吾々も互ひも帝釋やゴツドを御供に連れて歩くやうに成らんで佛法を聞いた甲斐は無いぞ一莖草は草一木と云ふことじやが是れも草に限つたことでは無いチヨイと富士の山を摘んで虚空に安置し石佛の建立が濟みました



と云ふても好からうトニカク建てるの建てないの寺だの草だのと云ふ思量分別を抛つて来んうちは帝釋に  
 さ馬鹿にされるで有らうゴットの奴隷にされるなどは無論のことよッスガに帝釋は長い間、三世の諸佛  
 に御給仕した因縁で筒様な作用が出来る世尊は其れを御覽なされたてニッコリと微笑なされたとあるが其  
 れは何でも笑ひなされたので有らうぞ佛が金波羅華を拈せられた時には摩訶迦葉が微笑したと云ふが帝釋  
 が草を挿さめは世尊が笑ふ是れは何故に笑ふたので有らうぞ其邊は各自の見るに任せるが萬松老人は何と  
 見たぞ世尊與衆次の下に他の脚跟に隨に轉すと著語してある佛の跡尻はかり逐ひ廻はして歩く奴が多いと  
 云ふのじゃコレは誰の事て有らうぞ人々各自に脚跟の轉ずる所を點檢して見ねば成まい此處宜建梵刹の下  
 に太歲頭上に土を動かす可らずとある是れは陰陽道の御幣拵が言ふことと太歲神と云ふは其年の年廻りの  
 神と云ふこと其神が今年は何の方角に當るとか云ふことと有て其方角の土を動かして普請などをする事  
 りがあると云ふ俗説がある其れを萬松が借用して此處は方角が悪いから普請は出来ませまいと云ふたのじ  
 や隨處に主となるものが出来ぬ者はトカク處擇びをしたがるものじゃ諸君ドゥじや萬松に冷かされたり  
 帝釋に笑はれたりせぬ様に用心するが肝要ぞ建梵刹已竟の下に修造し易からずとある草一本を挿さんで七  
 堂伽藍建立を竟ると云ふことは實に容易なことでは無い帝釋御苦勞と云ふたやうなアンパイ世尊微笑の中  
 に賞罰分明とある世尊が帝釋の梵刹建立を賞されたので有らうか又は罰せられたので有らうか頓と分明で  
 ないやうに思はれるが諸君は何と判斷せらるやソコは入々自己の世尊に問ふて見るのが一番早いぞ、頌に

曰く

百草頭上無邊春夾山信手拈來用得親不嫌丈六金身功德聚不盡等閑携手入紅塵隨處塵中能  
 爲主一朝權化外自來賓看取觸處生涯隨分足不從未嫌伎倆不如人面無

天童宏智の見かたはドゥじや第一句は春と云ふ字が字眼で春風は元來無邊なものぞ九重の御庭でも蘆の苦  
 屋瀬戸の隅でも別け隔ては無い、ソコで百草頭上に皆花が咲く梅も咲けは櫻も咲く牡丹も笑へは芍薬も笑ふ  
 花ばかりでは無い柳も芽出せば薇も萌え出す春ばかりでは無いぞ夏も秋も其通り一うなゐらるが刈り残した  
 る夏艸は残らず花になりけるかな「じや、何と云ふ草やら人間などに名も知られぬ草でも花は十分に咲く  
 百花各々本分を味まさす山の上でも咲けは谷の底にも咲いて居る艸木國土悉皆成佛の御莊嚴いかに有り  
 難い景色じや、じやに依て手に信せ拈し來て用ひ來て親し。梵刹建立の材料が此通り多くあるに依てドレで  
 も手任せに拈し來て用ゆることが自由であるぞソコで釋迦如來などは身の長一丈六尺しかも紫磨金色の三  
 十二相八十隨好と云ふ御身で過去無數劫以來に積功累徳せられた十方世界の大導師であらせらるゝから丈  
 六金身功德聚と云ふのて有るが等閑に手を携へて紅塵に入る、等閑と云ふ字が肝要じや等閑と云ふは不隨  
 意の意ぞ任運自由に地獄にも遊べは極樂にも遊ぶサテ、面白くことではある紅塵と云たり塵中と云ふた  
 りしたのも吾々人間の通情に當て籍めてコッ云ふたまでのことツマリ隨處と云ふことドゥも云ふこと  
 塵中能く主と作る、隨處ドゥ往ても其處の主人公となる主人公が此通りであるから化外自來賓す、

いろ／＼な御客が来ると云ふのじや化外と云ふは一國の天子が自分の領地として化育する所を化内として他の外國のことを化外と云ふのであるが實は佛の化外とする所のあるべきはずは無いけれども今は只思ひ掛けない他方の御客が来たと云ふまでの意味で化外、自來、賓と云ふたものじや實に釋迦如來の逍遙散步中に出来たこととすれば迦葉尊者が草を挿さんだとか阿難尊者が花を摘まんだとか云ふなら有りがちのことと思はれるけれども天上界から帝釋などが出掛けて来て我々人間の鼻を擦るなどは甚だ怪しからんことである、とは云ふもの何も釋迦や帝釋を彼れ此れと云ふにも及ばん櫻や牡丹ばかりが花では無は鬼蘇にも花は咲く「谷ふかみ柴刈る鎌をのがれてし脚躑は今ぞ花さかりなる」人々各自に觸處生涯分に随つて足る、未だ嫌はす伎倆の火に如かざることを、鄰家の百萬兩を何遍かぞへても焼芋一つも買ふことは出来ぬぞ一錠でも五厘でも自分の錢は自分の自由に使はれる況んや無邊の春風に貧富貴賤の別け隔てはない昔し趙州和尚は一莖艸を拈して丈六の金身と作して用ゆと云ふた今は帝釋が一莖艸を以て七堂伽藍を建てたと聞くに就ても人々各自に宇宙萬象を如何に使用すべきぞと自己に返照して見ねば成るまいサテ宏智の頌に對して萬松の着語は百草頭上無邊春の下に夾山猶ほ在りといふた是れは昔し夾山和尚と云ふのが關市裡に天子を議取し百草頭上に老僧を薦取せよと云はれたことがあるが今宏智古佛が百草頭上と言ひ出したのを聞くに直に夾山が現存して居るやうに思ふぞと云ふは此句を美めたのじや第二句の下に荒田に入て揀はす是れも昔し圓悟禪師が荒田に入て揀はす手に信せて草を拈じ來ると言はたことが有るが荒田は元來草茫々じやド

の草の草と揀ぶに及ははす手當り次第に拈じ來て見ればドレもコレも皆花爛熳じや第三句の下に不審とある此の不審と云ふ詞は支那人の朝夕の挨拶に言ふこととて丁度日本て人に逢へば御機嫌宜しうなどと云ふやうなわんばい御無事で御座るかとか問ふ詞であることと云ふことじや丈六の金身と承たまはるが御無事で御座るかなと挨拶したのよ何と諸君丈六の金身も病氣をすることが有らうかの等閑携手入紅塵の下に場は逢ふて戯を作す、場と云ふは劇場の舞臺のことと戯と云ふは俳優が舞ふことじやソコで此ては舞臺次第に自由に舞ふと云ふことと第五句に一朝權手に在り、主に爲れは大權その人の手に在るは無論のこととて三世諸佛を殺さうと一切衆生を殺かさうと起さうと與奪自在じや化外、自來、賓の下に令の行はるゝ時を看取せよ、主人の號令の行はるゝ様子を氣を附けて見るが好い梵刹を建立せよと令すれば直に一莖艸を挿さむ自由自在なのは第七句に人に從て得るにあらずとある本より各自の分に隨て足るのであるから他人のお世話にあづかるべきでは無い結句に面に慚色なし、伎倆の人にかかざるを嫌はぬ所それが眞の大丈夫上何も慚づべきことでは無い柳の緑が花の紅ひに耻るわけも無ければ山の高きが水の長きを怖るゝわけも無いぞ、

第五則 青原米價

示衆云。閻提割肉供親不入。孝子傳。調達推山壓佛。豈怕忽雷鳴。過得荆棘林。斫倒梅檀林。直待年窮歲盡。依舊孟春猶寒。佛法身在甚麼處也。

例の通り先づ萬松老人の示衆じや闍提調達の一對は法の本體には善惡の論量の無いものと云ふことを示されたので乃ち極善極惡の二つを擧げられた闍提と云ふは昔し印度の或る國王の子で有たが其父の王も母の後も逆賊の爲めに奪はれて身の置き所がなく已むを得ず他國へ遁げて往くときに闍提王子も諸共に奔つたが途中で食物が盡きはてて父母ともに飢え疲れたソコで闍提王子は自分の飢も疲れも忘れて自分の身軀の肉を割いて餘所から鳥の肉でも得て來たやうな振りをして兩親に供養せられたと云ふことが「大報恩經」と云ふ御經に説かせられてある此れは釋迦如來が當時およひ末世の御弟子だちに親孝行をお勧めなされた御教訓の御話であるが實に親の爲めには身も命も惜むべきでは無いと雖でも口には言ひ易いけれども實地に簡様な場合になつてはモハヤ世間普通の孝行を論評する規則では判決することが出來ぬから孝行だの不孝だのと云ふ差配にはあつからぬに依て並々の孝子の事など書立てた孝子傳などと云ふもの、仲間には入れられぬぞと云ふので肉を割て親に供するも孝行の傳に入らずと言はれたサテ又之と反對で佛教の上で五逆罪と云ふ中にも佛を殺そうと云ふほどの惡心は無いのであるが彼の提婆と云ふ人は釋尊と從弟（釋尊の淨飯王その弟が白飯王と申して即ち提婆の父です又提婆の弟阿難尊者で此は三十年一日の如く釋尊のお側に隨從して侍者を勤められた）でありましたがドウ云ふ宿世の因縁やら一生涯釋尊の怨敵となつて色々な妨害をせられたが或時に釋尊が山の下を通られるのを見掛て山の上から大磐石を轉がし墜して一壓に壓し殺そうとしたけれどもサスガに三界の大尊師たる釋迦如來は人に殺されるやうなものでは無い大磐石は外

の石に打ち中つて微塵に摧けた其片石が飛て來て釋尊のお足に中つて血が少し出たことが有つたと云ふが三千世界に惡人も多くあり隨つて惡業も多いけれども斯のやうな惡いことをする者は無い其事を調達山を推して佛を壓すと言はれたのじや提婆達多は天竺の語で漢譯すれば調達となるやうな世の中に有り觸れた並々の惡人なら惡事を働らきなながらも心の中ではサスガに良心に責められることも有て天罰などが中りはせまいかと時としては願ひみる所もあるものだから俄に雷電などが物すこく鳴りはためいてでも來れば顔色かへて怕れることも有らうが提婆ほどの大惡人に成ては其んなことに驚ろくものでは無いソコの處を豈に忽雷の鳴るを怕れんやと言はれた荆棘林を過得し柳檀林を斫倒すと云ふ一對は善惡ばかりでは無い迷悟も凡聖も無いことを言ふので荆棘林と云ふはイバラカタチの生茂つたところ草木の中でも一番に厭な草木じや即ち此れは煩惱業苦の淺ましい有様に譬へたので其んな處はサツサと過得と通りぬけて往かねばならん此れはマ、誰にも能く分つたことで有るが煩惱業苦の荆棘林ばかりでは無い菩提涅槃の柳檀林をも斫倒せよとある柳檀と云ふ樹は日本などに同名の木があるけれども天竺で赤柳檀とか白柳檀とか云ふのは餘ほど違ふたもので中々香氣の強い草木の中の大王として有るもの、様子じやソコで之を菩提涅槃の悟りに譬へるのであるが其悟りとか云ふ柳檀林も斫倒とキリタラシてしまはなければツマランぞ結局大晦日すなはち年窮まり歳盡ると云ふ時節に到つて右へも左へも躊躇する餘地の無いとき百尺竿頭さらし一步を進めて見なさい明けまして御目出たうと正月元旦じや然しながら孟春猶ほ寒し名は新年と申しながら

未だ寒さは舊年のまゝと名を逐ひ詞を尋ねて悟りの迷ひのとマヨッキ廻つても佛の法身すなはち摩訶毘盧舍那如來の居處が分らんでは何の詮もない畢竟トコに佛の法身が居るぞ内に居るか外に居るかソレ鼻の先に居るぞ鼻をツマ、れるナ脚の下にも居るぞ蹴ツマツカないやうにするが好い、

舉僧問青原。如何是佛法大意。小僧多原曰盧陵米作麼價。老將不

サテ宏智禪師の擧揚せられた本則は或る一人の僧が青原禪師に問ふた如何なるか是れ佛法の大意この青原と云ふ人は達磨大師七世の法孫で彼の名高い本來無一物と言ふた曹溪六祖の法嗣であります名は行思と申して吉州の青原山に居られたから青原くとはかり謂て居る初めて六祖に参じた時にイキナリ何の所務か階級に落ちざることを得んと問ふた六祖が汝曾て何をか爲し來ると反問したら聖諦も亦た爲さずと答へた人で最初から梅檀林を斫倒し來つた人であるから六祖も聖諦すら尙ほ爲さず何の階級か之れ有らんと云て印可せられたと云ふ豪傑じやソコへ此問答をしかけた僧は未だヨク／＼の初心であるを見えて無邪氣にも殊勝らしく佛法の大意は如何なるもので御座りましやうと問ひ掛けた當節の書生たちなどか大抵こんなことを問ふて來るが私共はマサカに其書生さんに向て蠟殼町の米相場はドンナですなどは言ひ得ませんが青原禪師は平氣なもので廬陵の米作麼の價ぞ一鉢に青原禪師の手元には佛法も魔法も無い荆棘も梅檀も御座らぬに依て佛法の大意が聞きたいなら蠟殼町の米相場を問へ出と云ふやうなアンバイじや、トは云ふものゝ米相場には限らんぞ佛と言へは佛に取り付き米と言へは米に取り附くのが吾々凡夫の癖であるが其

取り附く癖を止めなくては到底かやうな相談は出來んよコウ云ふたなら復た取り附くところの無いのが悟りであるかと思ふ人もあるて有らうが其れはヤツバリ取り附くところが無いと云ふところに取り附いたのじや唯廬陵の米の價は幾らですと云ふたのよ如何なるか廬陵の米價を問て三世諸佛の八萬法門此の通りよとも参じて見るが好い如何なるか是れ三世諸佛の八萬法門と問ても月さま幾つ十三七つと勘定して見ても好い「佛法は有りけるものを鄰りなる僧父が提けた火打に袋に」と歌ふた人も有たぞ、トカク知解分別だけでは實地の御用に立たんせめて五年や三年は眞視目に坐禪を心懸けて荆棘林では手足から血も流したり梅檀林で晝寝をしては文殊や維摩に叱られたりサンザ色々な目に逢ふた後で無ければ本統の相談は出來ないと云ふ評判じやソコテ萬松の着語に如何是佛法大意の下に小官多々律を念ふとあるトカク小役人と云ふものは役人ぶりたるもので法律規則の箇條にばかり取り附きたがるヤ、もすれば權利だとか役目だとかイヤハヤ鼻持のならぬものじやと云ふた佛法に取り附いて悟りだとか迷ひだとか生死だとか涅槃だとか云ふのさへ胸が悪くなるに顯密だとか聖淨だとか三乗だとか一乗だとかイヤハヤ何とも申しやうのない醜態よと云ふやうな調子じやナゼにコウ佛法臭いことを嫌ふのであらうぞ廬陵米作麼價の下に老將は兵を論せずと評してあるサスカに青原の行思禪師とも言ふる老將は血氣にはやる兵卒のやうに軍の話ばかりして居るので無い軍人でも名將になると胸中別に閑日月ありと云ふ有様で彼の曹操が槊を横たへて詩を賦したと云ふやうなこともあり我國の入幡太郎が奥州征伐の時に敵の大將が陣頭に馬を駐めて「年を経し絲の亂

れの苦しさに」と言ひ掛けたのを直に後を附けて「衣のたては綻るひにけり」と云ふたなど云ふ話もある  
サスガ名將はアクセクしない所がある然し此れ等は軍と云ふことの外に別に其んなことを言ふて居たので  
あるが今の問答は其うでは無い佛法の外に別に米價を問ふのでは無いぞ米價と佛法とは是れ同か是れ別かと  
も參じて見るか好いサ一是れから宏智古佛の頌じや、

太平治業無象現也未野老家風至淳種如我道

只管村歌社飲活不徹

那知舜德堯仁始成

この頌は六言四句じや青原禪師が曾て六祖に向て聖諦も亦た爲さずと言はれた有様また今の答に廬陵の米  
作麼價ぞと答へられた様子の如何にも無事安樂なる所を頌せられた、第一句に太平の治業に象なしとある  
堯舜の政治は無爲にして化し天子は手を拱して天下が治まつたと云ふとであるが此れは治だの亂だのと云  
ふ普通の相場を通りぬけた上の話で其天下太平の有様はドンな象ぞと問はれても何とも答へやうは無い已  
むを得ず昔から風雨順時日月清明などと云てゴマかして置くのよ唐の文宗皇帝が大丞相の牛僧孺に向て天  
下は何時太平になるぞと問はれた其時に牛僧孺が太平には象なし今四夷交々侵すことを致さす百姓離散す  
るとを致さす至治に非すと雖も亦た小康と謂はん陛下若し別に太平を求めは臣が及ぶ所に非すと云ふたと  
ある牛僧孺の文宗に答へたるは何だか心苦しい言ひやうにも聞えるけれども眞實の太平には此れと云ふ象  
は無いはずじや譬へは眞實に健康な人には病もなければ薬も入らぬに依て健康とはドンなものぞと云ふた  
からとてコンなものよと云ふて見せやうも無いやうなものよ、ソコで萬松が旋頭星現せりや也た未だしや

と冷かした旋頭星と云ふは支那の天文説で謂ふ二十八宿の中の昴宿と云ふので史記の天官書に昴を鬚頭と  
云ふとあり正義に旋頭星明かなれば天子詔獄平かなり暗ければ刑罰濫るとある然るに今宏智は太平の治業  
に象なしと言はれるが旋頭星の明暗で天下の治亂が見えると云ふとも有て見ればマンサラ無象とばかりも  
言はれんはずであるが然し其星さへも現はれぬほどなら本統の無象であるけれども或は其星などが見えは  
せぬかと云て門下および吾々に注意せられたのじや、第二句は野老の家風至淳なりとある前の一句は天子  
の御安泰を頌し此一句は人民の歡樂を詠ふた野老は田舎の爺さま家風は其朝な夕な暮しかた生れたまゝ  
の赤裸々淨漉々少しも飾りの無いところ眞に太平の民である萬松の着語に争てか如かん我が這裏田を種え  
飯を搏めて喫せんにはとある此れは後の第十二則にコウ云ふ話がある修山主と云ふ人が地藏の桂琛和尚の  
處へ往くと何處から來たと云ふから南方から參りましたと答へた、ところが南方近日佛法如何と問はれた  
に依て商量浩浩地中々盛んなことで御座ると云ふた其時に地藏和尚が言ふた詞に争てか如かん我が這裡田  
を種え飯を搏めて喫せんにはと言はれたとがある例の名目佛法や議論佛法の商量浩浩地は少しも實地の御  
用に立たんぞ田を種え飯を搏めて食ふて居る實地の佛法と比べものには成らぬぞと云ふたのであるが、今  
宏智が野老の家風至淳と言はれたのも其れと同じ味ひぞと云ふて賛成せられたのじや第三句に只管村歌社  
飲とある此れは至淳なる田舎僧父が太平を樂む有様で只管と云ふはヒタスラで餘處事には少しも構はぬこ  
と村歌は田舎の訛り歌、社飲は春秋の中ほどに社日と云ふ日が有て豊年祭をする其日には村中集まつて手

造りの濁り酒でもタラフシ飲む飲では酔ひ酔ふては歌ふ其外に何の心配もない誠にハヤ太平の民ほど氣樂なものはないソコで萬松が口きたなく窮鬼子快活不徹と罵しつた窮鬼子は貧乏神と云ふこと不徹は限りも無いと云ふやうことでヤ一貧乏神等か思ひ切て遊び戯むれて面しろかつて居るそと云ふたやうなアンペイ太平の歡樂を讚歎した盡した詞よ結句に那ぞ舜德堯仁を知らんやと云ふた箇様な太平無事の民は村歌社飲して快活を盡して居ながらも此れが誰れのお蔭であるやら一向に御存知ない舜帝の徳であるやら堯帝の仁であるやら舜とも堯とも其名さへ覚えては居らぬ天子の仁徳も此に至りて極まり太陽の日々照臨するのと其價值が同しくなり人民の歡樂も此に至りて春の野に百草の萌え出ると少しも違はん、コウ成てこそ天子も眞の天子なれば人民も眞の人民であると云ふので萬松か始めて忠孝を成すと評した忠孝も忠孝の形が見えたり聲が聞えたりするやうでは中々まだ眞忠眞孝とは言へぬぞ況んや佛法臭い佛法などは味噌臭い味噌と同様、食はれたものでは無い況んや宗派争ひ本山争ひなどと來ては實に眞持の成たものでは無いぞ宏智が斯くの如く太平に象なきことを言て青原米價を頌し畢つたのも餘處事に閑流しては何にも成らぬ諸君自分の胸に手をあて、御覽、

第六則 馬祖白黑

示衆云。開口不得時。無舌人解語。擡脚不起處。無足人解行若也。落他穀中。死在句

下。豈有自由分。四山相逼時。如何透脫。

第六則は馬祖が藏頭白海頭黑と言はれた公案じや先つ例の萬松老人の垂示で、口を開き得ざる時に無舌の人の語を解し、脚を擡げ起さざる處、無足の人、行くことを解すとある、口を開き舌を動かして物を言ふのは尋常普通の言語で婆アさんでも子守つ見ても其れ相應に饒舌て居る佛祖の堂奥に立入て唯佛與佛の自受用三昧に說法する言論は其うしたもので無い口を開くには及ばない舌を動かすにも及ばんぞ鼻でも言へば眼でも聞く月でも言へばスッポンでも聞くぞ、物を言ふことばかりでは無い歩くことも其通り脚を擡げて膝を伸したり縮めたりして歩くのは郵便配達や新聞賣子が誠に達者じや、佛祖の門庭に往來して玄路鳥道を奔走するには脚を擡げるに及ばぬぞ膝を屈伸させるには及ばない座しても歩けば寝て、も歩く、言ふことや歩くことばかりでは無い見るも聞くも食ふも着るも一切萬事縱横自在、死ぬも活きるも任運放曠に往くべきはずぞ、然るに若しも誤まつて他人の穀中に落ち句下に死在せば豈自由の分あらんやと言はれた、穀の字は弓を張て引き備ふるなりと註してある昔し唐の太宗皇帝か或時宮城の通用門の處へソツと往かれて公卿百官が參朝するのを見て天下の英雄が皆吾が穀中に在ると言て喜ばれたと云ふことが有る今も其通り他人の穀中に籠絡されて句下に死在する者が多い句下と云ふは言語の内と云ふこととて他人の口先に掛けられることと誰がコ一言ふたとか佛説であるとか祖語であるとかばかり云ふて色々な言語の内に籠絡されてテツとも自分の働らきの利かないのが滔々皆是なりじや其れて何の自由の分が有らうぞ、四山相逼る

時如何が透脱せん、四山と云ふは生老病死の四苦の譬で生れて來たが不調法、イヤてもオーても追々ど年  
 を取る段々氣力が衰へて疝氣だとか痰だとかモ、齒が無くて燒豆腐も旨くは食まぬと云ふやうに成ては  
 閻摩の廳から召狀が來るのも遠くはあるまいと思ふて居るうちにはや來た息が二度と入らんと云ふことに  
 なるサ、眞實自由の人なら此處で一番大愉快な睡が睡れんければ成らんがサ、どうじや、深草の正念坊と  
 か云ふた坊さんは達磨門下の人で有たやら又は教家の人で有たやら其處のところは分らんけれども愈々死  
 ぬると云ふときに成て「往て見ても來て見ても皆おなじこと此處らでチヨツと死んで見やうか」と云て往生  
 したと云ふことじや、はあ互ひ各自に冗談を止めて眞實工夫をして見ねば成るまい其れに就ては無舌人  
 の解語、無足人の解行が好いも手本ぞ宏智古佛が擧揚せられた公案に參するが好い

舉僧問馬大師。離四句絕百非。請師直指西來意。若識道僧問頭大師云。我今日勞倦不能爲  
 汝說。已。有。紅。中。月。問取智藏。去更添航上風。僧問藏。藏云。何不問和尚。好本僧云。和尚教來問。藏云。我  
 今日頭痛不能爲汝說。問取海兒。去我不可爲馬師弟子不得。僧問海。海云。我到這裡不會。甜瓜僧舉似  
 大師。案取草大師云。藏頭白海頭黑。更參三

これが本則じや馬大師と云ふは達磨大師八世の法孫で臨濟大師四世の祖にあたる諱を道一と云て容貌奇異  
 牛行虎視、舌を引けば鼻を過ぐとある餘程様子の變つた人で有たと見える後に大寂禪師と云ふ證號もある  
 けれども平生は馬祖とばかり云ふたり馬大師と云ふたりして居るサ、其馬大師の門下の一人が四句を離れ

百非を絶し請ふ師祖師西來意を直指せよと問ひ掛けた四句と云ふ一と異と有と無との四字で例へば迷と悟  
 が一つである云ふのが一句、迷と悟を異つてると云ふのが一句、迷も悟も有ると云ふのが一句、迷も悟  
 も無いと云ふのが一句、これで四句になる是れは都てのどに掛けてコウ云ふ上合に研究して見る法じや然  
 るに此四句の中の一句一句に又各々四句がある、例へば一と云ふ上にも一と非一と亦非一と云ふ四  
 句があり異と云ふ上にも異と非異も亦異と亦非異と云ふ四句がある有にも無にも其通りであるから四々十  
 六句に成る其れを過去と未來と現在との三世に掛ければ四十八句に成て更に又其れを已起と未起との二つ  
 に掛ければ九十六に成り其れに本の四句を加へたので百非と云ふのじや佛教の専門語には斯のやうな勘定  
 の仕方て仰山らしいことを言ふたのが幾らもあるが斯んな數學の問題のやうなことはドウでも好い要する  
 所は何とも言ふて見やう様のないのを四句を離れ百非を絶すると云ふのよ、四句を離れ百非を絶して祖師  
 西來意を直接に指示して下さいと云ふたのじや、口を開かず舌を動かさず祖師西來意のお説を成された  
 と云ふ注文であるが、元來祖師西來意は四句百非を離れたものぞ、祖師西來意と云ふは達磨大師が西域の  
 天竺から東土の支那へ何をしに來たので有るか其料簡方を聞きたいと云ふのじやこれは實に人々各自に  
 深く參究せねば成らぬ大問題じや、達磨大師が遙々と海を渡り山を越えて天竺から支那へ西來して梁の武  
 帝を蹴くり返し少林山で九年面壁、コレ一鉢ドウしたとぞ其れが本統に合點が往て達磨と手を取て同道唱  
 和するとさへ出來れば參學の能事は畢るのじや、然るに其れは四句だの百非だのと口を叩いても舌を爛ら

かしても往けることでは無い、元來祖師西來意は四句を離れ百非を絶して居る、其れを此質問に出掛た僧が鬼の頸でも取たやうに思ふて仰山らしく四句を離れ百非を絶して請ふ師祖師西來意を直指せよと問ひ掛けた、餘程難問の積りて有たらうけれども、馬大師は一向平氣で我れ今日勞倦せり汝が爲めに説くこと能はずと言はれた此僧が耳の垢の除けた奴て有たらう、で直にハ、祖師西來意は元來四句百非を離れたものじゃ、彼れの此れのと説くべきものではないと云ふことが直に悟れねば成らんのだけれども何だか分りそうが無いに依て更に智藏に問取し去れと言はれた智藏と云ふは西堂の智藏禪師と云ふて馬大師の高弟の一人じゃ其智藏に問ふて見ると受はれた、元來祖師西來意は他人に問ふべきことでは無い、又他人に説いて聞かせべきことでも無いから、勞倦と云ふに事寄て汝が爲め説かぬと言はれたので事は済んで居るのに依て門前の馬糞にでも問ふて見ると言ふた所であるが馬大師は此序に智藏を試験するが考へて有たものと見える、然し此問ふた僧に眼が有たらうモ、他人に向て問ふべきでは無いけれども氣の毒なことに此僧は皮の下に血が一滴も無い、ノコノコ智藏の處へ往て又四句を離れ百非を絶して請ふ師祖師西來意を直接せよと問ふた、ところがサスガに馬祖の高弟じゃ馬祖の云ふたのと寸分も違はぬ、何ぞ和尚に問はざると言ふた、和尚と云ふは馬祖を指したので、馬祖は己に問ふよりも智藏に問へと言ふたが、智藏も亦た己に問ふよりは和尚に問へと言ふた、然るに此僧のよゝゝ狼狽して和尚教へて來り問はしむと有り底に白狀した、ソッて智藏は、我今日頭痛汝が爲めに説くこと能はず、師匠の勞倦が弟子に傳染して頭痛と

爲つたぞ、とにかく説くべき口は無い、モ、其れで好からうに海兄に問取し去れと言ふたアソバイ、如何に同道唱和じゃからとて、あまりに同一轍のやりかたじゃ、海兄と云はれたのは百丈の懷海禪師と申して即ち臨濟大師の法の祖父じゃ、年は智藏よりも七五ほど多かつたと云ふが、同窓の友て俱々に馬祖に參じて居られた時のことじゃ、此僧中々御苦勞な男で又百丈の處へ往て例の通りに問ふた、ところが今度は我れ這裡に到て却て不會と取て擲げた、私もソノのところは一向合點の往かんのじゃと云ふたのじゃ、達磨大師が梁の武帝に向て不識とハ、子除けたのと同じ筆法ぞ、馬祖は勞倦、智藏は頭痛、丈は不會、豆腐が白くて炭團が黒い、大抵相場は極つたもので、此僧これでも未だ分らん、馬祖の處へ戻つて往て一部始終を復命した、ソッて大師の品評が有り難い、藏頭は白く海頭は黒し、いかにも御慈悲の深いことで、此僧の爲めに御飯を咀んでク、めて下さる、智藏の頭は白くて懷海の頭は黒いぞと言はれた一言、實に是れ四句を離れた百非を絶して祖師西來意を説き盡して餘蘊は無が、謂ゆる他人の殻中に落ちて句下に死在しては、一向自分の分が無い、此僧到頭悟れなんだものと見ゆる、此僧のとは昔の話じゃ即今諸君はドウ合點したぞ、藏頭は白し海頭は黒し、猫の鼻は冷たくて猿の鼻は赤い、眉は眼の上にて口は鼻の下に在るぞ、是れから萬松の着睡を讀て見よう、問話の下に若し這の僧の問頭を講らば人の多少の心力を省かん、コレは其れに違ひない若し此の僧が問ひ掛けた通り四句を離れ百非を絶して祖師西來意畢竟如何と參究し來りて講得する所さへ有たら一切衆生の心力を勞する所は無い、馬祖の答の不能爲汝説の下に己に船中の



月あり、船の中には月が十分にさし込で言ふに言はれぬ風景じや、コレで悟れんでドウするぞ、其上に問取智藏去の下に更に帆上の風を添ふ、コレでもマ一だ合點が往かんか、僧問藏の下に却て人の處分を受く。この僧いかにも自由の利かんアテラへ往けのコチラへ往けのど人の指圖ばかり受けて居るぞ、何不問和尚の下に好本多同、本と云ふは手本のことと好い手本であると同じやうに清書が出来る、師匠の馬祖と弟子の智藏に少しも違ふ所は無いぞ、教來問の下に甚鹽利、イヤハヤ御利口さまなことじやと呆れ果てたアンバイ、問取海兄去の下に我れ馬師の弟子と爲り得ざる可らず、師匠の馬祖が智藏に問取し去れと云ふたから弟子の智藏も弟子らしく師匠の通りに海兄に問取し去れと言はねば成るまいぞと云ふたので師資同道の様子を評したので有らう、問海の下に苦瓜に根に連なつて苦し愚な奴はドコまでも愚なもので苦瓜は根までも苦いやうであるぞと此僧を抑下しぬいた、却不會の下に甜瓜は滯に徹して甜し、甜い瓜はドコまでも甜いやうに馬祖の弟子たちは皆同じ味わひじや、舉似大師の下に草鞋錢を索取せよ、馬祖は智藏の所へ往けと云ひ智藏は海兄の所へ往けと云ひサテ又今度は馬祖の所へ戻つて往く往たり來たり中々御苦勞じや、草鞋代でも貰ふが好いぞと冷かして結局佛法は他人に問ふて歩くべきものでは無いぞと云ふことを示された、海頭黒の下に更に參せよ三十年、コ、が工夫の仕どころぞ勿卒に看過しては成らん、到底一朝一夕の沙汰では無いぞと誠に親切な勸戒じや、

次に宏智の頌であるがイツものよりも長いので、あまり長談義に成るやうであるから頌だけは此次まで

御預りに致しておきます

第七則 藥山陞座

今回は從容録の第七則で藥山陞座と申す公案であります例の如く先づ萬松老人の垂示その次に本則の公案その次に宏智古佛の頌じや

示衆云。眼耳鼻舌。各有一能。眉毛在上。士農工商各販一務。拙者常閑。本分宗師。如何施設。

萬松の垂示は駢麗隔對の語が多い眼には色を見ると云ふ能が有り耳には聲を聞くと云ふ能があり鼻には香を嗅ぐと云ふ能が有り舌には味を嘗めると云ふ能があるイヤ其ればがりでは有るまい月には照ると云ふ能が有り風には吹くと云ふ能が有る虚空にはドンな能があるぞ彼の虚空と同じやうなヤツは眉毛じや雙々相對して眼耳鼻舌の上位に兀坐し見るでも無ければ聞くがも無い一眸彼れは何者ぞ虚空に問ふたら知れるで有らうサテ吾々人間の有様も其通りで士農工商の〴〵其職分がある士は忠節を勵み農は耕して物を産し工は物を製し商は物を通ザイツレも安閑として居る者は無いが其中に何の藝もなく彼の眉毛のやうな者が居る其れを萬松は拙者と名けた成るほど何も藝が無いから拙者に違ひあるまいけれども孔子は之を聖人と名けた彼の堯帝や舜帝は何もせずして手を拱ぬいたまゝ天下が自然に治まつたと云ふことじや其實は

巧だの拙だのと云ふ論量を絶した者であるけれども大巧は拙の如くと云ふから拙と云ふても好からう洞山  
大師は愚の如く魯の如しと云ふたから愚者と云ふても魯者と云ふても好いと見える箇様な類は彼の虚空と  
同じ様に常に閑静であると云ふことじや其れはソウとして今祖師門下の本分を明らかにした宗師はドウすると  
云ふのじや眼のやうにパチクリするか鼻のやうにヒョクカ但しは眉毛の如くに安閑として居るか畢竟  
ドウしたもので有らうぞドウじやコウじやウロタヘルには及ぶまい人々各自に本分が有らうぞ何も殊更  
に眉毛の眞似をするには及ぶまい虚空の眞似をするにも及ぶまい薬山大師はドウしたぞ

擧。薬山久不陞座。院主白云。大衆久思示誨。請和尚爲衆說法。山令打鍾。衆方集。山陞  
座。良久便下座。皈方丈。主隨後問。和尚適來許爲衆說法。云何不垂一言。山云。經有經  
師。論有論師。爭怪得老僧。

薬山の惟儼大師と云ふは達磨九世の法孫で洞山の祖父にあたる唐の大歴八年に出家して大和八年に八十四  
で遷化せられたとある宋の歐陽永叔の文に「釋儼惟文集序」と云ふものがあるがアレが果して此大師の文集で  
有たれば文學にも餘程長ぜられたものと見えるが今わが日本には其の文集も傳はつては居らぬけれども  
彼の「寶鏡三昧」と題する一篇の長句は或は此の薬山の作では有るまいかと云ふ説もある其れはトニカクに  
此老僧つねに彼の虚空の如く眉毛の如く堯の舜の如く拙者の如く安閑として久しく陞座せぬ陞座と云ふは  
上堂と云ふも同じことて人の師たる者が法堂の高座に陞り弟子等の爲めに教誨をいたして弟子等に疑ひが

有れば質問をするソコで其れ／＼に答辯をもして聞せる其れを禪宗の問答とも云ふので有るが薬山老僧近  
來頃と居間へ引込んだきりで少しも大衆に何も言ふて聞かせんソコで院主と云ふは今では監院と云ふたり  
鑑寺と云ふたりする役目の人で大衆の頭に成て世話をして居ることて有るから或る時薬山大師の居間へ往  
て申しあげた大衆久しく示誨を思ふ請ふ和尚衆の爲に說法したまへ誠にハヤ久しい間何も承まはりません  
ので何ぞ御教示を願ひたいと申すことて御座いますからドウぞ一同の爲めに何なりともお説き聞かせを願  
ひたう存じます山鐘を打たしむソウかへ其れじや鐘を撞かせて皆な集めるが好いと云ふ指示であるからゴ  
ン／＼鐘を撞くと大衆一同に久しぶりて今日は何ぞ耳新しい高尚な愉快な又は有難いお話でも有るて  
有らうと云ふので西瓜舟が着たやうだと云ふ譬の如くソロ／＼と坊さんだちが法堂へ集まつたソコで薬山  
大師は例の如くに高座へ陞られたに依て何か言はれるで有らうドンなどを言ひ出されるかと一同に耳を澄  
まして居たがウンともスンとも言はないで良久して便ち下座し方丈に歸る良久はヤ、ヒサシと云ふ字で暫  
時黙つて居られたがヤがてサツサと高座から下りてノコノコ方丈すなはち自分の居間へ歸つて往かれた一  
同狐につまゝれたやうな面をして居たが院主は發起人であるから責任があるとでも云ふわけか大師の後に  
尾いて方丈へ往て理屈を言ふた和尚適來衆の爲めに說法することを許す云何ぞ一言を垂れざる適來と云ふ  
はサキカラと云ふことじや尊師は先刻大衆の爲めに說法して聞せるに依て鐘を撞て集めると仰せられたで  
は御座いませんか然るにナゼ一言も話してお聞せなさんで黙つてお歸りに成たので御座いませんと云ふた

藥山老僧これに答へて何と云ふて有らうぞ一向平氣なものじゃ經に經師あり論に論師あり争てか老僧を怪み得てん大衆が何ぞ講釋でも聞たいと云ふので有るか經の講釋なら經師と云ふものが有る論の講釋なら論師と云ふものが有る老僧は經師でも論師でも無いぞ經師でも論師でも無い老僧が何ぞ講釋せんからとて少しも不思議なことは無いで無いかと言はれたコレは一鉢にドウした事であらうぞ元來大地に衆生なしと云ふた人もあるがモトく生死もなければ涅槃も無い説くべき法も無ければ度すべき衆生も無いに依て陞座する必要も無いのであるが院主初め一同に久しく示誨を思ふと云ふのが抑々氣の毒千萬な連中じゃ然し箇様な連中には何事も事實に顯はして見せんければ得心のゆくまいと云ふので無説の説法の儀式を示して鐘を打せたり衆を集めたりツサく高座にまで陞つて見せてソコで良久下座と云ふ説法をして聞せ良久と云ふ説法はコレは如何なる法門て有らうぞ顯教か密教か頓教か漸教か大乘か小乗か人々各自にトツクリと能く聞て見るが好い此のやうな有り難い法門はメツタに聞かれないと云ふことも知らずにソノ後から尾て來て云何ぞ一言を垂れざるなどは何事ぞ藥山もコレには呆れたので有らうけれどもソコが慈悲心の深いもので經に經師あり論に論師あり争でか老僧を怪み得てんとは實に婆心片々たることで有るが院主を初め大衆一同これでもマダ雙の如く陞の如くで一人も有り難いお説法を拜聴いたしまして感謝に堪へませんと云ふて禮拜した者も無かつたと見える今も昔も言句にばかり付き廻つて無説の説を無聞に聞き得る者は少いと云ふ評判じやサー諸君はドウ聞たぞ一鉢に藥山は經に經師あり論に論師ありと言はれたが藥山は

畢竟何師で有らう藥山はサモアラばアレ諸君は一鉢に何師じやと自ら思ふぞ眼か耳か鼻か舌か將た眉毛か睫毛か抑々月か花か虚空か大地か人々各自に脚下を點檢し來つて其本分を全たうせれば成るまい安智古佛は何と言はれたぞ

癡兒刻意止啼錢。良駒追風顧影鞭。雲掃長空巢月鶴。寒清入骨不成眼。

第一句は院主を初め大衆一同が言説の説法を求め有様を言ふたのじや痴兒は字の如く智慧の無い小兒輩よ意を刻むと云ふは心配することじや止啼錢は「涅槃經」の嬰兒行品に説て有る譬で小兒が啼て何ぞ欲しがるときと親が之をダマカシて木の葉の黄色に成たのをコレは錢であるぞと云ふて與へれば小兒はソレ啼が止る佛の説法も其やうなわけで元來一法も與ふべきものは無いけれど已むを得ずして迷悟だの凡聖だの頓漸だの顯密だのと云ふて説法をして聞せるまでのものじやとある今藥山老漢が已むを得ずして鐘を打せたり陞座良久したりするのも其れよ然るに院主等が頓と分らんに就て思ひ出したは外道問佛の公案じや昔し一人の外道の徒が有て釋尊に問答をしかけて有言を問はず無言を問はずと云ふた妙な問かたもあるものて問はないと云ふのが即ち問じや其時に釋尊が良久せられたとある何とも詞には發せられなんだと見える然るに其外道は直に禮拜して世尊大慈大悲吾が迷雲を開きて我をして得入せしめたまふと云ふて感謝した阿難は之を見て何の事も分らなんだからアレはドウしたので御座いまするかと釋尊にお問ひ申し上げた時に釋尊がアレは世の良馬の鞭影を見て行くが如しと抑せられたと有るが然るに今藥山門下の院主等は彼の外

道にも及ばぬかと歎息せられた氣味が見える此句に良駒とあるのは只良馬こと云ふだけのと有らう追風と云ふは秦の始皇の愛した馬の名であると云ふことじや然し今コ、では風を追ふと讀で馬の走る形容と見て置ても好からうソコで第三第四の二句は藥山大師を讚歎したので畢竟寒清と云ふ二字が句眼じや如何にも寒夜の月の片雲點鶴もなく冴えゆくやうな有様ぞと云ふので其も相手に雲か掃ふとか鶴か巢ふとか云て形容したものじやコウ云ふ句は理屈を考へて居らずに聲ほがらかに吟じて見るが好い「雲長空を掃つて月に巢くふ鶴寒清骨に入て眠りを成さす」故人行誠和尚の歌にも「何をかは照せるものと冬の夜の嵐しのあと吹き降りじや然るに暫時の間にならりと晴れて一天雲なく成たとき大空高く澄み渡つて皎々と照り輝やく一輪の明月はドウじヤアレは一體にドウ云ふ料簡で何を照して居るので有らうぞと問ふて見やうかと云ふ歌じや藥山大師の無言の説法果して如何と聞いたならば寒夜の月に相談をして見るが好い本則にも頌にも萬松の着語があるけれどもマーおあづかりにして置きまじやう

# 禪宗史要

## 目次

### 總論

- 第一、榮西禪師以前の禪宗……………九
- 第二、臨濟曹洞兩宗開立の時代……………一五
- 第三、鎌倉中心時代……………二六
- 第四、京都中心の時代……………三三
- 第五、地方傳播の時代……………五四
- 第六、黃檗開立の時代……………六二
- 第七、三宗持續の時代……………六八

# 禪宗史要

鷺尾順敬述

(文挾廣文速記)

## 總論

日本の禪宗の歴史を講ずる筈であります、約束の期日が僅に一週間であるから、如何に大要でも、かゝる短期日に講じようことは大に困難であります、嘗に時間が十分でないばかりでない、智識も亦十分でないから、到底諸君の満足を求むることは出来ない次第であります、此點は豫め諸君にお断りをしておきます、最初は禪宗の歴史のある一部分を講じ様かとも思ひました、日本佛教史の黄金時代とも云はるゝ鎌倉時代に禪宗の興隆した状況とか、日本禪宗史の中心で、尤も興味のある京都の五山が興隆した状況とか云ふ様な部分を取り出して講じ様かとも思ひましたが、いろ／＼事實が込入りても亦興味がなからうから、なるべく全体に通して大要を講ずる方がよからうとのこと、遂に不十分ながら禪宗開立の初から七百餘年に亘る沿革の大勢をザット講ずる積りでありますが、其分明的でないところは、相共に研究を願いたい次第であります、

先づ初めに總論の様なことを話しましやう、日本の佛教史上で禪宗は如何様の位地を保て居るかを觀察する

ことが、最初の必要である、それは私の觀察する所では、日本の佛教史の上に於て、禪宗は大に重要な位地を保て居る、それは鎌倉時代に於ける佛教の興隆した有様より觀察しなければならぬ、佛教史の黄金時代とも云ふべき時代は奈良朝でもない、平安朝でもない、實に鎌倉時代の初期である、日本佛教史の大要を心得て居るものは十分了解してゐるであらうが、奈良朝平安朝の佛教は、現世利益の祈禱である、即ち平安朝に於ける天台眞言は共に、現世利益の祈禱で盛大を極めたものである、固より傳教大師の開かれたる天台宗并に弘法大師の開かれたる眞言宗には高尚なる教理があるのであるが、是等の宗旨が平安朝に盛大を極めた所以は、高尚なる教理に關係はない、所謂台密東密の事相で現世利益の祈禱が大流行したものである、即ち平安朝三百九十餘年間を通して佛教の勢力は現世利益の祈禱にあるので、當時の歴史に依れば大は一國から小は一身の事柄に至り吉凶禍福凡べての運命は皆祈禱で決せられて居る、夫等の事柄は佛教の歴史を見るよりも、當時の記録等を見れば明らかである、祈禱の法には息災増益と云ふ二法があつて、早魃であるとか、長く雨が降り續くとか、國に盜賊が起るとか、凡べてソ一云様な禍を除けるとか云ふ時には息災法を用いて祈禱をなす、或は立派な官位が欲しいとか何か一の望みを立てたいとか云ふのは増益法を用ゐて祈禱すると云ふ様に、凡べて何にもかも御祈禱を熱心に遣て居たもので、當時の朝廷は護摩の烟で燻つたと云ふほどである、そこで其當時の朝廷も人民も現世利益の祈禱に依つて皆利益を求め幸福を願ふことに狂奔して居つたが、其の結果は平安朝末に於ける騷亂となつたわけであらう、平安朝末の騷亂は我國の歴史上前古未曾有の慘憺たる

修羅場を現出したもので父子相争ひ兄弟相闘ひ何とも言ふに忍びざる状況である、今日までの歴史家が箇様の騷亂の由來するところを深く究明しない様であるが全く平安朝に現世利益の祈禱に心酔して相競うて富貴利達を求め様とした弊害であらうと思ふ實に恐るべき次第である、然しながら個様な状況に陥つたのが、一方より見れば鎌倉幕府の初め宗教思想の勃興した大原動力であらうと思ふ、所謂失敗の最後は成功である、平安朝の佛教は當時上下舉つて現世利益の祈禱に心酔して富貴利達を求むることに狂奔した結果がアー云修羅場を現出したといふ失敗に終つた、所が當時其慘憺たる修羅場の状況に對して大に宗教思想を發揚したのである、されば鎌倉時代の佛教の勃興した所以は平安朝末に於ける騷亂より來る所の産物である、その平安朝末の佛教の廢頽は如何と云ふに、天台は悪者の暴横に破れ眞言は愚僧の迷信に毀れた、全く平安朝の佛教は愚僧と愚僧とによりて破毀せられたのである(當時代の有様を一す例して見ると農民などが田畑に肥料を施すよりも大般若經でも讀んで田畑を廻れば非常に能く作物が出来るなど云様なことが有つた)箇様に平安朝末程廢頽落した時はないが、然しながら鎌倉幕府時代程佛教が勃興した時はない、即ち鎌倉幕府の初に當て浄土禪等の新宗教が相競うて起り燦然として光明を放つた、我が國の佛教歴史上三論法相天台眞言等の宗旨が有ても、此浄土禪がなかならば誠に落窺たるものであらうと思ふ、是等の宗旨がないとすれば、我が國の佛教歴史上に中心主腦がないことになる、鎌倉幕府に於ける佛教は僧位僧官に依て興たものでもなく、寺格寺録に依て興たものでもない、全く信仰道念の發現に依て奮興したものである、是等の宗旨の開山は流離顛沛の間に艱辛

苦を嘗めて自分の信仰を發揮したのである、是等の宗旨の勃興したのは、即ち我國の宗教思想の一大發達したる初めてである、それで其宗教思想の勃興した傾向を見ると二ツに分れて居る、一は客觀的發達をしたのが淨土教の形骸を以て現れて居る二は主觀的發達をしたものが禪宗の形骸を以て現れて居ると思ひます、固より佛教歴史の上より云へば淨土教が起り禪宗が傳たと云ふまでいあるが、淨土教が偶然に起り禪宗が偶然に傳つた譯ではない、其の裏面を觀察すれば我國の宗教思想が二様の形骸を以て現れたものと云ふてよからう、實際佛教歴史の研究は箇様の點に意を用ゐねばならぬものである、日本の社會の現象を考えて見ても、佛教が這入て社會の一隅に孤立してゐたのではない、日本國民の思想の中に流動浸染して種々の方面に佛教思想が入り涉たのである、夫故に佛教歴史を研究する者が、唯佛教の何宗が起り何宗が傳つたと云ふ位では研究の目的か達せられたものでない、實際國民の宗教思想が如何様の影響を受け如何様の變遷をしたか大に辯明せねばならぬので、淨土教が起り禪宗が起ると云ふ其裏面を觀察すれば我國の宗教思想の顯現發達で、一は淨土教となり他の一は禪宗となつたものと見てよい、イヤ禪宗はソナナ者でない、印度から支那日本と脈々相傳したもので日本人の頭から割出た者でないと思へる人もあらうが、其れは唯書物の上の空論で實際を觀察しない話であらうと思ふ、宗教思想と云ふものは日本人の頭腦の中より發現したのである、それでなければ宗教は社會に於ける勢力とは成らない、例せば耶蘇教が日本に來たばかりでは何にも成らん、全く日本人の頭に鎔化して仕舞つて日本人の頭から出たのでなければ勢力には成らん、其れと同じく今佛教も或人の云ふ如く印度支那

から船で持て來て傳へたと云だけでは何にも成らん、日本人の思想の上に發現した所の一勢力でなければならぬ、されば全く日本人の思想の上に發現した所の一大現象と解釋して宜しい、それでなければ日本の思想の上に活動したとは云へない、個様に觀察すれば日本の佛教史に於て禪宗は大なる位地を持つて居るのである、前に云ふ通り我國の宗教思想が主觀的の傾向を取て現れたものが禪宗の興隆で、客觀的の傾向を取て現れたのである淨土教であるが、其後の變遷は如何であらう、寧ろ兩方から接近して禪宗が客觀的に淨土教が主觀的に傾ひて來た様に見えるが、これは大いに注意すべきことである、兎に角個様の工合に解釋して、日本に於ける禪宗の位地を觀察しなければならぬと思ふ、

夫れから次に、日本の文明史の上に禪宗は如何なる地位を保つて居るか、是亦重要な問題である、禪宗は文學美術等の上に關係して居る所は實に著大である、それは種々の方面から種々の事實を綜合して話さねばならぬが、こゝには只重なる事實を挙げやう、先づ我國文學の上に就て言へば大抵支那から來て居るもので全く日本文學は支那文學を離れてない、それで支那文學には唐代文學宋代文學に分つことが出来る、平安朝の文學は唐代文學で三百九十餘年の間は唐代の文學が盛であつた、唐代には支那哲學は見へない佛教の方に哲學がある、それで平安朝の支那文學は實にツマラン詩も文も盛に行はれて居るけれども、詩は唯白樂天を手本として極卑俗な詩を作て居る、彼の菅相丞などは澤山に詩を作て居るが一向興味がない様である、其他幾人も詩人はあるが何れも皆和歌を直譯した様なものである、文章と云へば對句見た様なものを拵らへて氣張つて居る

けれども、一向趣味がない、弘法大師は王昌齡の詩を持つて歸つたが、其詩には一向其様の風が見えぬ様である、文も六朝風の文字を陳列しただけである、夫れ位であるから平安朝の文學は殆ど失敗に終て居る、其次には宋文學であるが、宋文學を傳へたのは禪僧である、即ち鎌倉の時代から室町の時代にかけて盛に文學を輸入した、それは一として禪僧の力に依らんものはない、それで禪僧は單に機械的に傳へた譯ではない、五山の僧侶は皆支那文學者である、それで五山の禪僧の詩文は大に成功して居る、支那の大家も大に驚く位である、全く平安朝の失敗に終た後に鎌倉室町時代には成功して居る、詩でも文でも一家をなして居る者はいくらかつたならば、今日西洋の文學が這入ても到底消化する事は出来なかつたと思ふ、然るに容易に西洋の文學を今日消化することも出来ると云ふのも徳川時代に文運を開いて居たからである、其根本の動力と云ふのは禪僧で、鎌倉室町時代に禪僧が支那文學を消化したる力である、尤もそれは禪僧が支那文學を主として弘めたと云ふ譯ではないが、それは禪宗に附帶して傳つたのでツマリ禪僧の力である、文學では詩文に係らず謠曲のごときも全く禪僧の手で成つて居る、謠曲は支那の戯曲を翻案したもので、其初は禪僧の手に出たものである、しかし是等の事柄は一々説明する邊はない、それで我國の文學は唐代文學宋代文學と分れて、唐代文學は失敗に終り、宋代文學は大いに成功して居る、其

成功の結果は徳川時代の文運を開いて居ると云ふ上から觀察すれば、日本の文明史に於て禪宗が如何なる地位を保て居るかは、事々敷説かなくとも解ることであらう、

次に話したいことは美術の上である、我國の美術は皆佛教美術である、佛教美術以外に日本の美術はないと云てもよい、而して佛教美術を二つに分つことが出来ると思ふ、即ち一は密宗(眞言宗)美術で、二は禪宗美術である、密宗美術は奈良平安朝に盛で、當時の美術は、多く佛像で密教の儀軌に依て彫刻し或は圖畫したものである、此佛像を何の爲めに彫刻し、或は圖畫したものであるかと云ふに全く祈禱の爲めである、夫故平安朝の美術は密宗美術ばかりと云てよからう、次に禪宗美術は何であるかと云ふと別に佛像には限らん、種々なる彫刻圖畫等である、密宗美術と禪宗美術とを分り易く云へば、禪宗美術は自然界に重きを置きそれから密宗美術は人事界に重きを置いた様である世間で日本は美術觀念に富んで居ると云ふが如何様の意味かと云ふに、草木に對し山水に對して自ら一種の美妙の感に打たるゝが、是等は西洋人にも有るけれども、日本人は西洋人より勝て居る様である、ソユア日本を美術國と評するが即ち車夫馬丁の様な社會まで植木鉢などを椽先に置て樂むと云ふ風が有るが、實に日本人は自然界の趣味を感じることは西洋人より余程進で居る様である、一寸月を見て何にも知らぬ者でも一句詠じたいと云ふ様な思想を持て居る、個様の美術思想は一舛如何様にして養はれる者であらうか、これは固より大なる問題ではあるが、私は禪宗の感化力大に關係してゐるものと解釋してよからうと思ふ、それは平安朝時代に於ける美術品に就いて當時自然界に對して如何様の趣味を感じて居



るかと云ふとを調べて見れば思ひ當ることがある、平安朝時代に於ける繪畫に山水の景は極めて少い様である、有名な山水の屏風は珍物として傳つて居る、繪卷物に山水の景があるも興味も何もない様で旅行の圖等で便宜上地理的に書いたものである、其れて繪卷物は大半人事界のことを寫してゐる様である、所が鎌倉以後は自然界の繪畫が流行して草木山水を寫したものが多い、是は大いに注意すべき問題であらうと思ふ、それを今禪宗の教義の上から云へば、花に對しても月に對しても一木一草悉く法門を説くと云ふ興味があるのであるから、自然界は一々法門を説いて居る、皆活きて働らいて居るものと觀察して居る、此觀察は即ち禪宗が日本人に美術思想を發現したる一大動機であらうと思ふ、それで鎌倉時代以後に於ては禪宗の高僧で雪舟とか雪村とか云ふは盛に繪をかいたものである、一番古い所では寧ろ山などの簡單な一筆畫にも無量の趣味がある、凡べて是等の趣味ある思想を興へたは、元より日本は風景もよし氣候もよい境遇であるからであらうが、然しなから其境遇に接して個様の思想を發揮したは、禪宗が我國の思想界に興へた力が極めて大であらうと思ふ、是等は一々證據立つることが出來様と思ふ、

美術に關して説くべき事柄は澤山あらう、園景などもその一である、園景即ち庭造りは禪宗の無窓國師が始めたので、室町の時代に園景が出來たのであるも自然界に對する趣味である、平安朝時代に於ては山水に對する觀念は僅に修行の道場即ち苦行する所であると思ふてゐた位であつた、それが鎌倉以後に至て自然界に對する觀念が一變した、即ち平安朝は密宗の思想、鎌倉時代は禪宗の思想、此二の思想は自然界に對する觀念に就て

も其區別は判然分れてあると思ふ、今日日本人が西洋から美術國として稱賛せらるゝと云ふのは、最初禪宗が津々浦々迄禪宗趣味の思想を注入した結果として、日本人が自然界に對して種々の趣味を感じて來たものと判斷して宜しいと思ふ、少くとも禪宗が興へた力が極めて大であらうと思ふ、

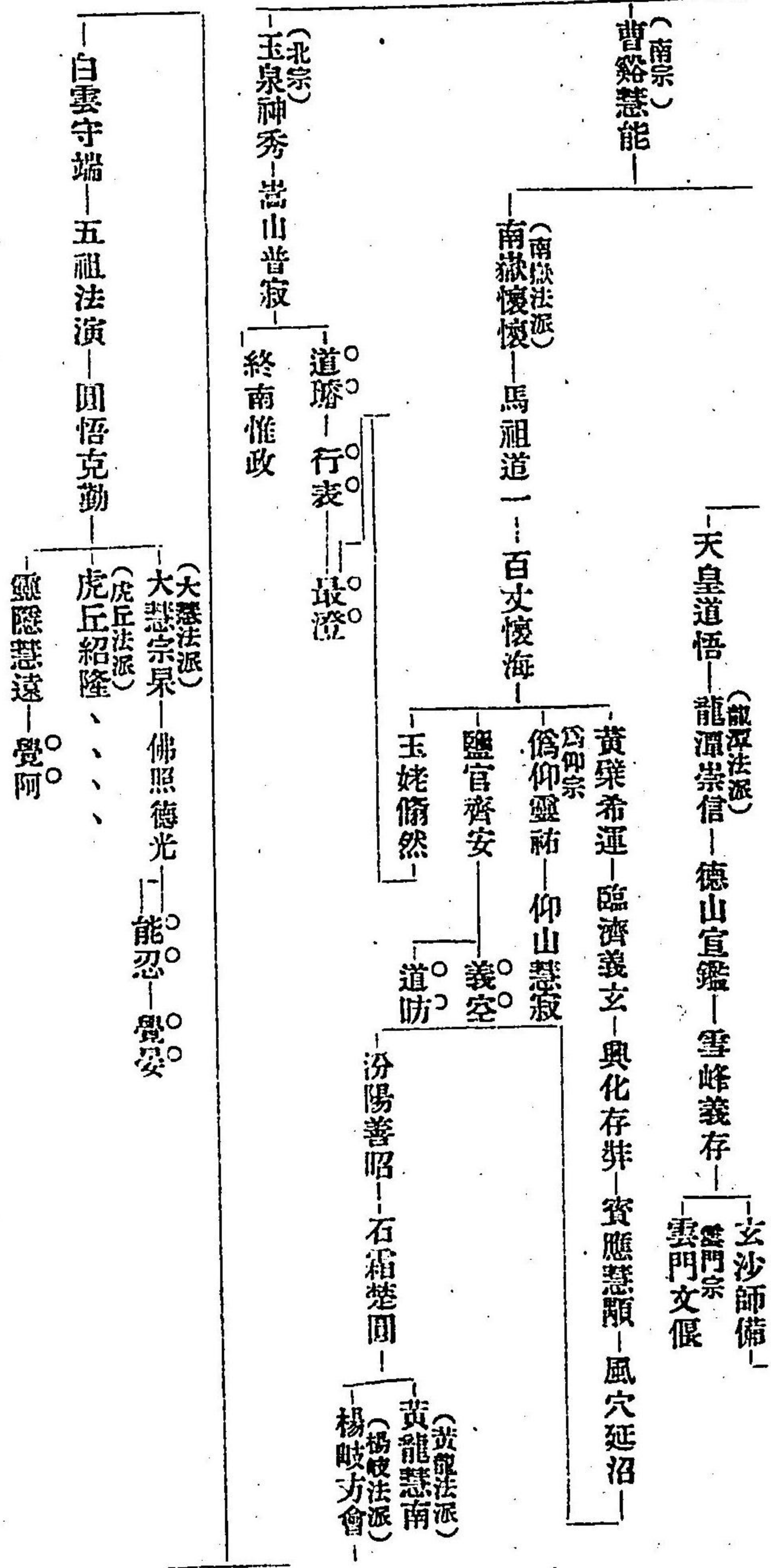
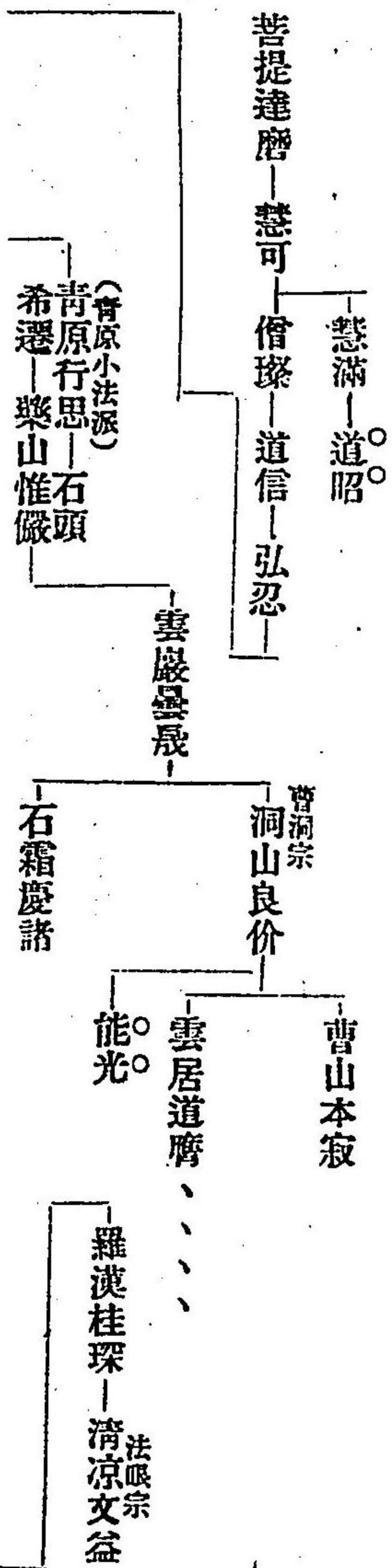
私は以上の事柄を綜合すれば、禪宗が日本の文明史の上に如何程の影響を興へたか、如何様の位地を持て居るか、それは略ぼ明了であらうと思ふ、先づ是は發端として聊か辨じた次第で、文學美術等は私の専門でないから考の至らない所があらうから猶ほ諸君の考察を願ひたい、

#### 第一、榮西禪師以前の禪宗

これから日本禪宗の起原を説かんに、元享釋書にも開卷第一に達磨が日本へ來て禪宗を傳へたことが掲げてある、其他禪宗の書物に屢々此事が見える、即ち推古帝の二十一年に菩提達磨が渡來して大和の片岡山に於て聖德太子に逢ふたと云ふとが傳つてあるが是は聖德太子が片岡山の近邊を御歩るきになつた時に一人の乞食が飢饉に迫つて居るのを御覽なされたと云ふとは事實で、日本書記にも出てある、然るに其乞食を達磨と解釋したのは道理のないとであるが、茲に一ツ面白い話しは、達磨が支那に於て熊耳山に葬られた後門人が穴を開いて見たら棺の中に履が片方あつたと云ふとが傳にある聖德太子が片岡山にて御覽なつた乞食の事が一寸類似てある、乞食は死んで仕舞たので、その死骸を埋めて後數日を経て其處を發いて見たれば、死骸は無く唯が棺の中に衣服が遺つたと云ふ話である、個様な話しは牽強相附會の出來の話して、達磨が日本へ渡來した

と云ふとは、全くそれから牽強附會した者と思ふがその起原を考えて見ると譯のない話である、この達磨が渡來したと云ふとは古く傳へてゐるとで平安朝の初めに出て居る傳教大師の高弟である別當大師光定の一心戒文と云ふ書に先きの乞食は蓋し達磨ならんと云ふてある本朝文粹の藤俊生奉賀村上天皇四十御算和歌序にも見えあるその後の書物には澤山に出て居る、即ち元享釋書にも初めに出て居る、室町時代には石碑を建て、それに達磨の來歴を記し其側に寺を建て、如何にも事實らしくなつた、然し個様の次第で全く事實でない、我國に達磨の法脈を傳へられた始めは聖德太子没後四十年で後世法相宗の第一祖と仰がれてゐる道昭法師が入唐して始めて禪宗を我國に傳へ其後戒律宗天台宗の高僧が傳へて居る、平安朝には禪宗の法脈は斷續して居つた、榮西禪師の禪を傳へる前は僅かに禪宗の法脈はチラ／＼と見えて居つた位である、それを是から述べるつもりですが、其前に榮西禪師以前に於ける禪宗の法系を示しませう、

◎榮西禪師以前の諸師の法系



此の圖は榮西禪師以前、即ち奈良平安朝時代に於て禪宗が日本に渡つた法系を示したものである、圖に圈點を附したるは、日本人で支那に航し或は支那人で日本に渡來して傳へたことを示したのである、即ち道昭道璿行表最澄義空道昉能忍覺晏等々は日本に禪を傳へた人である、其中道昭は禪を日本に傳へた最初の高僧である道

昭法師の傳は委しく説くとは出来ないが、白雉四年に入唐して慈恩寺の玄奘三藏に謁して法相宗を傳へられた、然し今から考えて見ると道昭法師は豫め十分梵漢の文字に通ずる便宜も得られなかつたであらうから、法相宗の如き面倒なる學問を玄奘三藏から受けるに就ては、大變に困難で、十分に其目的を達するとは出来なかつたであらう、玄奘三藏も其考を以て禪宗を傳ふる様すゝめられたわけであらうか、其指示により相州隆化寺の慧滿禪師を訪ひ禪を傳へられた、慧滿と云ふは二祖慧可の法系で極古い達摩の曾孫に當つて居る、道昭が日本へ歸つた年代は傳はつて居らぬ、然し種々なる考證に依つて見ると、齊明帝の六年に歸朝した様に考へます、是れ即ち我國の禪宗の傳はつた初めである、それから天智帝の元年三月大和の元興寺の東南隅に禪院を建て、此處に住して禪を修して居つた、是れ禪院建立の始めてある、文武帝四年に道昭法師はその禪院に於て遷化せられた、其後道昭の傳へた禪は絶えて居つたが、次に禪宗を傳へたは道璿律師である、律師は唐の許州の産で戒律宗の高僧である、日本では戒律宗の高僧として迎へられたが、禪宗は神秀禪師の法系の普寂禪師から傳へられた、即ち北宗の禪である、道昭はまだ南北と分れぬ前に禪を傳へられたが、道璿は分れた後に傳ふるに至つた、是れは道昭法師遷化の後三十五年で天平八年に日本に渡來して傳へられた、大和の大安寺の西唐院に住して梵網經を講せられたが、老後は専ら禪を修して居られたと云ふのである、其時代には全く禪宗の何たるかは分らぬ位であつたのであらう、道璿律師は天平寶字四年に遷化せられた、後其門下に行表と云ふがある、此人が道璿より北宗の禪を傳へられた、是れが傳教大師最澄の師匠である、高僧傳には行表の傳は簡單で

あるが、實は大變に高德であつて傳教大師最澄は、即ち近江の國分寺に居られた時に其下に感化せられたのである、行表の傳に就ては、元亨釋書本朝高僧傳等には極めて簡單で百四十歳の長壽を保たとあるが、これは間違である、行表の次は傳教大師最澄である、最澄の事跡に就ては世に明らかである故、委しくは説くまでもないが、初め行表から禪を傳へられた、其後延暦二十三年に入唐して天台を道邃行滿に受け、眞言を順曉に受け、禪を脩然に受けられた此の人、南嶽懷讓馬祖道一、百丈懷海祖々相承け懷海の下の人である、それで最澄は前後に南北兩宗共に傳へたことになつて居る、然し比叡山では圓密禪戒の四種相承と云ふが、其中の禪は北宗禪である、最澄の後慈覺大師圓仁智證大師圓珍等の高僧は皆禪宗を味つて居られた、圓仁は支那へ渡つて居士蕭慶中より禪を傳へられた、個様に比叡山に於ては世々の高僧が禪に意を用ひて居られた、殊に五大院の安然は常に坐禪をしたと傳られて居る、其次は最澄滅後十餘年にて義空が法弟道昉を率て渡來し禪を傳へられた、義空は百丈懷海の法系で鹽官齊安の高足で、始めて禪僧として日本に來たのである、これは嵯峨天皇の皇后、世に有名なる檀林皇后が深く三寶に歸依せられ、慧榮と云ふを唐に遣して高僧を請待せられたのである、慧榮は檀林皇后の令旨を奉して支那へ渡り鹽官齊安國師に謁して高僧を日本に遣して呉れと頼んだ、ソレ故に齊安國師は自分の高足義空を日本に遣すと云ふとで、此義空が檀林皇后の招聘に由て日本へ來たのである、義空は日本へ來て眞言宗の東寺の西院に居つて禪を修せられ、檀林皇后に謁して禮を説かれた、其時に皇后は檀林寺を建立して請待せられた然れども其時分は前にも話した通り、現世利益の佛教の盛なる時代にして、禪宗の

事は當時の人々の頭腦には分らない、義空は暫らくその寺に住して居つたが、どうも志を得ずして只檀林寺開山と云ふ空名を留めて支那へ歸つた故、又禪が絶えてしまつた、

義空禪師が西歸の後は禪に消息を失つたのであるが、恰も日本の延喜の頃、瓦屋能光と云ふが支那へ渡つて曹洞の禪を傳へた、これは大に注目すべきことであるが、此人は遂に日本へ歸らずして遷化せられた、それ故禪は益々絶えてしまつて、現世利益の祈禱ばかり益盛大になつて居つた、其後禪を再興せられたのは覺阿である、覺阿は比叡山の學僧であつて顯密の學問を研究して居つたが、支那の佛教が盛大なるを聞いて、奮然として遠遊の志を起し、承安元年に廿九歳で弟子を伴ふて入唐せられ、杭州に至り靈隱寺の慧遠禪師に就て禪を傳へられ、印可證明を得て比叡山に歸り庵室に籠りて禪を修せられた、然るに支那に渡つたことか聞へて道俗相傳へて法を聞かうとした、それは恰も高倉天皇の時代であつて、遂に宮中に召され公卿衆の前で禪を説しとを命ぜられた、所が覺阿は法衣の袖から笛を取り出して頻りに吹いて居られた、公卿衆は何の事であるが少しも譯が分らないで、只管法を説かれんことを乞うたが、覺阿は笛を吹きながら飄然として歸つて仕舞ひ、再び外出せられなかつたと云ふことである、個様な奇行があるが、覺阿は笛を吹く所が眞に禪の面目を説いて居たのかも知れぬ、然し其時代の公卿衆は大半暗愚であつたから個様の事は分るべき筈かない、覺阿の後は三寶寺の能忍である、この時代には餘程禪が注目されて來まして、彼處此處禪の事を口にする者がある様になつた、其時に顯れたのは大日能忍である、能忍は平氏で悪七兵衛景清の叔父なりと云ふ、顯密の教を究め殊に禪に

意を傾け、攝津の三寶寺に住して禪を修した自らその奥義を究めたと稱して居つた、然るに當時の人が三寶寺の能忍は師匠が無いと云て譏るものがあつたので遂に文治五年に支那へ弟子を遣して自分の所悟を書きて徳光禪師に呈し、證明を乞徳光禪師は大に感心して證明を附し道號法衣等を贈つた、ソレカラ大日能忍は自ら日本に於て禪を弘通するとを任し日本達磨宗と云ふ宗名を立て、三寶寺に住し日本達磨宗の開山と稱して弟子を教養しました一時門下が大に盛んであつた然るに惜いかな、能忍は其事業が出来ないで不意の災難で殺されてしまつた門下に佛地覺安と云ふがある覺安が大和の多武峯に住して、師匠の唱へた日本達磨宗の法燈を繼ぎ大に弘通に盡力せられたのである其下に懷鑿懷非懷照懷義等が出た皆覺安の門下である即ち佛地覺安が起つて以來達磨宗は大に興隆した然るに幾もなく多武峯は奈良興福寺の惡僧に焼き拂はれて仕舞つて覺安門下の諸弟子には四方に散亂して却て四方に禪宗を擧揚するとなつた、其頃に懷鑿懷非懷義等は北國に流浪して禪を弘通して居つた是れが曹洞宗の道元禪師が後に越前に下らるゝ遠き因縁になつたわけであらう、個様の次第で北國地方に禪が弘通せられた、此際に當り榮西禪師は支那から禪を傳へて歸朝せられたけれども、榮西の事業は京都に興さふとしたのであるから、北國の方の禪は皆田舎禪と云て譏りた、榮西は自ら勅命を請ふて日本の佛法を改革しやうと云考へて禪宗を唱導した同時に一方では懷鑿は私が説きたくてもなく遂に道元禪師の衣鉢を嗣ぐに至つたわけである個様の來歴であつて禪宗の興隆したのは、突然でないことが解かる、

## 第二臨濟曹洞兩宗開立の時代

後鳥羽帝の朝に榮西が臨濟の法脈を傳へて以來、後嵯峨帝の末年まで五十餘年間を假に稱して臨濟曹洞開立の時代とす前にも話した通り、平安朝末の佛教は全く廢頽墮落して、結局は即ち新佛教勃興の初めとなつた次第で、其新佛教と云ふは當時の宗教思想が二つの方面に現はれたのである、即ち淨土教と禪宗とである、淨土教を主張したのは法然上人で、禪宗を唱導したのは榮西禪師である、是等の宗旨は昔しから我國に傳つてある、然し法然上人が淨土教を唱へるに就て、決して天台眞言に附帶せる淨土教を興すとは云はず、自ら善導一師に依ると云うて當時に師承する所はなかつた、所が禪宗の方は大日能忍等の様に禪を口にするものはないけれども、榮西禪師は日本の土地に師承する所はなかつた、自ら支那に渡りて禪を傳へたので、從來日本に唱ふる所の禪を指して支那禪を傳へられた、これは歴史上から見れば、當時敗頽極る佛教に向て、法然上人の如きは歴史上より新要素を取つたもので、榮西禪師の如きは地理上より新要素を取つたものと云はねばならぬ、法然榮西はかゝる新要素を取りて敗頽墮落せる佛教界に投じ込んだものである、其後五十餘年の間は從來の舊宗天台眞言等と新宗（淨土禪日蓮等）との衝突である即ち今所謂臨濟曹洞開立時代と云ふのは舊宗新宗の衝突時代である、然らば如何に衝突し且つ衝突の結果、如何にして淨土禪等の新宗が興つたか是れを研究せねばならぬ、今は臨濟曹洞が如何様に開立せられたか、其狀況を説かねばならぬ、先づ初めに榮西の臨濟開立の事業である、榮西は初め比叡山に登り天台眞言の學問を研究して居つたが、支那に禪宗盛なるを聞きて仁安三年に入宋して天台山上つたが此行は唯天台の章疏を齎して東歸し再び比叡山に上りて學問を勵み文治

三年に重ねて入宋せられた、是れに比叡山に於て群籍を閲覽して昔し比叡山に禪宗を傳へたと云ふを見て、現に支那に禪の盛行してあるに思ひ合せ、支那へ渡りて禪を聞かうと云ふ考えを起された次第であらう、且つ其時には印度の方へも廻り釋迦の入塔をも瞻禮する積りであつたが、印度行きは其目的を果すことが出来なかつた、天台山の萬年寺に留り、黃龍派七世の法孫である彦庵懷敏禪師に就て禪を傳へ法信僧伽梨衣等を頂受して建久二年に歸朝せられた、これが正々堂々我國に臨濟禪の傳つた始めである、筑前の博多に留り聖福寺を開いて徐に一宗開立の經營をした、然るに其事が京都に聞へて比叡山の僧徒の怒る所となり、建久五年七月彼等の上奏により禪宗を停止せられ其後屢迫害に遭つた榮西が出家大綱を著して出家の本分を明にしたは暗に山僧の暴横を諷しめられた様である、然るに其後益々山僧の憎惡する所となつたので、榮西は如何に臨濟開立の事業を企てたかと云ふことは、其の著作と行實とに依て觀察することが出来る、著作に日本佛教中興願文と云ふのがある、それに依ると、十方の諸佛諸菩薩に誓て自ら日本佛教の再興を以て任して居る、榮西は決して諸宗の一隅に禪宗を別開する考へではなく、實に日本佛教の改革を企圖して居つたのである、その願文の意味に依ると佛法衰ふれば王法も衰へ佛法が興れば王法も興る、此の二つは恰も車の兩輪の如くであるから是非とも佛教を中興せねばならんと云ふ意味である、それから興禪護國論で極力禪宗を擧揚してゐる、興禪護國論は榮西の眞作でないといふ説もあるが榮西の言行の上から考へても個様の意見を持つてゐたとは確實であつて其眞作か否かを問ふ必要もなからうと思ふ一部の主意は佛法王法相關論でその所謂佛法は禪宗である佛

教の總府である禪を興すは即ち佛法を興すので、決して諸宗の間に一禪宗を別開するのではないと云ふ考で、盛に京都に於て主張した、然るに益々天台の山僧の反抗が激しくなつて、遂に榮西は京都に居ることの出来ないで、鎌倉に逃げて來て時の將軍頼家に依て、日本佛教の中興事業を果さうと思ふた、然るに鎌倉では頼家を始め禪と云ふとは少しも解らない、只入唐した高僧として尊敬をして居つた、正治元年九月初めて幕府の請を受けて不動尊供養の導師を勤められたことが見える榮西が鎌倉に於て歸依を受けたのは禪ではなくして祈禱であつたからである祈禱と云へば榮西は台密事相に通し葉上流を開いたほどである如實尼即ち政子は大に歸依して義朝の舊跡龜ヶ谷に壽福寺を建立して榮西を迎へた然し禪を聞くためではなく、矢張り祈禱供養のためである榮西の傳に依れば頼家が榮西に歸依して其本願で建仁二年に京都加茂川の岸に一大禪苑を建立し建仁寺と稱したとあるがそれは稍後の事であらう當時比叡山の下で其様の盛典が擧げらるゝ事情でない、且つ帝王編年紀に引用してある建仁寺の緣起に見ゆる様の次第ならば吾妻鑑に見えぬ筈はない建仁寺の建立は後年の事であらう此事は尙ほ其宗門の學者の考を伺ひたいです、それで前説した様な狀況で榮西禪師の禪宗興隆の事業は成就するに至らなかつた、即ち日本佛教中興願文與禪護國論の主意は事實にならなかつた建保元年榮西は自ら幕府に出頭して大師號の宣下を請ふた、是れは幕府に於ても一旦歸依したものであるから執奏しなければいけれども、生前に大師宣下の例がないから遂に却下せられた、其後權僧正の僧官を請ふて漸く許された等は事實であるが全く舊宗なる天台眞言等に對抗するに就いて勢力を作らうとし地位を得んとせられたのであ

る一方から見れば如何にも俗惡な様であるが當時對抗するに就ては止むを得なかつた次第である實に榮西は天台眞言等の妨害に對して如何に苦悶したかを知るに足るので換言すれば外的勢力を借りて天台眞言に對抗し様としたのである、然るに其事業は成就するに至らないで、建保三年六月五日壽福寺に於て遷化せられた、榮西の傳には建保三年七月に京都で遷化した様にあるは事實でない尤も後建仁寺へ遺骨を分つたことは事實である、是等の事實を綜合して考へて見ると榮西は全く苦悶の間に遷化せられたものである、個様に事業の成就するに至らなかつた譯は、全く天台眞言の勢力に對抗して勢力を得様としたからである、天台眞言等の國家的佛教の後を繼て矢張り國家的佛教として立たうとしたからである舊宗たる天台眞言の方では自分の位地を奪ひ取らるゝ様な心地で、極力榮西の事業を妨害し遂に鎌倉へ追拂つたのである、それで榮西は舊宗たる天台眞言に壓迫せられて事業も成就せず遷化せられたのである、是れ實に榮西が正面から舊宗に對抗したからであらう、かくして榮西は遷化せられたが、其事業は全く弟子に附屬して置かれたのである、其重なる弟子は榮朝行勇明全の三人で榮朝は上野世良田の長樂寺に行勇は鎌倉の壽福寺に居り、明全は京都の東山に居つた、榮西禪師遷化の後に於て、三人の弟子で二人は關東に居られ、一人は關西に居られた、榮朝の下には澤山の弟子があつて、榮朝が世良田の長樂寺に於て禪を鼓吹して居られた時には、皆京都から下て來て、禪を學んだと云ふのである、それ故榮西遷化の後、榮朝行勇の二人の弟子は關東に居りて、京都へは上らなかつたので、京都は榮西滅後、益々舊宗の勢力は盛であつて、此二人が上京したところで到底天台眞言に對して、自家の

一門を開くことは難いので、關東の野に潜んで熱心に禪を修して居られた。然るに其の高風を聞きて京都地方に學問を修めて居た人々が陸續關東に下りて、榮朝行勇を訪ふて禪を學んだが、遂に其下から辨圓の如き普門の如き榮尊の如き覺心の如き一方の大禪徳を出す様になる、これに反して京都に於ける榮西の門下は實に微々たるもので東山の草庵に明全が居られなければ、誰れ一人訪ふものもない状況であつて京都は昔にかはらず、舊宗たる天台眞言の天地である、然るに個様の場合に出られたのが道元禪師である、是れから曹洞宗の開立に及ぶのである、

我國禪宗史の上から觀れば、臨濟禪を傳へた榮西禪師は、草創したもので、曹洞禪を傳へた道元禪師は、守成した様である、榮西は圓密禪の三宗を兼ね傳へて、禪はその中の一であつた、固より榮西の本意は禪を興隆するにあつたが、當時未だ時運が開けないから、専ら禪を主張するに足らなかつた、然るに道元禪師に至つて、全く支那の禪の宗風を傳持した、禪師が曹洞禪を傳へて、始めて我國の禪の宗風が整備したは事實である、

道元禪師の事蹟は、委しく説く必要もなからうが、その始めて禪に意を傾けられしは、弱年の頃である、最初榮西禪師に教を受けられた様にも傳へる、は實は如何であらう、假令直接に教を受けられたとあるとしても極めて短い間の事である、榮西の寂せられて後、明全禪師の教を受けられた、此事は、道元が自ら言うて居られるが、その言によれば、明全が大徳であつたことも解る、略ぼ十年ばかりも教を受けてゐられた様であ

るが、榮西禪師寂せられた後、明全も京都では手足を伸ばすことが出来ぬ様の事情であつて、遂に榮西禪師の往跡を追うて宋に渡らうとした様である、貞應元年に明全道元等相携へて筑前博多から出發し、宋に渡り天童山、徑山、阿育王山等に登り、諸禪徳を歴訪したが、不幸にも明全は疾に罹つて天童山で客死せられ、其後道元禪師は、天童山の長翁如淨禪師に師事して、佛々祖々面授の大事を豁悟し、所謂正法眼藏の付屬を受け、明全の白骨を負ふて東歸せられた、個様の次第であるから、始終榮西禪師の弟子明全禪師から教を受けて居られた、然し曹洞禪の系統に關係はない、道元禪師の東歸せられたは安貞元年である、一たび京都に上り榮西の遺跡に留まられたが、京都で門戸を構へやうと云ふ様の考はなく、靜修を事として居られたが、其状況は全く榮西禪師が東歸後の状況に異つて居る、

寛喜二年の頃京都を出て、深草に幽棲せられた、深草は、唯留一事醒猶記、深草閑居夜雨聲、と云へる有名な作のあつた所で、靜修を事としてゐられたとが解る、深草の幽棲三年を経て、天福元年に興聖寺を開き、嘉禎元年に同寺に於て開堂を行はれた、これが我國で支那の禪宗の法通りに禪牀を設けて、禪を修した始めであるから、興聖寺は曹洞宗最初の寺であるばかりでない、始めて禪が行はれた寺である、その前後に門下漸く盛て、懷辨、詮慧、義尹、等の教を受けてゐた、懷辨は、首座に擧げられて一門の諸弟子を監督して居たやうにある、

臨濟、曹洞、二宗の開立の状況は、大に相違してゐるは、時勢の變遷もあるが、開祖の二禪師の行業が相異

してゐる、臨濟宗の開立に關しては榮西禪師は、勅許を蒙らねばならぬと云ふとて苦心せられたが、道元禪師は、其様の事には、一向意を留めなかつた、辨道話の中に、次の意味の言がある、靈山會上に於て、既に國王は、佛陀の勅命を受けて居るから、今日縁に任せて佛法を弘通すれば、其國の王は、佛法護持の任がある、今日改めて勅命を待つて、一宗開立するまでもない、個様の見識を持つておられた、大に味うべき言であらうと思ふ。

其後興聖寺の叢林は、益盛になるに隨ひ、自然内外の意を引く様になり、比叡山の僧徒の目にも附く様になつたから、俗悪なる煩累の出來るを恐れられたわけでもあらうが、その寛元二年に驟然として、同寺を出で越前に向けられた、これは、彼多野義重と云ふもの、請待もあつたからであるが、禪師が常に京都に隔りたる地に、山林泉石の便宜を求めて靜修を事としやうと云ふ考に投じたから、喜んで請待に應ぜられたとは、事實である、道元禪師が、北國に於ける法化は、これより始り、永平寺の開堂を行はるゝに至り、京、鎌倉、に對し禪宗一方の中心となるわけである。

それから越前に於ける、道元禪師は、益禪師の面目が、窺はるゝ様である、寶治元年の事である、鎌倉の北條時頼より強請せられて鎌倉に出で、時頼以下諸人のために、法門を説き且つ菩薩戒を授けられたが、道俗の瞻仰するもの、群をなしたと云ふことである、時頼等が抑留したけれども、越前の小院にも檀那があつて、小僧の齋盂を充たすに十分であるからと云ひ、袂を拂ふて歸られた、その時の詩に、今日歸山雲氣喜、愛

山之愛甚於。初と云ふ句がある、實際禪師が落々たる心情を吐露せられたものであらう、其高潔なるは、兎角個様の風であります、然るに、時頼は越前の土地二千石を寄進して衣資に供すとて、禪師の弟子玄明と云ふ者に寄進狀を渡しましたから、玄明は大に喜んで、早速寄進狀を禪師に呈しましたが、道元禪師は、固く辭して受けられなかつた、禪師が平素の心情から考へても、個様の寄進狀を受けられやう等はないか、玄明は、全く禪師の平素を熟知しなかつたわけであらう、禪師は、寄進狀を受けられなかつたばかりでない、玄明が、大に喜んだと云ふことを聞いて、その卑陋を惡まれ、我弟子でないとして、玄明を叱し下山を命せられました、下山を命せるゝと云ふは、破門せられたとて、玄明の耻辱は、この上ないものである、遂に玄明が、出てから後、その禪牀を毀ち、禪牀の下の土まで、堀り取つて捨てられたと云ふとである、これは一門の諸弟子を驚醒せられたものであらうが、其嚴峻なる處置は、實に驚くばかりである、また個様の事柄もある、後嵯峨天皇が、勅召したまふたか、固く辭して出られなかつて、後紫衣を賜ふた、一たび拜受せられたけれども、畢生これを着用せられなかつた、其時の詩で、永平雖谷淺云々は諸君かよく承知の事であらう、是等の行實は、榮西禪師に比較すれば如何であらう、榮西か、自ら大師號の宣下を請ひ、權僧正の官を求められた事とは、全く黑白の相異であるは、事々しく言ふまでもない。

榮西 道元、の二禪師が、我國の佛教を中興しやうとの考は、共に同様である、榮西も諸宗の一隅に、臨濟宗を開かうと云ふ考でなかつた、道元禪師も然うて、諸宗の一隅に、曹洞宗を開かうと云ふ様の考でなかつ



た、然し前後二禪師が、佛教中興の事業を擧ぐる順序等は、全く相異してゐるは、大に研究せねばなりぬところであらう、個様の相異なるからと云ふて、一に榮西禪師を抑へ、道元禪師を揚ぐる様の事は、事實を誤るであらう、輕卒に抑揚褒貶を下する様の事は、斷じて悪い、第一に時勢の變遷を觀察せねばならぬ、榮西禪師が臨濟禪を傳へてから、道元禪師が曹洞禪を傳ふるまで、僅に三十七年であるが、年間は平安朝から鎌倉時代に遷つる交替時期であるから、大に時勢の變遷がある、これを十分觀察せねばならぬ、要するに榮西禪師は、平安朝の國家佛教の後を繼がうとしたもので、外的勢力を藉らうとして、榮西禪師の一舉一動は、皆此主意から出てゐる様であつて、其事業の出來上らなかつた理由も、全くこゝにある、そこは前に説いた通りである、然るに、道元禪師は、最初から國家的佛教の後を繼がうとはしないで、個人的佛教を興さうとした、然うであるから、外的勢力を藉らうとしなかつたばかりでなく、極力外的勢力となる様なものを排し、専ら内的勢力を積うとした、道元禪師の一舉一動は、皆此主意から出て居る様である、所謂鎌倉佛教の面目は、此個人的佛教にあると、思ふが、道元親鸞は、これが主張に心力を盡したものである、それで榮西、道元、の行實事業を比較對照すれば、當時の佛教界に於ける、思想の變遷を見るとが出來るもので、漸次に新面目が顯れ出てゐるとが解る、今は國家的佛教、個人的佛教、の是非如何を論ずる必要はないが、平安朝の國家的佛教の弊害が百出して、鎌倉時代の個人的佛教が顯れ出たは、一大革新である、それで佛教史の一部分である、禪宗史の上に、其大革新事業の順序が示されてあるものと見ねばならぬ、實際然うである、

當時京都の禪宗の形勢は、如何であつたか、これを説かねばならぬ、京都は、平安朝以來の佛教の中心地であるから、所謂平安佛教である天台、眞言、の勢力は尙ほ持續してゐる、それ故榮西禪師も道元禪師も、十分手足をのばすことが出來ない、前に榮西は、鎌倉に逃れ去り、後に道元は、越前に隠れて仕舞はれたから、永く、禪宗興隆の時期かない様であるが、實は然うでない、所謂平安佛教である天台、眞言、の勢力は尙ほ持續してゐると云ふもの、佛教界は、一大革新の時期は益迫つてゐるから、鎌倉佛教である禪宗が興隆は、寧ろ自然の形勢が要求してゐる様な次第である、個様の場合に京都に上つて、京都の佛教界を震動し、大に禪宗を擧揚した大徳がある、それは誰れであらう、諸君は略ぼ承知のことであらうか、即ち臨濟宗の聖一國師辨圓である、これから其興隆事業を説かう、

前説いた様に、榮西禪師の寂せられた後、東國には榮朝、行勇、の二禪師が門戸を構へておられて、其下に俊才が群をなした、辨圓は其中の一人である、後、宋に渡り、徑山の無準師範禪師、の法嗣となり、仁治二年に東歸し、まつ西海の諸國に禪宗を擧揚し、寛元の初の頃京都に上つた、これは九條道家の請待に由るわけ、辨圓は西海の諸國を風靡した勢力を負うて京都に上り、九條家の別荘に這入り、其別荘で法門を説いてゐた、初めから個様の次第で大に内外道俗の意を引いたが、道家の本願で普門寺、東福寺、を開く様になつて、大なる勢力を張ると、なつたは、驚くばかりである、東福寺は、東大、興福、二大寺の一字づゝを取つて號したと云ふが、これで其規模も略察せられます、辨圓禪師は、東福寺開山となり、日

本國惣講師と云ふ號を得、同寺を八宗兼學の道場と云て、禪宗を擧揚する様になつたが、忽ち京都の佛教界の形勢は、一變して其中心は、東福寺に遷つた様に見える、

元來辨圓禪師は大變に活潑磊落の人であつた、學問は該博で、教、禪、に兼通し、辯論に達してゐた、諸宗の學僧は、一たび會見すれば皆舌を捲いて驚いた様である、勅命により宮中で宗鏡録を講せられた時、南北の學僧は、席に列つたが一言も發する勇氣がなかつた様である、辨圓禪師が南北の學僧に對せられた狀況は、一二の問答で察せらる、まづ俱舍、法相、等の學に關して詰問し其窮するを見て、教か解らない様では、禪が解らうはづがないと、一言の下に伏せられた様である、儒家某の問答がある、拙僧は釋迦牟尼佛から四十五代目であるが、貴下は孔子から何代目であると言はれたが、儒家某は、何の言もなく窮したと云ふことである、個様の次第で、禪師に敵對するものがなかつた様であるが、今一々話しては限りがない、要するに京都禪宗は、辨圓禪師によつて興つた、榮西禪師の後、臨濟宗第二の開祖と謂うてよからう、

### 第三、鎌倉中心の時代

第二期鎌倉中心の時代は、即ち鎌倉の五山が興隆した時代で、後深草天皇の初から、花園天皇の末に至る、七十餘年の間を假りに稱したものである、

最初に五山と云ふとに就て、一言せねばならぬ、これは全く宋の官寺の例に倣ふたもので、宋に教の五山、禪の五山、と云ふものを置いた、其の禪の五山に倣ふて我が國に初めて五山と云ふ稱を用ゐた、その何年頃であるか詳かでないが、宋より陸續禪僧が渡來して、京、鎌倉、に留住する様になり、五山の稱も出づることになつたものであらう、五山と云ふは、五個の寺と云ふ意義ではない、一つの格式である、初めは鎌倉の五山、京の五山と分れて居たものでない、京、鎌倉の諸大寺を合せ稱したものである、第一は建長、南禪、第二は圓覺、天龍、第三は壽福、第四は建仁、第五は東福である、初の第一第二は二個づゝであるが、是は同格である、それから五山の下に准五山と云ふがある、即ち淨智、淨妙、萬壽等である、後には建仁、東福、萬壽、建長、圓覺を五山と稱する様になりた、此の順序を見れば、鎌倉の建長、圓覺は下位に置かれてゐる、京都の諸禪刹が盛大に成るに従ふて、天龍、相國の新たに五山に列せらるゝとゝなつて、終に建長、圓覺は五山の列を除かるゝことゝなり、初めて鎌倉五山の稱が出来て、京の五山と對立する様になつた、鎌倉五山は第一建長、第二圓覺、第三壽福、第四淨智、第五淨妙である、京都にては五山の上に南禪寺を置た、これは亦宋の天界寺の例に倣ふたものである、京の五山は第一天龍、第二相國、第三建仁、第四東福、第五萬壽と云次第である、此の五山の位次は屢々變更して、位次を定めるについて大に争ふたことも、先づ五山と云へば京の方を重に云ふのである、五山文學と云へば必らず京都の方を云ふのである、今鎌倉中心の時代、即ち鎌倉の五山が興隆したる時代は、尙ほ京、鎌倉の諸禪刹を合せて五山と稱する時代である、此の時代に鎌倉に禪宗の中心があつた、

我國の政治の中心地は、常に佛教の中心となつて居る、平安朝以來京都が中心地であつた、然るに鎌倉幕府

が起りて政治の中心が東遷するに従つて、佛教の中心と同じく鎌倉に遷て来た、所謂鎌倉佛教の新宗は、皆東國に興つたものである、親鸞上人、日蓮上人等皆東國に入て、共に一門を開立せられたのである、そして禪宗は興隆の初め東西に分れて居たが、其中心は全く鎌倉にあつて、東國に興つたは事實である、辨圓禪師が京都に上つて、京都の佛教界を震動してから、禪宗は一たび京都に興隆したが、其實京都よりは當時政治上の中心である、鎌倉の方が興隆するに大に便宜があつた、京都を中心としたる平安朝以來の佛教、即ち公卿の勢力に依りたる天台、真言等は、政治の權力が全く鎌倉幕府に遷るに従て、大に其影響を受けた、次には武家の勢力に依つて興つたものが禪宗である、然れば辨圓以來京都に禪宗が興た同時に、鎌倉に禪宗が興り、東西相對して盛大になりたけれども、實際政治の中心である鎌倉は、禪宗興隆の中心であつて、執權北條氏の歸依で盛大を極めた、

鎌倉五山興隆の時代は、如何なる状況であつたかと云ふと、寛喜四年に宋の道隆禪師が弟子數人を率ゐて我國に渡來し、翌資治元年に京都を経て、鎌倉に下つたが、是が鎌倉禪風興隆の端緒を開いたのである、道隆の西來に就ては、當時種々なる風種があつた、支那では宋末元初の時代であつて、元が新に興て四方に勢威を張らうとして畫策經營してゐる時であるから、禪僧を日本へ送つたのは、元の密使であらうと云ふと疑れた、それ故に道隆が流説のため、一たび鎌倉を放逐されたが、後其嫌疑も晴れて、鎌倉に歸り北條時頼に歸せられ、建長寺を開くとになつた、其後普寧、正念、子曇等の高僧が陸續渡來して鎌倉に於て禪を擧揚し

た、正念は北條師時に迎へられて淨智寺を開いた、それは文永五年の事である、此等の高僧は皆宋末の衰運を見るに忍びず、騷亂を避けて來たので、いづれも皆北條氏の尊敬を受けて、鎌倉に住して居られた、而して弘安元年に、道隆は遷化せられて勅命で大覺禪師と云ふ禪師號を賜つた、これは日本に於て勅諭禪師號の初めである、同年に子曇は西歸した、個様の次第で建長寺の法席は空しくなつたが、時宗が特に支那に使を發して高德を請待するとなり、弘安三年に祖元禪師が覺圓等を率ゐて渡來した、禪元は支那に於て一世の大徳として仰がれたが、鎌倉に入りて大に支那禪を鼓吹し、弘安五年に圓覺寺を開くことになり、これより壽福、淨妙、淨智、建長、圓覺の諸禪刹所謂五山叢をならべて壯觀を呈した、正安元年には一寧、仁泰等渡來し、子曇も再び渡來し前後に鎌倉に入りて諸寺に住し、丁度支那人の居留地が出来た、一方から見れば支那では宋が滅び、日本で一の宋の國が開かれた様な状況であつた、元からは我國の内情を探る爲めに僧徒を遣はしたともある、即ち一寧は其一人である、それで此事は北條氏も能く知て居て、只尊敬して法門を談ずるばかりで、少しも政治上の意味のない様に取り扱つて居た、政治上の意味を帯びて來たものに對しては、北條氏は上手に尊敬して居たと云ふとは事實である、然し一寧は鎌倉の地を拂はれたともある、それでは個様な事實を論じて居る學者もある、頼山陽の如きはま、皮肉の言を放つてゐる、即ち當時支那から、日本の内情を探らんとして、僧徒を遣したが、其渡來した禪僧をば支那へ歸さず、専ら尊敬歸依し大いな寺院を建立して迎へたは、畢竟一種の牢獄に入れて監督した様なもので、北條氏の巧妙な手段であつた、即ち北

條氏の政治上の策畧である、固より禪宗に意を傾けて居つた譯ではないと云ふてゐる、然し此等の議論は、酷に過ぎてゐる、北條氏が禪宗に意を傾けて居つたと云ふとは、事實であつて必ずしも政略ではない、幾分か其の意味もあつたかも知れぬが、建長、圓覺等の建立まで、政治上の策略に基くと云ふとは事實を誤てゐる、時頼の如きは道隆、普寧に師事して實際禪の興味を解して居つた様である、彼の業鏡高懸三十七年、一槌打碎大道坦然、と云ふ遺偈などを見ても解るが、其命終の状は禪僧の遷化するにかなはずの様であつた、然し支那の禪僧が鎌倉に集まつて、一時支那禪を鼓吹し、北條氏に支那風の一種の感化を與へたとは事實である、北條氏が人民を愛撫し、政治に心力を盡したと同時に、朝廷に對して敬禮を失うてゐたとは、誰も知つて居るが、此等は支那風の一種の感化であらう、其大弊害は遂に古來例のない臣子の分限を忘れて、天皇を絶海の孤島に放流するに至つた、個様な事柄は支那に於ては平氣である、北條氏が個様の暴横を斷行したは、日本思想でなく、支那思想を受けて居ると云ふはねばならぬ、即ち鎌倉が開けて以來、支那風一種の感化を與へたと云ふことは、如何にも事實であると思ふ、然るに又山陽が個様な議論を吐いて居る、即ち北條氏修禪學論を作つて、大に禪宗を罵倒してゐる、悪い事は決して愚な者がする譯ではない、非常な悪い事は、非常に賢い者が行ふのである、非常な悪い事をするのは、必ず心中に固く執る所即ち一種の信する所があつて、斷行する者である、北條氏が固く執り信じて居るものは何かと云ふに、禪宗である、其禪宗の上から、人間世界の事柄を全く夢の様なものであると考へ、所謂一大平等觀で君臣の分、父子の分等に重きを置

かぬ事になつて、暴横も斷行したわけだ、確かに禪宗の與へた思想であると云ふて居る、諸君も承知のとであらう、北條氏修禪學論に就て大いに反駁を加へた人がある、それは前圓覺寺の洪川禪師である、然し其反駁は、要するに山陽を叱咤したばかりで、歴史上の事實もなにも擧げないから、正當な議論にはならない、山陽は、北條氏は禪に歸依したものでない、只政治上の策略から、支那の禪僧を尊敬したのであると云ふがら、北條氏九代の舉動は、禪の感化であると云ふは、前後撞着して居る、私の考へでは、前に言ふた様に支那風の一種の感化に基いたもので、即ち外國思想の影響であつて、禪宗の關する所ではない、丁度佛教が初めて我國へ渡來した時に、外國思想の影響で、一たび國家の秩序を害した様で、其形勢は同様である、然し後には禪宗にも、恐るべき弊害があつたとは、弘長記等に見えてゐるが、山陽の議論は禪宗を排撃するものであるから、一言辯明しておかねばならぬ、

然し鎌倉幕府の初めから、支那の交通が開け、陸續宋の禪僧が渡來して、漸く支那文學が盛に興つたと云ふとは事實で、幾分の弊害があつても、當時支那文學が我國の文明を助長した功績は、著大なるもので、全く禪宗に附帶した賜である、即ち一寧の下に出た友梅の如きは、實に一代の大家である、慧廣、靜照、師棟、圓旨、元光等の諸禪師は皆詩文に長じてゐた、是等の大家が輩出して、平安朝以來の文學界を一變して、所謂五山文學の新局面を呈する様になつたとは等閑に附してはならぬ、

當時京都の禪風は如何であるかと云ふに、京都とは、龜山、伏見の二上皇が深く禪に意を傾けたまひ、常に